THE

PHILOSOPHY OF COMPARATIVE RELIGIONS.

ISAAC DOOMAN

Vol. 4

米國アイザック、ドウマン著

日本米田庄太郎譯

比較宗教學四

日本聖公會書類會社藏版

比較宗教學卷之四緒言

比較宗教學講義第四年度分即ち本卷に於ては世界の三大宗教たる佛教、基督教及び摩哈嘿教を講説せり。余はもと他の一切諸宗教を講説し了りたる後、斯の三大宗教に及ばんと計畫せしが、今秋よりは一ヶ年間米國に歸らざるを得ざることとなりしを以て該計畫を變更するの已を得ざるに至れり。本卷は勿論「比較宗教學」の一部をなすと雖も、又一箇完成の書としても見らるる可し。余は其の内容の思想が將來の世界殊に亞細亞に於て起るらん諸問題（單に宗教上の問題のみに限らず、又の解釋に向て些少なりとも裨益する所あらんことを祈る。

次卷即ち第五卷に於ては、本卷及ひ前三卷に於て講説せざりし殘餘の諸宗教を講説し以て本書第一部即ち宗教歴史の部を完結せんと欲す。それより次の第二部即ち比較的哲學的宗教論の部に移らん。然り而して此の二部は各々夫れ自身にて完成す可し。

第五卷は余の米國滯在中に稿を了へ且翻譯をも了へしめて再び斯の國に渡り來るや否なや、直ちに之を出版せんとす。之れ多分來年の十一月か又は十二月頃なる可し。

本卷最終の章に於ては余はかの三大宗家のみの比較的研究を試みんと欲し、之を緒説中に述べ置きしが、後能く熟考したる上にて、やはりもとの計畫に從ひおくの可なるを知りたるを以て、之を第二部にまわしたり。丸山通一氏よ計畫の變更の數々なるを恕し玉へ。余は數年の歳月に亘りて漸々本書を出版せしが故に、其間には色々の事情もあり、又研究も精に入りしを以て前の計畫を變更するの已を得ざる場合にも遭遇し、又之をなすの却て好果を呈するをも感せり之れ余の計

書を更ふることの二三回にも及びし所以なり。余は敢て無繆の嫡子なる不變更を驕らんとは欲せざるなり。

或る有名なる批評家は本書の表題の比較宗教學とあるを譏め宗教史と改むるの可なるを指示し給へり。余若し本書第二部を書くの目的を有せざらんには初めより、しか名けしならん、又此の後と雖とも、若し何か事故ありて、只第一部のみにて止めざるを得ざる事とならば、即ちしか改めんされど余は屢述べし如く第一部は只第二部の緒論としてかきしものなれば、殊さらに別名を命ずるの必要なし。願くは比較宗教學と云ふ現名は第二部の出現を預告するものと解し給へ。

余は本卷を以て總て前三卷よりも必要なりと思惟すと云ふを要せず。又本卷の諸講義は悉く余自から筆をとりたり。余は三大宗教を其の始源に遡りて研究するを主眼とせり、故に其參考せし材料は皆な彼等の初代に屬するものなり。彼等後世の發達の如きは別に一種の研究を成すを以て爰には之に説き及ぼさず。

本卷も亦米田庄太郎君の翻譯せしられものなり。君尙ほ年少と雖ども、本書の翻譯に着手せられしより既に三年を經たり。余は日本文を解せざれども本卷の翻譯は前諸卷のよりも一段進歩しおらんと察するあり。

此等の蕪言を緒言として今本卷を公にせんとするに當て、余は只、同じ血より總ての人類を造り給ひし全能者の恩寵、讀者諸彦と本書の上に止まらんことを祈る。

東京三一神學校樓上に於て

アイザック、ドーマン

西暦千八百九十五年六月中旬

比較宗教學卷之四目次

第一章　緒説

第二章　佛教研究之材料

(一) 北部佛教文學

(二) 南部佛教文學

第三章　佛陀傳

第四章　佛陀傳の批評的研究、佛教之傳播及び其の現狀

第一部　佛陀とは何人ぞや。如何なる時代、如何なる國土に出興せしや。

第二部　佛教の傳播

第三部　佛教が其の奉信の國民上にぼし、影響及び其の將來の運命

第五章　一の哲學系統として佛教を論ず

第六章　倫理一の系統として佛教を論ず

第七章　一の宗教的系統として佛教を論ず

第八章　基督教、其の歴史的發達

(一) 基督の傳並に教に關する研究の古今の根本的憑據

(二) 基督の傳及び其爲人

(三) 其創説者の死に次で成立せる基督教會の組織

第九章　(四) 基督教の進歩發達及び其の奉信の國民上に及ぼし、影響
倫理的及び宗教的教義の一系統として基督教を講説す
第一部　倫理の一系統として基督教を講す
第二部　諸教義の一系統として基督教を講説す
第十章　摩哈嘿教(回々教)
(二) 摩哈嘿教を發生せし原因并に境遇
第十一章　摩哈嘿の傳記、彼が宗教の進歩及び其の人類の進歩上に及ぼし、影響
第十二章　摩哈嘿教の宗教的并に道德的教義
第一部　教義的の教
第二部　倫理的の教

比較宗教學卷之四

第壹章　緒說

過ぎし三年間之講義、即ち前三卷に於て講述せるは多くは希臘羅馬及び中央阿米利加の宗教の如き既に死滅に歸せるものか、又は婆羅門教及び猶太教の如き其元氣活力既に枯衰して人類之宗教的思想上毫も影響すること能はざるに至れるものどもなりき。されど之より講述せんとするは其に進取活動の元氣に充溢せる三宗教なり。惟ふに總て人類は將來一の普及一統的宗教を共奉するに至ちんとの識見を有する人士にして其慧眼を今日の宗教界に投せんか所謂他日の普及一統的宗教なるものは此の三教中に懸在することを知識するに頓ならざる可し。何をか進取活動的三宗教と云ふ。佛教基督教及び回々教の三宗教即ち是なり。(將來の普及一統的宗教に關する問題は本書第二部に至て詳論す可し。)

さて宗教學者の間にありては此の三宗教を目して普及教又は世界教と稱し、他は悉く排外教又は國民教と稱すること例なり。されど余は此の名稱を採用すること能はず。否な之を排斥せんと欲するなり。蓋し其傳播の範圍は一國民一地方に限れる宗教と雖ども精究一番其本原の精神を觀破すれば、是亦普及的一統的たらんの目的を以て建設されたるものなること明らかなればなり。猶太教婆羅門教の如き排外的のものと雖ども、其究極の觀念は亦世界人類の全体を舉げて其感化の内に包納せんことを旨とするなり。されど其傳播流布するに於てはもとより總ての宗教は同一の勢力と同一の應外的内容を有するに非らず。余又敢て之を云ふに非らず余の云ふ處は左なり。曰

く總て宗教なるものは皆均しく普及的一統的たらんの大望を有せり。故に千宗萬教中只三者にのみ普及教の名を專有せしめ、他は悉く排外教又は國民教てふ部類中に編入するは正當なる分類に非らず、且つ之れよりして終には宗教の眞實究竟の旨義を誤解するに至る可しと。今猶太教と回々教を對照して以て余の主意を解說せん。さて前者を國民教と稱し、後者を普及教と稱する論者（故クエチン氏は其中の錚々たるもの）は必ずや其理由として云はん。今や猶太人は汎く諸國諸土に散住すと雖ども、其宗教即ち猶太教は敢て猶太人の區域外に溢出して他の國民間に流布することなく、又人類の宗教的生活上毫も影響することなし。然るに回々教は全く之に反せり。彼は其至る處に根抵し、生長し、又繁榮を極むと。然り彼等の云ふ處は眞なり實なり。されど尙ほ余輩は一を排外教と呼び、他を普及教と稱するの可なるを知らず。夫れ一の宗教を捉へ來りて其能量を測り、果して能く天下萬民之信奉を受るに適するや否や、即ち能く普及的一統的たるを得るや否やを見んと欲せば、よろしくまづ其內部の組織機關を檢査せざる可らず。單に汎く傳布するの故を以て直ちに普及教なりと斷ずるは皮想の見なり。然り而して今其內部の組織性質よりして云はんか、回々教は毫も猶太教に勝れたりと云ふ可らず。否な實を云はゝ回々教は猶太教の一樣化一摸寫物に過ぎざるなり。夫れ亞剌比亞の豫言者馬哈默が蹶起一番回教を組織するに當てや、先づ猶太的一神觀をかりて以て其の根礎となしたりき、基督的一神觀にはあらざりしなり。猶太的儀式典禮をかりて以て之を裝飾したりき、單純なる基督的の儀式典禮にはあらざりしなり。彼は又高潔なる基督教的家族主義をとらずして、猶太的多妻主義をとれりしなり。此の如く一々對照しもて行かば、如何に回教と猶太教の關係の親密なるやを知るに難からざる可し、否な回教は猶太

教の一摸寫物に過ぎざるを知るに難からざる可し。然るに今や猶太教の蔑廢して振はず、有るか無きかの有樣にひきかへて、亞剌比亞預言者の宗教は亞細亞亞弗利加の諸大陸に跨り、廣大なる舞臺を蹈み、壯快なる活劇を演せり。是れそも如何なる勢力によりて然るか。猶太教の國民教なるに反して回教の世界教たるによりて然るか。そも又他に由緣する所あるか。余は其原因を探りて一事を得たり。其一事とは何ぞ。曰く其の信教を弘布せんとする回教徒の熱心是れなり。余は此の一事に至ては回教は總て他の諸宗教に勝れりと云ふを憚からず。今眼を放て回教徒の行商旅行するもの等を見よ。彼等は實に一の宣教師と稱するも敢て不可なきなり彼等は其の至る處に神の存在と其純一を說き、又馬哈默の最大預言者たるを教ゆるを以て彼等の一大義務と確信せり。該教の汎く諸國に傳播するは一に之れによる。然るに猶太教徒は全く之に反して、可成的其の信仰國風を隱斃するを以て一大要事なるかの如くに思惟せり。其の信教の弘布せざるはもとより怪むに足らざるなり。されど猶太教はもと一の傳道的宗教たるの使命を有せしこと、余の確信して疑はざる所なり。諸君沈思靜念舊約書を熟讀せよ。猶太教の根想の普及一統的たらんとするに有ること歷然たるを見ん。エホバの神意は先づ猶太人をして上帝及び人類同胞に對する眞實義務を會得せしめ、夫より此等の觀念を世界人類の間に傳播弘布せしめ、彼等を以て人類の眞實教育者たらしめんとするにあること明かなり。然るに彼等は此根本的最要なる觀念を誤解し、己等のみ獨り淸し、己等のみ獨り神の選民なりと誤想し、他の諸國民は一切顧みるの價値なきものとせり。然り而して彼等の度量のしかく狹隘にして又しかく寬容の精神に夬乏せしより、遂に己れ自から己か國家を破壞するに至れるなり。

又其中に含有する陋習の上より云ふも、回々教は總て猶太教に附着せる弊習即ち割禮の如きものを有する上、更に猶太教に存在せざる夥多の奇怪不道理なる慣例を有せり。且つ可闔の紙上には舊約書中に見へざる謬妄迷執の現じおることいと多し。然り其内容の上より云はゝ此の如し。而も今其實際の狀況を見るに、前述の如く回教は扶掖の勢を以て進動しつゝあるに、猶太教は悄々として死滅に歸しつゝあるなり。回々教の傳播力の實に驚く可きは左の一例にても知らる。即ち印度に於ける基督教と回々教の現狀なり。夫れ印度にありては基督教は權勢家の宗教なり。更に多數の誠意熱心なる宣教師は實に獻身的に傳教しつゝあるなり。而も其轉宗者の統計を檢するに、回教轉宗者の十分一に過ぎざるなり。先年の講義中にも述べし如く婆羅門教は宛も如何なる利器を以てするも、尚ホ破壞する能はざる堅城鐵壁の如し、而して若し今日にありて之が城門の破壞を試み得る利器ありやと云はゝ、余は只一の回々教あるのみと云はん。ァゝ回教は實に愚凝蒙昧の徒を除きては、何人をも引着するの力なき宗教なり。而も今日の進歩は如何、遙かに基佛二教に勝れるに非ずや。但し其進歩と云ふは只範圍の膨脹と信徒の增加を意味するのみにして、決して人生の眞面目を發揮し高尚なる理想の實現を進めたりと云ふ意に非ず。彼は思想の自由を拘束し、意志の發動を牽制す、如何で其の配下の國民の智識を啓發し社會の改善を進捗するを得んや。試みに今日該教を信奉する國民を見よ。其の墮落腐敗の慘狀は以て該教の性質を明示せりと思ふ。殊に埃及の如き國民の現狀をとつて、之を其の千有餘年のむかし基督教及び希臘羅馬の文明の感化を蒙りて駸々進歩せし時代に比較せよ。回教の腐蝕力の如何に強大にして如何に恐る可きかを知るに餘ある可し。而もこの恐ろしき腐蝕的宗教が、今や半角の勢を振ひて諸國民を席捲せんとするなり。而して其傳播力の迅速なるは實に基佛二教に勝れること遙かなり。

勿論余は先づ其の性質歴史等に向て公平無私なる研究を施したる上に非ずんば、何れの宗教に就ても決して批判を加へざる可し。今回々教の性質に就て云々したるは、普通の宗教分類法、即ち天下の諸宗教を分ちて世界的國民的の二種となすの可否を論ずるに當て、實に已を得ざりしを以てなり。さて上文に縷陳しつる所を概括すれば、單に其の傳播の廣狹如何を以て、直に一の宗教を國民教と稱し他を世界教と稱するは不正不當なりと云ふにあり。惟ふに其奉信者にして之を普及的世界的たらしめんとの覺悟を有せんには、何れの宗教も均しく然かなるを得ん。今日の猶太人にして若し其の財貨を得んとするの熱心を轉じて、之を其の布教に注かんか、猶太教とて決して宗教界の進歩的競爭上他の背後に躊躇するの悲酸を嘗めざる可し。さればとて余は宗教進歩の原因を以て只一に其信徒の布教的精神の如何に歸するものにあらず。此は本書第二部に至りて詳しく論せん。茲には只單に傳播の廣狹によりて直に天下の宗教を世界的國民的の二類に大別し、且つ其性質上大懸隔あるが如くに論ずるの不可なるを說くのみ。

さて上述の次第なるを以て、余は本書に於ては彼の三宗教を總稱するに生きたる宗教なる名稱を用ひんとす。人或は曰はん、地球上に存在する宗教は豈只かの三宗教のみに限らんやと。然り婆羅門教は今尚ホ二億有餘の信徒を有し、猶太教徒は世界至る所に散在し、道教の信徒亦少からず。されど余は存在する宗教と生きたる宗教を區別するものなり、之を混同するものにあらず。以下論述する所を見よ。

夫れ存在するもの必ずしも生きたるものに非らず。所謂生きたるものとは存在の上に生命を有し

且つ生長發達するものを云ふなり。余はかの三宗教を指して生きたる宗教と云ふ。乞ふ彼等の現狀を觀察せよ。先づ基督教界に眼を投せよ。今や世界至る所に基督教徒は其布教機關を建設し、而して其費する處の金力と勢力は實に漠大なり。是に於てか世人は必ず一の疑問を發するならん。曰はく、そも〳〵彼等は如何なる動機の刺激を蒙りてかく巨大なる金銀生命を犧牲に供するや、彼等は如何なる目的を達せんが爲に此く献身的に奔走するやと。乞ふ彼等のなす所に推して彼等の動機を察せよ。彼等は實に其心情に汪溢する宗教的生命活力の刺激に堪へずして、其金銀生命をも忘るゝに至れるなり。彼等の宗教は活々たる生命を有せり、彼等が万難を排して布教傳道に献身するは、實に此の活生命の活動によるなり。然るに或る人は評して云へり。外國傳道は實に世界人類の現情及び宗教的需要の如何を知らざる、無智蒙昧なる愚人の建立せる壯大なる僞善的紀念碑に外ならずと。ァ、僞善か、愚昧か、現代の大勢を達觀せよ。夫れ拜金的思想の旺盛を極め、强勢を張ること、現代の如きは、人類の歷史上他に見ざる處ならん。マシユウ、アーノルドが英國民の動物的に醜化しつゝありと評せしは現代に非らずや。酷熱燒くが如き日光を恐び、やゝもすれば蜂起亂暴せんとする蠻民に接して廣漠たる阿弗利加の內地を行商する人々を見よ。彼等は如何なる目的に臻達せんが爲めに、此く千辛萬苦を忍ぶや。巨万の富財一生の榮華、是れ彼等が最大の目的、最高の理想に非ざるか。然り而してかく拜金的大潮流の漲溢するうちに立ちて、却て巨大なる金銀を投し貴重の生命を惜まず、正義の觀念を公布し眞理の光明を發揮せんとするの大事業、是れ僞善か、不正か、はた愚昧か。諸氏夫れよく僞善を以て此の一大現象を解說し得るか、愚昧を以て其淵源する所を說示し得るか。ァ、此の偉大なる事業、此の驚嘆す可き現象、是れ基督教の生命活力の活現に非らずして何ぞ。是れ千九百餘年前ナザレの基督が其の信徒の心情中に注入せし生命活氣の煥發にあらずして何ぞ。余は茲に外國傳道の要を說かんとするにあらず、又之を賞讃せんとするにもあらず、只此く偉大なる現象、嘆賞す可き事業の其淵源する所を探求すれば、一に基督教の生命活力の活動に歸するを說き、以て生きたる宗教てふ意義の一班を示し、且つ併せて之を信徒の無智に歸し僞善に歸するの非なるを一言辨ずるのみ。

回教の傳播に就ても亦然り。亞細亞亞弗利加の大陸諸嶋に教祖の福音を宣傳弘布する可蘭は、颯然風雲に乘して飛行せしものにあらず、其生命活力と信徒の信仰熱心とによりて奴濤を蹶り萬難を排して進行せしものなり。然り而して可蘭は斯生命活力を具有し、信徒は斯信仰熱心を抱懷する上は、回教は生きたる宗教なり。余は之を生きたる宗教の一に數ふ。之に反して猶太教は其の教理儀式上に於ては彼に勝れること一番なるに拘はらず、生命なく活力なし、故に余は之を生なき宗教と云ふなり。

佛教に關しても亦然り。彼れは從來前二者の如く强大ならざりしかと、今や大に復活の徵候を現し、進步の曉光を放ち、彼等と一大競爭を試みんとするの氣慨醞勃たるを見る然り而して日本佛教は世界佛教中最も活潑なる運動を試みつゝあるが如し。夫れ佛教は永く惰眠を貪り、恍惚として世を徒過し來りしが、今や清醒憤起の徵候何處にも現出せり。而して彼一たび清醒蹶起せんか其の精神の傳道的なるからに、漸々大光彩を煥發するに至らん。されど彼斯狀態に到達せんには今一大改革の其上に加へざる可からざるものありて存するなり。

更に佛教は輓近歐米學者の潛心精究する處となれり。蓋し其の原因は彼が抱有する哲學的思想の

深奥にして、且つ其所說中には近世科學的研究の結果と吻合するもの多しと思惟せらるゝを以てならん。實に左の如き言を吐喘する學者すらあるに至れり。曰く、若し科學すら一の宗敎を要すとせば、其の宗敎は佛敎を措きて他にあらざる可しと、此かる佞言の所謂大家の口よりもれ出づるに至れるからには、其研究の愈々隆盛に趣くは自然の勢なり。從來第十九世紀の科學を代表せる人々は多くは宗敎の必要を認めざる人か、又は之に向ては全く無頓着なる人なりき。蓋し彼等は宗敎と科學は決して相提携すると能はざるものなりと思惟せしを以てなり。然るに今や其內より科學的宗敎は發見されたり、此は佛敎なりと揚言するもの現れ出づるに至れり。かくて彼等は自然該宗敎に注意し、又專ら之れが研究に從事するものすらあるに至るは、敢て怪むに足らず。近來歐米にありて佛敎研究の盛大を致せる原因は實に茲にあるならん。先年米國宗敎大會に列席せし日本佛敎の代表者の一人が、今や歐米にありては基督敎は日々に衰頽を崩し、佛敎之れに代らんとするの大勢なりと云へりしは、蓋し此形勢を觀察せしものならん。

余つら〳〵日本佛敎徒の現況を觀察するに、彼等も亦叨りに科學と同盟して以て基督敎に當らんとするが如き傾向あるを見る。されど余の見る處によれば、彼若し基督敎を斃さんが爲に科學と同盟せんか。たとひ其目的を成就するとあるも亦かの獅と鬪はんが爲に人間と同盟せし馬と同一の過失に陷れることを自覺するの日遠からざる可し。この有名なる昔譚は此の點に向て大なる敎訓を與ふ可しと思へば左に其大意を說かん。

今はむかし獅と馬のあひだに大なる爭鬪始まりて永く勝敗決せざりし事ありけり。或る日の事に馬ァト思ひけるは、吾は如何にしても獅と鬪ひて勝を制せんことおぼつかなし。若かず、

人間と同盟して彼に當らんにはと。此くて此事を人間に談じけるに彼直ちに承諾しければ馬は大に喜び、更に言葉をつぎて云ひける樣、我背に鞍を置き貴公之に乘り玉へ、彼奴と鬪ふに便よからんと。彼は又直ちに其言に從ひて打ち乘りつ。さて人馬諸共勇みに勇みて鬪場に出で力を協せて獅と鬪ひけるに、さすがの獅も遂に打斃されぬ。馬は宿望をとげて大に喜び、厚く人間に謝し、さて鞍を下らんことを乞ひけるに、人間は鞍上に跨りて逍遙することの甚だ便利よく、且つ甚だ愉快なるを感じ、敢て其求めに應せざりき。此くて馬は終に人間の奴隷、人間に使役せらるゝものとなりたり。もとは彼れも自由獨立なるうるはしき動物にてありけるに。

斯昔譚の敎訓は甚だ明亮なり。敢て喋々辨說するの要なかる可し。夫れ基佛二敎間の現今の差違は如何に大なるとも、彼等互相の關係は近世の唯物的科學に對するよりも更に親密なるなり彼等は共に人類をして其未來の運命に向て高尙雄麗なる觀想を有せしめ、現來兩界に通ずる橋梁を架せんとするなり。彼等は共に人類の理想をしていよ〳〵高潔純淸ならしめ、其の存在をして無限の未來に亘らしめんとするなり。然り而して科學にありては此等の觀念は一切不用なり。彼は人間を以て其前に未來なく、只現在あるのみの動物となすなり。無限の未來に於て完全ならんとの理想は、彼の所謂人間の有せざる所なり。

更に本題に立ち戻りて生きたる宗敎と死せる宗敎、詳しく云はゝ今尙*存在するも既に其生命活力の枯衰せる宗敎の別を說かん。而して神道と天理敎を以て例とせん。夫れ神道は今尙*存在し且つ多くの信徒を有せり。されど其發達力を失ひ、活動を滯止せること年久し。惟ふに或る急激なる

改革の起るありて、復活の氣運勃起するにあらずんば、再び其生命活力を回復すること能はざる可し。之に反して天理教を見よ。彼は其内容に於ては大に神道に劣ると雖とも、活潑々たる元氣生命を有し、日に月に進動膨脹しつゝあるなり。余輩は之をとつて一の生きたる宗教と稱するも敢て不可なきに似たり。今日の狀態によりて判ずれば、彼は一の普及教、少くも日本内の一普及教となるまでに發達せんこと能はざるに非ざる可し。今古書の傳ふる所によりて見れば、上古の神道は甚だ純潔にして活潑なる宗教なりしが如し。(神道の事は本書第五卷に至て講述す可し)。されど今や全く其元氣進動力を失へり。然るに天理教は其内容の彼に劣れるにも拘はらず活動の氣に充ち、日に月に長足の進歩を現せり。今日の有様によりて見れば、彼は日本將來の宗教たるに於て基佛二教よりも幸機會を有するが如し。若し彼が感化を及ぼせる範圍にして一層廣大ならんには、余は之れに生きたる宗教なる名稱を冠し、かの三教と並列するを憚らざるなり。されど其舞臺のあまりに狹隘なれば、今はしばらく只かの三教のみに此の名稱を限りおかん。

さて基佛回の三大宗教は曾に其の生きたりと云ふ點に於て類似するのみならず、又各々一の教祖を有するの點に於ても肖似するなり。彼等は各々一の教祖を有し、又之を中心として發達せるものなり。他の諸宗教にありては然らず。韋陀教の如き、婆羅門教の如き、皆幾多の星霜を經過する間に漸々國民的宗教思想全体の蘊積凝結せるものなり。彼等は一箇人の事業として叙せらるゝを得ず。但し種々の制度を組織形成し半開的狀態より完全なる發達に導くに於て、一個人の力の甚大なりしこと敢て疑ふ可らず。モーゼの猶太教に於ける、孔子の支那上古の宗教思想に於ける即ち此例なり。されど彼等は其等の制度を創設せしに非らず、只從來遺傳せる處のものを集め之を大成せしまでなり。彼等は實に其等の宗教に活氣を入れ、新生命を注ぎしに相違なし。されど其等の宗教其物を創設せしとは云ふ可らず。夫れ猶太教の形成組織上に於けるモーゼの力は實に甚大なりしなり。彼は實に一新時代を開きしなり。立法家として、組織家としての彼の精神は、猶太國民史中各紙上に顯然たり。其の勢力ひきて今日に絶へず。されど猶太教を以てモーゼ教なりと云ふは一大誤謬なる可し。かの三教外の諸宗教に於ては皆然り。

然るにかの三宗教にありては事情大に異なれり。彼等は各々一の教祖創設者を有し、且つ其の教祖の名をとつて其の名稱とせり。勿論余は彼等は毫も他の宗教に負ふ處なしと云ふに非らず、既に上文にも回々教は猶太教の復寫物に過ぎずと云へり。基督及び基督教の上に於ける猶太教及び希臘羅馬の思想の影響も亦決して少々なりと云ふ可らず。佛教が其前行的諸宗教、殊に婆羅門教に負ふ所多きは世人の均しく是認する所なり。されと之れあるに拘らず、佛陀が婆羅門教を離れ、祖先傳來の信仰を投し、更に位をも家をも棄てゝ衆生濟度の本願を成就せんが爲めに一宗教を開きし時は、彼は實に一の新しき基礎を起せしなり。其觀念は如何程婆羅門教に負ふ處あるにもせよ、彼は一新宗教の創設者なり。婆羅門教内の一改革者を以て目す可らず。夫れ一箇人か前在の材料によりながら、而も之れに自家特殊の創見を附し、全然前者に異なれる一新物を製作するときは余輩は其人をさして其物の創作者と云ふなり。されば宗教上にありても、タトヒ如何程多く他に假借する所あるも、全然其物に異なれる一新宗教を組織し其宗教に一個特殊の旨義貫通するあらば、吾人は其人を呼んで其宗教の始祖と稱せざる可らざるなり。然り而してかの三教中にて、他より種々の觀念を假借せしとの最も明かにして且つ多きは回々教なり。されど尚*回々教には他

に異なれる特殊の觀想あり。吾人は之を以て獨立の一宗敎となし、麼哈默を呼んで其開祖と云ふは決して不當にあらずと信ず。

さて上文に於てかの三敎は各々一の敎祖を有する點に於ても類似すと云へりされど余は近代の批評家中基督及び佛陀之存在を疑ひ、又之を否みて詭辨を弄するものあるを知らざるに非ず。されど今之を評論するの暇なし。後章各敎祖を論するの條下に至て之を詳論せん。茲には只左の言を以て過さん。曰はく、斯る批評は余輩の絶對的に認許すること能はざる者なり是れ全体に反するが如き觀ある僅少なる事柄をとらへ來りて、之より突進せる速斷なり。歷史的連鎖の各環を蹈みて除々に進行せざるより起れる謬說なりと。

さて此三宗敎を講說する順序は其の發現の前後によれり、其優劣の次第によれるに非らず。故に第一に講說すればとて余は其を以て最も勝れたるものとなすに非ず。

又此の三敎の講究に於て余の最も憑據せし材料は主として各宗の聖經其物なり。基督敎及び回々敎にありては余輩は彼等に關する一切文學の源泉基本として新約、可蘭の二書を有す基督の傳記に關する著作は甚だ巨多にして數ふるに遑あらず。後章基督の傳記を論ずるに至らば其の尤も依據せしものの名を擧ぐべし哈默の傳記に關する書は其數少なしと雖も所說完全なり。蓋し彼の生活及び心意の發達は耶佛二聖の如く複雜ならざるを以てならん。されば今回々敎の研究に於て要する事は、只可蘭の公平該博なる批評的檢察是れなり。然るに佛敎に至ては事情大に異なれり。其研究は實に困難なり。彼には新約全書の如き、可蘭の如き、其全班を表顯せる一部完結の書なし。早代より南北二派に分れ、而して各々種々相異なれる儀式慣例及び廣大なる聖文學を產出せり。而して斯廣大なる文學中にて佛敎の本義を搜檢するに於て尤とも必要なるは「トリピタカ」、即ち三籃(三藏)なり。南北兩派各々之を有す。佛敎の人世に與へしは只斯書のみとするも、余輩は釋迦に對して大に負ふ所あるを認めずんばある可らず。余は又梵文漢譯釋迦傳の英譯よりして多くの補助を得たり。此の他多數の佛典はマクス、ミユラー氏の斡旋によりて、東洋聖典集中に英譯されたり。余輩は深く氏に感謝せざる可からず。

佛敎に關して著作せる歐州の學者は其數甚だ多し。其內獨逸にありてはオルデンベルヒ氏、英國にありてはリス、ダヴイド氏最とも著はる。スペンス、ハーデー氏の佛敎書は南部佛敎に關する著作中最とも該博精細なり。

既に前文中に一言せし如く三敎研究の材料權與に就ては各敎の條下に至て略述す可し。茲には只本篇の計畫の大概を諸君の前に開示し以て如何なる骨組の上に斯等の講義を造り上げしかを示さん。

先づ最初の一章を緒說とし、第二章より第七章までの七章を佛敎に第八第九の二章を基督敎に、第十第十一の二章を回々敎にあてたり。而して最終の一章に於ては斯三敎を比較對論せり。又各敎講說之次第は、初めに研究の材料を論じ、次に敎祖を論じ、終りに敎義を論せり。

さて諸宗敎の比較的研究は本書第一部、即ち歷史的部分を完結し宗敎世界の全体を搜檢し了りたる後、第二部、即ち哲學的部分に至て之を試みんとすること前諸卷に於て屢々云へり。然るに今又本卷最終の章に於て單に該三宗敎の比較を試みんとすと云へり。之れ稍や、本書一般の計畫を攪亂するが如しと雖とも、すでに上文のうちにも云へりし如く、斯三敎は他の諸宗敎の既に死滅に

歸し又は活力を失へるに反して、其の信徒は日に月に增加し其元氣はいよ〳〵活潑となり、人類の進步上强大なる影響を及ぼしつゝあれば、特に彼等を比較對檢して以て其の異同を判別するは、目下最とも緊要なる業と思惟するを以て、今斯三宗敎を講述するの隨手に斯研究を試んとするなり。

余は本卷諸問題の實に緊要なることは十分に意識せり。從來講說し又以後講說せんとする總ての問題中最とも緊要なるものなりと云ふも、諸君は決して之を否まざる可し、故に彼等を比較評論するに先だちて十分材料を搜檢し、又之れに向て精細なる研究を施さんことを要するなり。又己れの信奉すると否なとに拘はらず、孰れの宗敎に對しても其の美を見ると共に又其醜をも看過せざるの公平眼を要するなり。されど毫も偏見を存せず、八面玲瓏たる精神を保たんことは、實に難し。余之を望むと雖とも或は不識不知の內に、一種の偏見に陷るやもはかられず。又佛者にして本書を劉覽せんとせらるゝの士は、或は本書を繙かるゝにさきだちて想像せられん。著者は基督敎の宣敎師なり、講堂は基督敎の神學校なり、故に本書は基督敎の美を稱揚するに過ぎて他敎の德を陰蔽することの多かる可きは察するに餘りありと。かゝる人々に向ては余は只本書を終りまて精讀し玉はんことを乞ふのみ。他に答ふるの道なし。余は常に眞理の標準に從ひ、各事各物只誠實に敍述せんことを約せり。余は自宗の利益の爲めに眞理を曲げざらんことを尤とも注意せり。親しく余に接し。余が從前の講義を耳にせられし人々は熟知せられん。余は機會の現はるゝ毎に、基督敎の組織中正しからざる或る物の存するを發見する毎に、又基督敎國が他の微弱なる國民の上に流せる慘毒を見るごとに、之を痛論して毫もはゞかる處なかりしを。而して次下の諸講義に於ても余は同じ標準に服膺せんことを熱望するなり。若し余が研究にして余を導きて、終に一の宗敎としては基督敎は最勝無上なりとの斷案に達着せしめんも、之れ余は基督敎徒なるが爲めにあらず、余が內心に於て眞理の正道と確信せる所を進行せるが爲めなり。如何なる境遇の下にあるも余は內心の確信を曲くるを好まず。若し我が內心の確信を曲げても、或る世俗的利益を獲んと欲せば、余はかゝる問題を講說せざる可し。他に適當なる問題は存するなり。否なよし之を講述するも只各敎を別々に講述せんのみ。即ち二者をセミチック宗敎族と稱する名目の下、他の一をアルヤン宗敎族と稱する名目の下に於て各々其の適當なる地位に排列して以て之を講述せんのみされど余は今斯問題を研究せり余の確信は三敎の永く且つ深き研究の後に成熟したるものなり余は茲に余が宗敎的經歷を略述せんも敢て冗言に非ずと信ず。余は基督敎徒の家に生れ、基督敎徒として敎育されたり。而かも二十五才の春を迎ふるまでは回々敎國に住居し、又夫より汎く回々敎諸國及び基督敎諸國を旅行せり。而して今や七年の星霜を佛敎の感化の下にありては最も進步的なる國民の內に送れり。夫れ己が國を離れ、己が信仰とは異なれる新しき觀念思想の下にある異國民と接觸し、又其の內に住居する人は、よし容易くは其等の觀念思想其物を咀嚼し得ざるも又彼等より直ちに深刻なる刺激印象を受くるものなり。故に余はかの三敎の感化を蒙れる多數の國民中に多くの年月を送れるによりて彼等が善美なる點と共に惡醜なる點をも親しく實觀するの好機會を得たりと云ふは、決して我が觀察力の銳利なるを自負せんとには非ざるなり。勿論茲に善美なる點又は惡醜なる點と云ふは彼等が敎義上に就て云へるに非らず社會的機關を運轉するに於て彼等が有する實際の能力に就て云へるものなり。夫れ天下の諸宗敎中には其敎義上に

於ては論理精嚴なるにも拘らず、人類社會をして發達進歩せしむる精神生命に至ては全く乏失せるものあり。輓近の對基督教學者の大多數は云ふ。基督教はプラトーの哲學教説の上に十字架を飾り附けたるものに過ぎずと。斯説中如何程の眞理を含みおるやは他章に於て論せん。茲には余は只左の如く答へん。今其の教義教説に關する上は、基督教は多くの觀念否な一切の觀念を希臘哲學より借りたりと假定するも、彼は總て其等の枯死せる前在の哲學に一の精神生命を注入したるものと云はざる可らず。而して斯生命のみにても人類に與へたる彼の恩惠の價値は實に量る可からざるなり。夫れ基督教の生命即ち十字架の觀念とは全く己を忘れ己を捨てゝ人類の進歩改善の爲めに、其の生命能力を犧牲に供するの謂なり而して之れ實に正しく適當に其價値を測定する能はざる精神なり。蓋し斯の精神は總て心靈的物質的進歩の眞中心、眞實生命なればなり。之れ實に下等動物的私慾より、人類全体の安寧平和の爲めに身を犧牲に供する最高德にまで人類の進歩するに至れる眞實心靈なり。然り而して吾人が深く其の教義文學の底蘊を探らず、只其の感化を蒙れる國民間を旅行することによりて其の宗教に就て感識し得るは正に斯精神斯生命斯活動力なり」勿論其の教義教説及び儀式文學を併せて組織的に宗教を研究することは、其の宗教の眞義本領を正解するに於て、全く無用なりと云ふに非ず。若し此等の研究を措き、單に其の社會的方面のみより研究せんか、到底偏僻なる觀解を免るゝ能はざる可し。之れ實に宗教を以てプラトー又はルーソーの唱道したる社會哲學と同臭無差別のものとなすに至らん。されど余の意味する所は左なり。曰はく宗教の研究は書籍上よりすると共に、又其の宗教の產出したる社會的組織上よりもなさざる可からず。此の二種の研究は相待ちて始めて功を奏するものなり。只書籍上より研究する上は論理精嚴にして所説眞實なるが如く見もる教説が其の人類社會の上に應用さるゝに至て甚だ有害なる結果を呈すること屢々なり。余の該三宗教の旺盛なる諸國を旅行せしことによりて大に感識する所ありたりと云ふは即ち斯點に就てなり。

各宗教の經書の研究に就ては、新しき光明を與ふならんと思惟せる書は總て參考するを怠らざりき。

此等の緒言を以て、次に人類三分一の尊崇を吸收し、又彼等が行爲を整理する一大宗教即ち佛教の研究に進まん。

第二章　佛教研究之材料

前章に約せし如く先つ佛教より講説し始む可し。さて佛教は三宗教中最とも研究するに困難なるものなり。而して斯困難は其撿討す可き書類のあまりに浩瀚なると、其の大部分は余輩の知らざる言語を以て記され、且つ其等の書類を得ることの甚だ容易ならざるとに基因す。他の二宗教即ち基督教及び回々教に於ては情態大に異なれり。彼等は各々教權ある經書を有せり。新約全書及び可蘭是れなり。該二書は彼等が各々其宗教上究極の權威をおく所なり。彼等が根本的原理を研窮するに當て吾人の訴ふ可き究竟の材料なり。但し該二書の果して、傳説の教もるが如く信據す可きものなるや否やは輓今批評學者の盛に論諍する處にして、其の孰れに論着するやは未だ確かならずと雖とも、とにかく該二宗の研窮上究極の權輿たり、最良の材料たることは何人も異論を挿ざる處なり。該二教に關して後世に現はれし書類は實に汗牛棟充も只ならず。而して彼等は該二教の歴史發達を研究するに於て甚た緊要なることと云ふまでもなしと雖も、今之を該二書に對比するに曾に其の價値の一段劣れるのみならず、更に毫も力なし。蓋し彼等は教權を有せざるものなればなり。余輩は毫も後世の註釋著作を繙かざるも、若し能く新約書を熟讀精究せば以て基督教に關する諸般の智識を得るに難からざるなり。回々教に就ても亦然り。彼に關する萬般の事柄は只可蘭を學ぶによりて知り得らるゝなり。されど佛教にありては然からず。彼は浩瀚なる三藏を有すと雖とも、基回二教の新約可蘭の二書に於けるが如く特に其生滅を共にする程の關係ある經書を有せざるなり。もつとも傳説は三藏の大部分を釋迦佛に歸すと雖とも、其の果して然るや否やは未だ正確ならず。佛教徒(殊に近世の佛教徒)と雖とも漫然彼等を採て佛教を判斷す可き教權的經書となさゞる可し。

故に今佛教を講究するに當ては先づ其の材料を搜檢せざる可からず。本章先づ之を論せん。而して次章よりは左の順序を以て進行す可し、

第三章　毫も私見を加へず、傳説の儘に釋迦の傳記を描寫す。

第四章　釋迦の傳記及び釋迦の傳説に關する諸觀解を批評的に稽査し、次に佛教の傳播、其の現狀及び國民上に及ぼせる影響を概説し、終りに其將來の運命に付て一瞥を投ず。

第五章　哲學の一体系として佛教を論す。

第六章　倫理學の一体系として佛教を論す。

第七章　宗教の一教系として佛教を論す。

右之順序を以て之より佛教に關する主要の諸問題即ち佛教の文學、教祖、及び教理のあらましを約説せん。而して前卷に於て講説せし婆羅門教に關する諸智識は嘗て一言せし如く、佛教の精神及組織を領解するに於て大に補益する所あるものなり。蓋し婆羅門教の佛教に對する關係は宛も猶太教の基督教に對する關係の如きものなればなり。而して先つ能く舊約書を學ぶに非ずんば如實に基督教を領解する能はざること、諸君の熟知せらるゝ所なりさらば今佛教を研究するに當て再び前卷を繙き婆羅門教に關する部分を復讀せらるゝも決して無益に非ざる可し。先づ本章に於ては主要なる佛經を一わたりわきまへおかん。既に第一章中にも一言せし如く佛教文學は南北の二部に分たる、其の印度より北方の諸國及び日本支那等に傳存するものを北部佛教文學と總稱し、

譯者曰、普曜經に關する本文の記述は大い誤まれる所あるが如し惟ふに著者はビール氏が其の英譯佛所行讃序文中普曜經に就て云へる言を信じてかく述べられしものならん。されど今實際普曜經及び其の異譯なる大莊嚴經に就て撿するに、共に兜率天にありて佛降臨の順備する事より筆を起し、迦比羅伐窣堵城に還りて父淨飯王を見るに至て止む。さらば完備せる釋迦傳とは稱す可からざ

錫倫、遐羅緬甸等に傳存するものを南部佛教文學と概稱す釋迦之傳記に關しては北部文學は遙かに南部文學より富贍より。先づ北部文學より講說し始む可し。

（一）　北部佛教文學

最も緊要なる北部文學の經書中特に釋迦の傳記に關するものあり。是れ南部文學に於ては余輩の未だ發見せざる點なり。支那譯にては釋迦の傳記十四部ありしが、其の恐くは今日に傳はらず。されど尙ほ彼が生涯を學ぶに於て不足を感せず。而して支那語釋迦傳中に見ゆる主要之事柄は南部文學中に散見するものと大差あるなし。さて印度より支那に渡れる釋迦傳中最も古きものは西紀後六十八年より同七十八年の間即ち佛降誕後六百年頃に達す。此の書今は闕けて傳はらずと雖も、其の名は諸目錄中に殘存せり。又其所載之事柄も他之經中該經より引用せる所あるを以て、其大概は察知せらるゝを得。即ち本書は五卷より成りて、釋迦降誕の事より始め菩提樹下正覺を得るに至て止まるが如し。但し斯書は支那語釋迦傳中最も古きものなれば、之を發見し之を研究せんことを勉むるは甚だ必要なる可し。又其の支那語に翻譯されたるは西紀後第一世紀の初めにあれば隨て其梵原文經の年代の更に古きものなるは明かなり。譯者曰上文云ふ處の支那語最古の釋迦傳とは、竺法蘭（デーバンカラ）の譯翻せし佛本行經をさすならん。次に西紀後百九十四年に翻譯されたるものあり。斯書は佛陀定光佛に事を承くるより筆を起し、菩提樹下正覺を得るに至て止む。譯者云ふ之れ後漢孟詳譯の修行本起經をさすならん。又西紀後三百年一竺僧の翻譯したるものあり。是れ恐くは支那譯釋迦傳中最とも完備せるものならん。此の經八卷ありて降神母胎の事より入滅涅槃の事まで詳述す。譯者曰之れ西晋竺法護譯之普曜經をさすならん。此の書又方等本起經とも云ふ。其の原本は「ラリタ、ヴイスタラ」經なり。吉地婆訶羅譯之方廣大莊嚴經も亦斯經を翻譯せしものなり。大莊嚴經又神通遊戲經とも云ふ。

るが如し。本文に云へるが如く其の降神母胎より入滅涅槃に至るまでの經歷を詳記せるものには非らざるなり。又余休此普曜經の原本たる梵文「ラリタ、ヴイスタラ」經は釋迦正覺を得て、教化を始むる時までの經歷を記するのみなり。佛人フーコー氏は其西藏語に翻譯されたるものを又佛語に翻譯せり。ラゼンダラ、ラル、ミトラ氏は梵文に英譯を附して出版し、獨逸人レーマン教授は獨逸語に翻譯せり。

ビール博士は東洋聖典集第十九卷として支那譯の一釋迦傳を英譯せり。氏の說に由れば此書は支那譯釋迦傳中最も信據す可きものなりと云ふ佛の誕生より入滅に終る。五卷二十八品あり。西紀後五百年頃に漢譯されしものなり。ビール博士は又斯傳記は或經書を布衍したるものならんと云ふ其の內には佛陀の說法を挿入すること多し。譯者曰之れ馬鳴造曇無讖譯之佛所行讃經を云ふならん。

譯者曰、漢語にて釋迦の傳記を研究するには村上專精氏が嘗て哲學雜誌第六十八號に掲載せられたる釋迦牟尼佛一代記參考書目は大に稗益する所あり。左に之を轉載せんに、氏は先づ支那譯出之經にては佛本行集經（六十卷）、過去現在因果經（四卷）、修行本起經（二卷）、太子瑞應經（二卷）、中本起經（二卷）、佛本行經（七卷）、佛所行讃經（五卷）、方廣大莊嚴經（十二卷）、佛說普曜經（八卷）等を擧げられたり。ビール氏英譯佛所行讃經の序說中にも支那譯大藏中特に釋迦之傳記に關するものゝ目錄及び概說あり。右村上氏の目錄と大差なし。村上氏は又支那選述之釋迦傳中特に參考す可きものを列擧されたり。左の如し。釋迦譜（十卷）、釋迦氏譜（一卷）、釋迦方志（二卷）、佛祖統記（五十五卷）、佛歷代通載（三十六卷）、法苑珠林（百卷）、景德傳灯錄（三十卷）、傳法正宗記（十卷）等なり。余は詳しく大日本刊行の大藏經を撿して、特に釋迦傳研究の好材料たるものを集め、其の書名及び其の所載の綱目を附錄中に列擧せり。

されど總て此等の經書中にて最とも緊要なるは契經なり。即ち三藏中第二藏なり後章に說示する如く釋迦は機に應じて人生及び來世の諸問題に關する教說を垂れたり。而して此等の教說を大集したるものは即ち契經なり。其の內にて既に東洋聖典集中に英譯されたるものあり。又其の內には優勝貴重なる教說を含有すること多し。次下の諸章佛教の哲學倫理宗教等を講說するに至らば、其內より引用して以て其の性質の大概を示さん。

今北部佛說文學を研究するに當て遭逢する困難は、支那又は西藏又は日本等に於て發見されたる書類を完全に綱羅排列したる目錄のなきことなり。西藏佛教に於けるクソマ、デ、ケレス氏及支那佛教に於けるビール氏等の勞力は未だ南部佛教に於けるマクス、ミユラー氏リス、ダヴィド氏等の勤勉の如く多くの書を世に知らしめ、又之を整理するに至らざるなり。譯者云、本文中支那日本等にて發見されたる佛教書類を完全に網羅排列したる目錄なしと云ふは、英語にて記載されたる云々のものなしと云ふ意なりと云ふ。但し漢語にて著述されたる三藏目錄は現今十九部百七十四卷あり。大日本刊行の大藏經結帙中には之を包括せり。其の名は左の如し。出三藏記集（十五卷梁僧祐撰）、衆

經目錄(七卷隋法經等撰)、衆經目錄(五卷隋費長房撰)、大唐內典錄(十卷唐道宣撰)、續大唐內典錄(一卷同撰)、大周刊定衆經目錄(十五卷唐明佺等撰)、古今譯經圖紀(四卷唐靖邁撰)、續古今譯經圖紀(一卷唐智昇撰)、開元釋經錄(二十卷唐智昇撰)、開元釋教錄略出(四卷唐智昇撰)、大唐貞元續開元釋教錄(三卷唐圓照撰)、貞元新定釋目錄(三十卷唐圓照撰)、貞元釋教錄(一卷唐恒安樂撰)、大藏聖教寶法標目(十卷元王古撰)、至元法寶勘同總錄(十卷元慶古祥撰)、大藏目錄(三卷麗藏目錄也)大明重刊三藏聖教目錄(一卷)唐麗國新雕大藏校正別錄(三十卷高麗守其等校勘)、又余の知る所にては英語にて記載せる三藏目錄は二部あり、一は「ビール」氏の著はしたるもの二は南條博士が大明三藏聖教目錄を補譯したるものなり。

西藏佛教經書は「カンジュール」及び「タンジュール」の二部に分る。始めて此等の經書を歐州の學者間に照介せしものは(ハンガリー)人「アレキサンダー、クソマ、デ、グレス」氏なり氏は斯二部の精細なる分類的目錄を亞細亞研究錄第二十卷に掲載されたり。茲にはあまり要なきを以て略載せず。但し茲に注意す可きは此等の西藏佛教書類の主要なる部分は「ホッジソン」氏が(ニーポル)に於て發見したる梵文經と同一の原經より翻譯されたるものなりてふ事實是れなり。

日本に於てすら余輩は未だ佛教文學の內容を完全なる体裁にて表示せる書あるを知らず。支那を通過して日本に傳はれる佛書は尙ほ漢文にて保存せらる、著者は嘗て完備せる六百卷(卷物)の經を見たることあり。此等の卷物の年代は日本にありては甚た古し。著者の目擊したる內にて最とも古きものは天平時代のものなり。日本佛教を研究せる近世の學者は尙ほ此の國にて大勢力ある宗教即ち佛教に付て此國の保藏する富豐なる材料を知らざるが如し。されば今斯學に志ある宣教師にして暇ある毎に日本の佛寺院を探り、其の傳存する經類の內容を世に明ならしめんか、學者社會を補益すること決して尠少ならざる可し。但し梵文原經及び支那譯出經等の事に就ては詳しくは譯者が本卷の附錄として卷末に附說せる所を見よ。

(二) 南部佛教文學

之れより南部文學の一班を講說せん。佛傳に曰く佛陀降臨の本願は三藏を宣說し、群萌を救濟するにありと、三藏とは經律論三藏の意にして、佛教文學の骨髓なり。律藏は出家在家の戒律を教へ經藏は佛陀の宗義を說き、論藏は哲學上の議論を示す。

さて三藏中には諸異代に出現せる巨多の經書を含藏するを以て、其年代は一概に判定され難し。又梵文三藏にありても波理文三藏にありても、其所用の言語及び今日に傳はれる寫本は共に經書の年代を判定するの資具となすに足らざるなり。バーチマクス、ミユラー博士の注意を與へし如く、ル氏の搜捡に由れば梵文書にして五百年以前のものは未だ發見されずと云ふ。

マクス、ミユラー博士曰く「佛教信徒は總ての經書の年代を定むるに於て毫も困難を感ずることなし。蓋し彼等は經書其物の中に、總ての經書は第一公會に於て即ち佛滅後直ちに結集裁定されたるものなりと敎へられ、又其等の經書は後口誦によりて傳傳されたるか、又は該公會の主任大迦葉の命によりて正しく記錄されて傳はれるものなりと確信すればなり。博學にしてやゝ批評的眼光を具へたるブダゴシヤ(譯者曰アスヴァゴシヤを馬鳴と譯するに倣ひてブダゴシヤは佛鳴と譯す可きか)は西紀後第五世紀の初めの人なるが、彼の手に傳はれる經書は總て第一公會に於て裁定されしものと同一なりと確言せり。」

上文に云へりし如く、種々雜多の事柄を含有せる巨多の三藏諸經は到底一人の手になりしものに非ざる可し。案ずるに彼等は基督前第五世紀頃釋迦說法の始より、基督降生の頃に至るまでに漸次出現せしものならん。

リス、ダヴィド氏は其內最も古きものは基督前第四世紀の終か、又は同第三世紀の初め頃に出現せしならんと云へり。されど尙ほ左の注意を加へたり。曰く波理文三藏の總体が適當に出版さるゝまでは、余の言も亦巧妙なる臆說より勝れたるものとしては受け容れられざる可しと。氏は又或經書は其年代に就て疑訝と議論を惹起する事柄を含有すと云へり。

右によりてマ氏デ氏共に斯問題に就ては敢て確言せざることを知る。されど二氏の說く所を熟考

して、佛經中最要のものは西紀前四百年頃に現はれ始め、夫より幾多之世紀を經過する間に漸々增加して終に今日に傳はれるが如き体形に完成したるものならんと、信ずるはあまり大なる誤謬にあらざる可し。

之より三藏の內容を開示せん。譯者曰、三藏の原語は「ツリピタカ」なり。「ツリ」は三の義「ピタカ」は籃の義なり。漢語にて之を藏と譯する所以は翻譯名義集第四卷總明三藏篇第二十九に曰く。俱舍或云比吒、或云摘迦。此兩名藏。即包含攝持之義。非藏無以積財寶。非藏無以蓋文義。故攝論云、何名爲藏。答由能攝故。謂攝一切所應知義。無令分散故名爲藏。

第一律藏、三部に大別せらるされど南山の云へる如く、譯者曰律の原語「ヴィナヤ」なり。漢語にては毘奈耶、毗奈耶、鼻那夜、毗泥迦等と書し、又略して毗尼とも書けり。其の譯にも種々あり。善治滅、調伏、離行等是れなり。律を以て正翻となすなり。

(一)「ヴィブハンガ」經　戒律及び戒法を錄す。

(二)「クハンヅハカ」經　本經又二小部に別たる、其所說の主題は相類す。

(三)パリヴァラ　パヅハ」經　二十五品あり、前部の要略及び附錄を含有す。

第二經藏、五大部に概別せらる。各大部又數多の小部に別たる。左の綱目はマクス、ミユラー氏の作れるものなり。

經の原語「ストラ」(梵語)「スッタ」(波理語)。漢語にては修多羅、素怛纜、修妬羅修單闌、修妬路等と書けり。明芝に五譯有り。一翻經二翻論三翻法本、四翻經、五翻教語數、又別に綫篋書、契經とも翻す。或は五藏を有するが故に翻す可からずとも云ふ。單に經と譯するときは總名の經と混同するの恐あるを以て嚴密に云へば、契經と譯するが宜かる可し。

(一)「チーグハ」經　長經三十四卷を集めたるもの。

(二)「マジヒマ、ニカーヤ」經　中經百二十五卷を集めたるもの。

(三)「サムユタタ、ニカーヤ」經　數多の連絡せる經を集めたるもの。

(四)「アングタラ、ニカーヤ」經　數多の短經を集めたるもの、又左の十五小部に別たる。

(五)クヅドザカ、ニカーヤ」經　雜經

(1)「クヅドダカ、パージハ」經　短句を集めたるもの。

(2)「ヅハムマ、パダ」經　四百二十三句あり。余の知る所にては斯經は最も多く歐州の學者の注意を惹き、又殆んど總ての歐州語に翻譯されたるが如し。後章に至らば斯經より引用する處多し。

(3)「ウダーナ」經　短頌歌八十二首を集めたるもの。

(4)「イチ、ヴトタカ」經　如是佛說てふ語を以て始まれる百二十句を集めたるもの。

(5)「ストタ、ニパータ」經　教詩七十首を集めたるもの。

(6)「ヴィマーナ、ヴァヅヅフ」經　天宮の有樣を說けるもの。

(7)「ペタヴァヅヅフ」經　鐵魂の話

(8)「ヅヘラ、ガーヅハー」經　比久衆の詩歌。

(9)「ヅヘリ、ガーヅハー」經　比久尼衆の詩歌。

(10)「ヂャータカ」經　昔譚仙、譚、寓言歌五百五十箇集めたるもの。

(11)「ニヅデサ」經　「ストタ、ニパータ」經の後半を舍利弗の註解したるもの。

(12)「パチサムブヒダー」經　阿羅漢の修得する神通證悟力を說けり。嚴密に論ぜば斯經或は次の論藏に屬す可きものに非ざるか。

(13)「アパダーナ」經　阿羅漢の話、

(14)「ブヅヅハ、ヴァンサ」經　二十五前佛及び釋迦の略傳。

(15)「カリヤー、ピタカ」經　數多の闍多伽物語を短詩に作れるものにして、主として前生に於ける釋迦の德を說く。

第三論藏、原語は「アビヂハルマ」(梵語)「アビヂハンマ」(波理語)「漢文にては阿毘達磨、阿吡曇、等とかけり。傳、勝法、無比法、對法等と譯す。

(一)「ヅハムマ、サンガニ」經　諸世界に於ける生活の狀態を說く。

(二)「ヴィブハンカ」經　種々の主題に關する經十八卷を集めたるもの。

(三)「カヅハー、ヴァヅフ」經　一千卷ありて、一千の問題を論説す。
(四)「プグガラ、パンナヅヂ」經　人間の通情を説く。
(五)「ヅハヅ、カヅハー」經　諸大種を論説す。
(六)「ヤマカ」經　對論（外見上にては明瞭なる矛盾及び反對にして內部に眞理を含めるものを論ず）。論説す、但し南北佛教經書の比較
(七)「パヅヅハーナ」經　存在の諸原因を論説す、的研究に就ては本卷附錄の譯者の論文を見よ。

右爐列せる三藏諸經中にて、經律二藏中の經及び章は多く英語及び他の歐州語に翻譯されたりと雖ども、第三藏即論藏中のものに至てはハーデイ、ゴガリー等の諸氏の著書中、其の斷片が折々摘譯されたる外完備せる翻譯は一もあるなし。故に斯部分に就ては余輩は上戴諸氏の著書中に摘譯されしものに依據するより外なし。

さて三藏內容の區別及び其名稱に就ては今略説し了りたり。次に其の長及び量を檢査せん。余輩は既に第三藏即論藏中の只一部にて千卷の經を含有するものあるを見たり是等の經の或物は非常に長し。例へば其の一なる「ストタ、ニパタ」經は千百四十八節を有せり。而して其の各節は余輩の聖書の普通の節よりも長し。此くて斯經のみにても殆んど四福音書の長さに均しきなり。然らば該千卷總体の長さは如何にある可きか。更に此の千卷を含有する部分は只第三藏第七部の一に過ぎざるなり。されば今單に其の經典のみをとるも佛教文學は實に浩廣大なるものなり。若し之に加ふるに後世の註釋及び著作を以てせんには其總量實に廣大はかる可からざらん。此く其の分量の廣大なるからに歐州の學者は之に失望して永く其全譯を試みざりき。彼等は先づ思へり。此く廣大なる文學は到底一人の手にて譯了し難かる可しと。又思へり。よし万難を排して之を譯出するも其の讀者社會に與ふる利益は到底其苦勞に酬ひざる可しと。されば長年月の間只折々其小部分の譯出せらるゝのみに止まりたりき。而して其の內にて最とも歐米人の注意と趣味を惹起せしは法句經（ダムマパダ）なりしが如し。然るに今やマクス、ミユラー氏の不屈の勤勉によりて東洋諸國の聖典は續々譯出されつゝあるなり。余輩は厚く氏に感謝せざる可からず。經律二藏中の諸經も氏の盡力によりて多く翻譯されたり。されど其翻譯されたるは翻譯者が最とも有趣に又教訓の益ありと感せしもののみにて、其の翻譯の困難なるか又は趣味少なしと感せらるゝものは未だ譯出されざるなり。されば此の二藏の翻譯も未だ完全なりと云ふ可からず。

第三藏に就ては余輩は、先づ前二藏を十分に表顯したる後、東洋聖典集の更に之に着手せんことを希望するなり。蓋し斯藏は佛典中最とも哲學的なる部分を含藏するものなれば、其の翻譯は一の宗教として佛教を學ぶ人々に向ても、又は希臘及び近世の或る哲學に極似する一哲學系体として之を研究する人々に向ても、孰れに向ても佛教研究者の趣味を惹起するを誤らざる可し。さて上述の如く經律二藏にありては其主要なる部分は既に可成に譯出されたるを以て、一の宗教として又は一の倫理教として佛教を研究する上は、余輩は其の本原の權輿に訴へ其根本の材料に徵するを得れども、第三藏に至ては未だ一部の經書も完全に翻譯されたるものなきからに、一の哲學として佛教を研究せんとするに於ては余輩は直ちに根本の材料に遡るを得ず、只佛教に關する歐米學者の著書に就て學ぶを以て滿足せざる可からず。

余輩は再びもとの問題に立戻り、三藏內容の總量を述べん。余の知る所にては三藏全体の分量に就ては未だ精細なる計算を施し、正確にして信據す可き結果を公にせし人なきが如し。されど今

譯者曰、「ヅハムマパダ」經と法句經の關係に就ては附錄南北佛教の比較的研究を見よ。

最とも少なく計算するリス、ダヴィド氏の說に由るも、若し全く之を英譯せば「バイブル」の四倍ある可しと云ふ。而してこは全く後世の著作及び註釋を除去し只經書のみに就て云へるものなり。若し彼等を以て之に加へんか、佛敎文學は實に廣大無量のものとなる可きなり。されど今深く佛敎の奧底に入り、其の隱微なる點までも闡明せんとするには必ず之を搜檢せざる可からず。直接に此等の根本的材料に就てなしたる研究に非ずんば未だ完全と稱す可からざるなり。されば余は茲に以下五章の講說を順備するに當て、直接に其等の根本的材料を搜檢する能はざりしことを告白せざる可からず。かゝる搜檢を施さんには實に廣大なる勞力と時間を要するなり。而して余は之を有せざりしなり。殊に余の手にありし原本的材料は甚だ僅少なりしなり。否なよし彼等は十分に備りおりたらんにも梵語に關する余が智識は尙ほ狹隘にして波理原經は未だ自由に讀解する能はざるを以て、其れより多くの利益を獲取する能はざりしならん。かゝる次第なるを以て余は主として良好なる著譯書に據れり。學者社會に好評ある著譯書は勤めて閱讀せり。されど茲に一々其の名を列擧せんも煩はしければ、只其の最とも依據せし數書をあげて以て諸君の參考に供せん。さて歐州に於て佛敎研究の先鞭を着けしものは佛國人なり佛敎の名の始めて歐州學者の耳に觸れしは實に佛人レヌーフ氏の不屈なる勤勉によると云ふ可し。彼の著書の現はれしは實に佛敎に關する歐州人の智識の甚だ幼稚にして、佛陀の名のからくも彼等に了解されし現世紀の初めなりけり。されど彼の研究は適當なる同國の學者の繼續する所となりたりき。バース氏か印度宗敎論中の佛敎論は甚だ貴重なり。ズレゼンセー氏の古代世界と基督敎と題する書中にある佛敎論亦然り。但しプレゼンセー氏のは批評的より寧ろ哲學的なり。同評は又レナン氏の宗敎論中の佛敎論にも與へらるゝを得可し。ジユリアン氏の支那佛敎に關する著作も亦甚だ貴重なり。獨逸書にありては先づラッセン、ヴァジリーフ、キヨペン、シユィーフチル氏等の著作を擧げざる可からず。ハンガリー氏クゾマ、デ、ケレス氏の西藏佛敎に關する著述も亦之れに列せらる可し。實にシユィーフチル氏は只クゾマ氏の繼續者たるに過ぎざるなり。(但しクゾマ氏は夭折せる人なり)。されど獨逸書中にて最とも良好なるはオルデンベルヒ氏の著作なり。ヘルマン、ヤコビ氏の著作は哲學的より寧ろ學者的批評的なり。

英書にありては、先つスペンス、ハーディー氏の波理語經文を基礎とせる佛敎書を擧げざる可からず。チャイルダー氏の波理語に關する著作も亦甚だ有益なり。氏の夭折せしは實に惜む可し。されど氏の外套はリス、ダヴィド氏の肩上に掛りたり。ダヴィド氏の著譯は共に夥多なり。氏の翻譯に就ては既に屢々云へり。其の著作中にて最とも勝れたるは福音宣傳會より出版したる佛敎と題する小冊子なり。されど其の最とも緊要なるは千八百八十二年のヒッベルト講義なる可し。今や氏は又米國にありて更に新しき講義を與へつゝあるなり。其講義の出版されて佛敎研究上更に一光明を加ふるは近日の內にある可し。モニール、ウイリヤム氏の佛敎論は梵文經書に基ける甚だ貴重なる著作なり。氏は深く梵語に通せり。マクス、ミユラー氏の數多の著書中に散見する佛敎に關する論文も亦參考に供する價値あり。

北部佛敎研究の材料に就てはビール博士の英譯せる數多の支那佛敎書あり。エドキンス氏も亦支那佛敎に關する著述なり。

米國にありては故クラーク氏の十大宗敎論中の佛敎論は甚だ趣味多し。されど學者的ならず。シ

ヨンソン博士の印度宗教論はやゝ學者的なり。

終りに臨んで更に一好材料をあげん。即ち東洋聖典集中に翻譯されたる各佛典の卷首に附せる長序論なり。

以上浩瀚なる佛經文學、即ち教祖の生活、事業及び教理に關する本國及び外國の文學の概略を說了せり。故に本章は之れにて擱筆せん。但し本章所詮の不完全なるは著者自からも能く意識せり。

第三章　佛陀傳

譯者曰、讀者の領解に便ならしむる爲め、本章中に用ひある梵名は皆な其の右肩に附せる數字の順に從ひて、卷末なる第三章附錄中に解釋せり。就て見る可し。

本章の目的は即ち佛教の創設者佛陀の略傳を描寫するにあり。第一章に於て一言せし如く、本年講說せんとする三宗教は各々一の教祖を有し、又其の名を以て宗名とせり。されば今其の一なる佛教を研究するに當て、先づ着手す可きは其の教祖なりてふ佛陀は如何なる人なるか、又如何なる時代、如何なる國土に出興せしかの問題、及び其他佛陀の一生に關する諸問題是れなり。

さて佛陀は釋迦種より出でたる人なり。故に今彼が傳記を叙述するに先だち、少しく釋迦種に就て述べおく可し。釋迦種はアルヤン族の一民種にして、初め他の同族諸民種と共に勃興たるヒマラヤ高嶺を踰へて印度內地に進入し、原土人、ゼラビディヤン諸民種を驅逐しつゝ東南に漸下せしが、遂にはベナレスの北方百哩許の地に定移したりき。されど該民種は人口も多からず、勢力も強大ならざりき。概してアルヤン諸民種は、前卷に述べし如く、其のアイラニア高原なる原生地を去りて東南に漸下し、遂にガンジス河沿岸の地に定住するに至りし後は、精神身体共に甚だ衰弱したりしなり。實に酷熱蒸暑なる印度の氣候は却て其の征服者を征服したりしものと云ふ可し。彼等はもと勇敢剛毅にして進取活動の元氣に汪溢したりしが、其の印度內地に定住せし後は、此等の氣質全く消失して日夜只區々たる同族間の小爭鬪に奔走したりき彼等をして其の進行の途上に横はれる萬難を排していよ〳〵勇進せしめし連衡團結の精神は、全然滅了して新たに領收せし邦土は四分五裂に分割されたりき。而して相接近せる民種間にありては爭鬪絕もる間なかりき。是れ佛陀降生前後の印度の景勢なり。爾時釋迦種は、上文に述べし如く、ベレナスの北方百哩許の

地、コハナ河の一邊に據在したりしが。其對岸に沿ひてはコリー民種の之れに峙立するありき。而して此二民種間にはコハナ河水利の爭論屢々起りきと傳ふれども、佛陀出生の頃には彼等の交際甚だ平和なりしが如し。當時釋迦民種の王なる首圖駄那王の姫はコリヤ王の二皇女なりき。譯者云ふ、當時二民種間の交際平和なりしが如しと雖ども、コハナ河水利之爭論は尚ほ絶へざりしが如し。佛典中には其影跡の微す可きものありて存す。

さて釋迦種の淨飯王はコリヤ王の二皇女を后姫としたりしかど、共に子なかりしを以て常に之を憂ひいたりき。蓋し印度人は嗣子なきを以て最大不幸と思惟せり。之れ支那より借りし思想には非ざるか。然るに姉夫人は其齢四十五才に達せしときより始めて懷姙を覺へき。而して此報の兩國民の間に傳布するや上下の觀喜無量なりけり。さていよ〳〵臨月に近づきければ姉夫人は其の國風に從ひて國王の敕許を請ひ實父の宮城に至らんとて藍毘尼園まで來れりしとき、大救世主は忽然として降誕し玉ひぬ。是に於てコリー城に進むを止め、母子共に王城に還りしが後七日を經て母后は命終りき。故に太子は其姨母の手にて養育されたりき。

佛陀の降誕に就ては世界宗教史中に著名なる他の諸聖の誕生に就ての如く數多の傳説ありて存す。今其の一を左に叙述して以て其の性質の一班を示さん。

一毗珊多羅佛の降生後、二佛陀は三兜率天に生れ、四讃兜駄多佛の名を受け、五十七五拘胝六十六洛沙の間幸福圓滿に送りたりき、而して此の期の終に達するや、一の无上至尊佛の出現宣言せられたり。於是一万世界の諸天子及び婆羅門衆は各々相謂ひて言へらく、今將に出現せんとするは何佛なるぞと。而して、此は讃兜駄多佛なりと知るや、彼等は即ち彼の前に簇集し來りて請願すらく、一切群萠を生死の大海より救濟せんが爲め直ちに斯新高座に陞り玉へと。讃兜駄多佛は默然として之れに答へざりき。されど偏く五事を觀察せり。即ち一者觀時、二者觀方、三者觀國、四者觀族、五者觀日。譯者曰、降神母胎前兜率天に在りて菩薩、五事を觀察せしことは過去現在因果經第一（大藏經、辰帙第十冊）の内にも記載せり。而して其前四事は本文所註の南部佛教徒の傳説と同一なれども終りの一事は十之れと異なれり因果經に記述する五事とは即ち一者觀諸衆生熟與未熟、二者觀時至與未至、三者觀諸國土何國處中、四者觀諸種族何族貴盛、五者觀過去因果緣能故眞正應爲父母。然るに修行本起經（同帙同冊）上卷には興四種觀とありて其殿は一ヶ少なく又第四事は本文所註のものと異なれば又因果經のさも異なれり。其の文に曰く興四種觀、觀視土地、觀視父母、生何國中、教化之宜、先誰當度。方廣大莊嚴經（大藏經、宙帙第四冊）にも亦四種心を以て遍く觀察すと記せり。其四事は本文所註の第五を省きたるものと全く同し

一〇閻浮提州に出興せしことを觀、三に對しては一切過去諸佛は又二摩竭陀國に降生せしを觀、四に對しては婆羅門族は適當に非らずして刹帝利種の好適なるを觀、更に閻浮提六萬三千の諸王中一三迦比羅伐窣兜國の一四首圖駄那王は眞正にして父となすに堪もるを觀、五に對しては淨飯王の后一五摩訶摩耶は其の母たる可きを以て、又彼は出産後七日にして命終る可きを以て、其の終命前三百七日に降神して母胎に入る可きを觀たり。譯者方廣大莊嚴經第一勝族品第二、に佛先づ四事を遍觀せし所以を説けり。曰く、何故觀時。菩薩不於劫初而入母胎、唯於劫成世間衆生明了知有老病死苦、是時入方入母胎。何故觀方。菩薩不於東弗婆提、西瞿耶尼、北鬱單越及餘地唯現閻浮提。所以者何、閻浮提人有知慧故。何故觀國。菩薩不生邊地、以其邊地人多頑鈍無有根器、猶如瘂羊而不能無善與不善言説之聲。見故菩薩恒生中國。何故觀族。菩薩不生旃陀羅毗舍首陀家。四姓之中唯於二族刹帝利種及婆羅門種。於今世間、亟刹帝利、見故菩薩生刹利家。迦比羅迦比羅窣兜之略なり以下倣之。城の住民は毎年一六阿沙羅月に七日の祭典を行ひたりき。今降神母胎の起りしは此祭典の最終の日なり。摩訶摩耶后は祭典終りて寢殿に入りしが、未だ眠に就かざる前一夢を見たり。其夢は左の如し后寢床の上に端坐瞑目してありしが、フト眼を開けば。護世一七四天王四方天より空に騰て來ると見るうちに、彼等は后の寢床を擁して一八大雪山の深林に飛行せり。而して之を百哩高き大一九娑羅樹の下、一大巖石の上に置きて少しく退き、四方に儼立して護待せり。時に四天女王は二〇阿那婆達多靈池より清涼水をくみ來りて、摩耶后の身体を洗浴し、一切汚穢を洗滌し

て香薫を塗りたり。於是四天王は再び近づき來りて寢床を捧げ一銀岩の上に置きたり。其の上には光輝燦然たる黄金殿ありて聳立せり。于時讃兜率他佛は皎々たる月空にかゝれる白雲の如くに矇朧として北方に出現し、手に白蓮華を携へて除々摩耶后に近づき玉ひしが遂に降神入胎し玉ひぬ。摩耶后忽然夢寤めしが自から身重きを覺へたり。譯者曰、佛傳耶后之夢の中に乘して降神入胎せりとは南々趣を異せり。而して佛陀入胎之傳所を大雪山(夢中)となすは南方の傳說に限れるが如し。又北兩傳說の一致する處なれども其の時の狀態に至ては種北方の傳說は總て佛陀は六牙の白象と化して又は六牙の白象に乘して母胎に入れりと云ふ

翌朝直ちに之を國王に奏し、玉ひければ、國王は便ち使を遣はして善相梵志六十四人を宮殿に請ひ、妙香花及び種々の飲食を以て彼等に供養し、供養畢りて曰ひ玉はく、願くは夫人の夢を占へ。何等の異あるかと。梵志等即ち之を占ふて曰はく、今此夫人必生太子具諸相好。若在王宮、作三轉輪王。若是出家修諸梵行、成三正等覺、號天人師。衆許摩訶帝經、第二卷(大藏經辰帙第十册)、譯者曰本章はスペンス、ハーディー氏の佛教書に基つきて譯述されたるものなれば其所詮は純然たる南方佛教徒の傳說と見て可なり。故に余は支那譯一切經中釋迦の傳記に關するものを搜索し、本章の所詮と同一の主題に關する傳說を求め其の下に細字を以て書き入れ聊々南北佛教比較的研究の材料の一片となさん欲なりしか、全体翻譯の期日甚た短少にして本章の翻譯を始めし折には印刷所にては既に第一章の印刷を終りて、第二章にかゝるが如き次第なりしを以て不得已此計畫をすてたり。遺憾。國王は此の言を聞きて深く自から慶幸し、踊躍無量即ち數多の金銀雜寶を梵志等に與へ玉ひき。

降神入胎の時には天端應を降すこと三十有二、一万大々世界大震動。十方世界悉皆大明。國内宮舍無不明曜。衆川万流悟靜澄清。香風芬々從四方來。細雨潤澤以歛飛塵。諸天頌歌讃太子德。諸天伎女於虛空中作妙音樂。無數白象子首戴蓮花、列住殿前。天紺馬寶自然而來。五百白獅子王、從雪山出。聲盲瘖瘂癰殘百疾悉皆除愈。諸惡律儀一時慈心、(以下略之)。

佛處胎十ヶ月の間は護世四王彡の形に隨ふ如く摩耶夫人の側を離れず、又一万世界より四萬の諸天簇集し來り、各々刀劍羅索及び弓箭等を以て或は菩薩、或は迦比羅城或は閻浮提州を守護せり、故所有一切魔及非魔諸鬼神等而不能害、如摩尼珠及迦葉迦寶、所有一切穢惡塵垢而不能染。菩薩之身亦復如是。又令母身內外瑩淨、山如瑠璃。能見菩薩色相諸根。如彼水精貫五色線、分明顯露。又令母身氣力增益、無諸疾苦。志意堅固受持五戒、精進無犯離諸過失。

十ヶ月の終りに近づける頃、摩耶夫人は其生父母を訪はんことを國王に請へり。國王は便ち之を許し、且つ外に敕して道路を修繕し、其の上に白砂を布き、兩邊に沿ひて樹木を植へ、又諸所に清泉を湧出せしめたり。夫人は即ち清冷水を以て身体を洗浴し夫より仕度整へて金輿に召し玉へは二千の青衣は之をかきあげ、六萬王の婇女は妙樂を奏し、八萬四千の勇健なる象兵馬兵車兵步兵は之を守護して進めり。かくて一行は有名なる藍毘尼勝園に到達せり。時に園中には百花爛熳として開き、香氣芬々として薫じ、好鳥其間に出沒して戛々たる天樂を奏せり。一望好景云はん方なし。聖后は便ち金輿を止め、下りて園内を遊歷詳觀し、遂に娑羅寶樹の下に至れり。寶樹は花色香鮮、枝葉分布極めて茂盛を致せり。聖后即ち右手を擧げ、之を牽摘せんと欲する一刹那忽然として佛陀は誕生せんとす。隨從の貴族青衣等は之を見て大に驚愕し、直ちに聖后の周圍に幕を繞らし。遙かに退きて其成行を打守れり。于時天地大震動し一万大刹土大明ならざるはなく、釋梵四王及び其官屬諸天諸鬼神等皆來り聚會して聖后を侍衛せり。而して太子は安詳として誕生し給へり。母后にも亦瘡瘢あるなく痛痒なし。大楚天は恭敬尊重躬を曲げて前み、一心正念即ち兩手金繒を以て太子を承捧し、母后を祝して曰く。歡喜せよ。聖后の生み給へる玉兒は世界の支柱たる可しと。母子共に塵垢一切著かずと雖尚諸天は二種の雨を降し、或は冷或は温以て灌頂洗浴

せり。四天王は即ち華美壯麗なる虎皮の上に太子を奉戴しつれば貴族青衣等は便ち之を承捧せり。而して太子は瓢然立ちて虎皮を出て給へは、足の地に觸るゝ所大蓮華忽然として出現せり。太子即ち其上に直立して先づ東方を望み玉へば、東方諸天人皆な香花寶物を捧げ、大聲呼んで曰く、一切天人の中汝は最大なり。汝より大なるものあるなく、又汝に似たるものもあるなしと。佛陀は更に十方を望むに、一萬世界一切諸天人中我ほど大なるものなきを見たり。爾時[三三]大梵天は再び空中に出現して高さ十哩の天蓋を以て菩薩の頂を覆へり。[三四]帝釋及び他の諸天は憩床を擁して下り更に他の諸天は樂器、香料、等一切當時所須の品物を捧じて下れり。佛陀は即ち北行七歩其右手を擧げて師子吼せり。一切天人之中最尊最勝。無量生死於今盡矣(過去現在因果經の句)。十方の諸天婆羅門之を聽きて皆な佛陀を拜禮せり。于時三十二端相は再び興れり。次で迦比羅城に還る。兩城の釋迦種十六萬人之に隨從せり。是時に同じく[三五]耶輸陀羅[三六]車匿[三七]犍陟及び廣開大敎に順なる功勳を爲せし[三八]阿難陀等も亦誕生せり。

さて一行市城に達するや、淨飯王及び諸眷屬は皆悉く聖會せり。時に宮殿に近き林園に修行せる[三九]迦羅提婆羅は種々の端相の現るゝを觀て、太子を見んとて來れり。容姿端嚴にして三十二相、八十種好を總具し給ひ、身は金剛の如く殊妙量り難きを見て長敬の念に堪へず直ちに其の足を拜せり。國王及び諸眷屬も亦之を觀て皆な均しく禮拜せり。

誕生後五日を經て國王は太子に名を命せんが爲め梵志百八人を請ひて大に供養を設け、好適の名を撿し、且つ太子の將來を占せんことを請へり。梵志等は即ち其の內の八人を撰び先づ太子の相好を撿し、以て其將來を占はしめたり。七人の年長梵志等は共に曰はく、太子若し在家せは轉輪王となりて、四天下を領せん。然らずして出家せば一切種智を成し、佛陀とならんと。殘れる一梵志は曰ふ。其の頂なる肉髻若し赤色ならば太子は轉輪王とならん。されど若し紺青ならば確かに佛陀となる可しと。而して之を撿せしに紺青なりしかば梵志等は云へり。太子は世界の[三〇]財吉(悉達多)とならんこと必せりと。因て其の名を悉達多と定めたり。梵志等は家に歸りて後、各々其の子弟に謂て曰はく、三十五年の後には悉達多太子は正等覺を證得して佛陀となる可し。我等は既に老ひたれば到底其の日を見ること難しと雖ども、汝等は尙は弱年なり。其日來らば必ず出家して彼に從へ、以て大利益を得んと。

此悉達多てふ語は設立するものてふ義なり。[三一]佛陀とは彼が事業を表彰せる名稱にして後世人の與へたるものなり。此語は「ボッヒ」なる働詞より來る。正覺を得たるものてふ義なり。

八萬の釋迦種は太子の命名及び梵志の卜相を聞きて皆な其子弟を太子の隨從となさんと請へり。思へらく太子若し轉輪王とならば必ず數多の親臣を要するならん。佛陀となるも亦數多の[三二]比丘を要せん。故に今より太子に隨從せしめおかは彼等の爲め他日大に利益あらんと。

次に國王は兩市城に命を下して好適なる乳母を求め玉へり。其資格に曰く。身高きに過く可からず、太子の頸伸張す可ければなり。身矯きに過く可からず、太子の兩脚收縮す可ければなり。身躰纖弱なる可からず、太子の健康を害す可ければなり。身體肥滿多血性なる可からず。其の乳汁熱くして太子の体色赤色となる可ければなり。体色暗黑なる可からず、其乳汁冷くして太子の体肉處々に降起し、且づ肉質の堅軟一致を欠く可ければなりと。遂に釋種の婦一百人は乳母として宮城に召されき。

誕生後五ヶ月を經たる頃、例に從ひて耕作祭擧行されたり。此の祭禮には國王、自ら金鞭金鋤を手にして耕作し玉ひ、又隨從の貴族は銀鞭銀鋤を以て、數多の農民は新調の鞭鋤を以て之れに從ふことを例式とす。而して一發の號令の下に上下一時に耕作を始むるが又例式なり此の日太子は乳母に抱懷せられ又數多の侍女に擁護されて祭場に出でたりしが、儀式の始まるや總て乳母及侍女等は之を觀んとて幕外に奔り出て、獨り太子を內に殘したり。暫くして彼等は幕內に歸り見ればこはそも如何に、太子は瓢然として空中にかゝれる師子座の上に結跏趺坐し玉へり。彼等は之を見て大に驚愕し、直ちに國王に奏して曰く、陛下、今此所に見るは陛下の祭禮なり。されど來りて太子の祭禮を劉覽あれと。國王も何事の起りしかと怪み、直ちに幕內に入りしに、之を見て大に驚喜し、直に太子の足を禮して曰く、若し汝の母此所にありて之を見んには其の生命をも汝の爲めに捧ぐるならん。然るに今は朕獨り殘れり。何爲ぞ汝は朕にかゝる奇瑞を示顯するやと。太子は無病健全に生長して十六の齡に達し玉ひければ國王は即ち國師を古利城に遣はし、王女耶輸陀羅を以て太子の妃となさんと請へり。されど古利城主は太子出家の志あるを知り、敢て之に從はず。於是耶輸陀羅姫父王に謂て曰く、太子若し妾をすてゝ出家するも、妾は太子の外に夫を持たじと。姫の戀愛はかく强大なりしなり。されと父王は尙ほ之を許さざりき。淨飯王之を聞きて大に赫怒し、直ちに兵馬を率ひて古利城に入り、耶輸陀羅を奪ひて還城せり。夫より太子と、耶輸陀羅を正殿の銀座の上に並坐せしめ、其頭に聖油を塗り、且つ玉冕を戴きて夫婦とせり。次に使を諸侯屬に遣はし、令を下して曰く、卿等は悉く其の愛女を太子の宮殿に送り、新妃に禮せしめ且つ太子の姫媵とせよと。されど彼等は之に從はずして曰く、太子深宮に生長して未だ曾て文武、書算、圖像、兵機、權捷、膂力等世間衆藝を學ばず。何爲ぞかく多くの妻妾を蓄ふを得ん。彼は如何にして其の妻妾に衣食を給し、又若し他國の侵擊を蒙ることあらは其時祖先の遺業を辱しめず、萬民の安寧を保護するを得んやと、太子之を聞きて大に怒り於迦比羅城內爲一試場遍告天下曰、過七日後、若有善於技術、皆集此場、共觀太子現諸技藝。第七日に至れば十六萬の釋種試場に簇集し來れり。太子は即ち勁强人の能く張る能はざる大弓をとり、一指以て之を張り、箭を番がひて瓢然之を放ちければ彈弓の響轟然として百雷の一時に落つるが如くなりき。太子は更に萬般の諸藝一も精通せざるなきを示し、且つ種々の神通力をも示現せり。於是一切聚會は大に驚動し皆な曰はく、我今我が愛女を以て太子に侍せしめんと。其の日太子の宮殿に送られし釋種の姫子女四萬人ありたりき。

太子深宮に在ること日久し、一日園林に出でゝ遊戲せんと欲す即ち御者に命じて馬を整へしめ諸官屬と前後導從して城の東門より出づ。時に三一天神は化して老人と作り、途に出でゝ之を觀る。頭白背傴柱杖羸步太子即ち御者に問ふて曰く此れ何人ぞ。御者答へて曰く此れ老人なりと。太子又問ふ此人、生來にして然るかと。答へて曰はく、否な然らず、曾て嬰兒、童子、少年を經て今見るが如くに成れるなりと。太子又問ふ、唯此人のみ然るか。一切皆然るか。御者答へて曰ふ。一切皆悉く此の如しと。太子是語を聞きて、心中大に苦惱を感じ、即ち車を廻らして還る、愁思樂ます。王之を問ふ。太子答へて曰く吾途に老人を見たり。而して此世の不幸なるを感じ、出家せんと欲するなりと、王大に驚き、直ちにかゝる妄念を去り宮殿に入りて姫媵婇女と娛樂せんことを勸め、更に太子の宮城を遁れ出でんことを慮りて市城の周圍八哩の間に衛兵を置けり。太子復

四月を經て出遊せしが、又途に病人を見たり。身痩せ、腹大にして喘息呻吟し、骨消へ肉竭て、顏貌痿黄なり。舉身戰掉して自ら能く特する能はず。兩人扶助して路側にありたり。御者に問ふて、一切人民貴賤の別なく同しく此病あるを知り、愁憂自から生じて又園遊を思はず、即ち車を廻らして還て王宮に入る。王之を聞きて心大に憂ひ、更に衛兵を增加して十二哩の間に分布せり。後四ヶ月を經て太子復た出て、園林に遊ばんとし、而して途に死人を見たり。因ていよ〳〵厭離の念を起し、又中途にして宮に還れり。國王はいよ〳〵之を愁ひ更に衛兵を十六哩の間におけり。更に四ヶ月を經て復た出でて遊ばんとし而して途に行者に逢へり。法服持鉢、手に錫杖を執り、地を視て行く、歡喜の色顏面に輝き內心の平安姿体に現はる。太子即ち從者に問ふて曰く。此れ何人ぞ、從者答へて曰く行者なりと。更に何人と雖ども行者となりて、以て安心を得能ふかと問へり。御者は天神の命に迫られて然りと答へければ、太子欣然として曰く園林に進めと。而して此所に終日遊樂せり。爾時諸天は天王服を携へて降り、之を千重にたゝみて太子の肩上に置けり。此天王服は一たび握れば掌中に收まると雖ども、張れは方百九十二哩の空間を覆ふて餘あり。更に光輝燦々たる玉冕を頭上に置けり。時に諸天女は妙天樂を奏し、諸天婆羅門は禮拜を行へり。而して一切聚會は悉皆新王を讃稱せり。（譯者曰、始の老人より終りの比丘まで、之れ皆な天神の化現して太子を導きしものなりてと云ふ。南北傳說共に然り云へり。）太子園林に在りてかく天福を樂める時、耶輸陀羅妃は皇子を生めり。三羅睺羅と名づく（母胎に在ること六ヶ年なりと云ふ）淨飯王之を聞きて大に喜欣し、謂らく、以て太子の出家を止むるに足らんと。即ち便ち使を遣はして之を太子に告く。使者太子を見て奏すらく。「殿下皇子は誕生あり。殿下は第二の我を得玉へり」と。太子ひそかに思ふ。之れ愛著の羂なり。我が出家の念を害せんを恐るると。

暫時思惟せしが後、思へらく、今一度宮城に還り、新生の皇子を一見したる上にていよ〳〵出家せんと。而して其の宮城に達するや燈光燦爛として晝の如し即ち內に入て寢床に倚れば四万の婇女太子の前に於て或は歌舞を競ひ、或は姿態を以て太子を悅動せんと冀へり。されど太子の心は容易に移轉す可からず。彼等は百方術を盡くすと雖遂に太子の深思沈想を轉じて娛樂に向はしむる能はざりき。かくて夜はいよ〳〵深け行きぬ。彼等は遂に疲勞に堪へずして打臥せり。太子即從坐起、遍觀妓女、皆如木人、譬若芭蕉中無堅實。或有倚伏於樂器上、臂脚垂地。更相枕臥、鼻涕目淚、口中流涎。又復遍觀妓女、見其形體、髮爪髓腦、骨齒髑髏、皮膚肌肉、筋脈肪血、心肺脾腎、肝膽腸胃、屎尿涕唾、外爲革裹、中盛臭穢、無一可奇。强薰以香、飾以花絲、譬如假借當還、亦不得久。百年之命臥消其半、又多憂惱、其樂無幾。世人云何恒見此事、而不覺悟。又於其中、貪著婬欲。我今當學古昔諸佛所修之行、急應遠此大火之聚。（過去現在因果經第二）。四爾時魔王は太子の出家を妨けんとて出現せり。曰はく悉達多、汝若し宮城を去らざれば、轉輪王となりて四天下を領せんこと遠からざる可しと。太子は毫も之を耳にせざりき。先づ金門に至りて宿直の官吏を撿せしに、是れ己が御者車匿なりければ直ちに犍陀を率き來れと命せり。犍陀は今や太子宮殿を遁れ出で、正覺の道を求めたまふ時なるを覺へ、一大聲を發して噴鳴せり。諸天其聲を聞きて愕然たりき。されど天神馬聲を散じて皆虛空に入らしむ。故に人間は一人も之を知らざりき。かくて車匿犍陀を整ふ間、太子は今一たび皇子羅羅睺を見んとの念起り、竊かに耶輸陀羅の寢殿を窺ふに、彼は皇子を兩腕に擁して惛睡せり。故に若し皇子を動搖せば次て耶輸陀羅をも醒起せしめんことを恐れ、遂に內にも入らず

して、去りて內庭に出でければ、此所に車匿は犍陀を率き來りて、太子を待てり。太子即ち便ち犍陀に乘じ之に告げて曰はく犍陀、與我有緣。若能送我諸佛行處、證得無上菩提之果、降大法雨普潤世間、一切有情皆獲利樂、汝福無量。（衆許摩訶帝經第五卷、）中夜市城の外門に達せり。王は兼ねて太子之遁宮を慮り、此處に一千の衛兵を置きて固く守らしめたりしか爾時城門に神人現れ、門戸自然に開けたり。即ち便ち太子は之より市外に出てたり。干時魔王は再び出現して太子を巧誘せり。蓋し[三四]天魔、恐佛出世敎化衆生出離三界、當空我境、（衆許摩訶帝經（大藏、經長帙十冊九十二枚の裏））毅然として動かざるを見て大に怒りて曰く。汝果して正覺を得るかを見よ。今より我は當に汝を誘試せん。我は影の形に隨ふ如く常に汝の至る所に隨はん。而して成道の時には大魔軍を降して以て汝と鬪はんと。此より太子學道七年の間、彼は曾て太子の身側を去らず、常に其の隙を伺て、惑亂せんとせり。

太子城門を出でゝいよ〳〵進み行きければ六萬諸天子各寶玉炬火を手にして導引し光明赫奕して道路は晝間よりも明かなり。されど之れ只太子と其の從者の眼に映せしのみにて一切諸物中之を知るものあらざりき。又百千天子は、虛空より優鉢羅花、俱母那花白蓮花等を雨らし、沈香末香旃檀香を散せり。而して無量諸天は恭敬圍繞して太子の一行を守れり。

其夜行くこと四百八十里、[三五]阿奴摩河に達せり。河幅八百尺ありしかど、犍陀は一躍して越へたり。車匿も亦犍陀の尾に附して越へたり。太子即ち馬を下り、寶衣纓絡寶冠を解きて盡く車匿に與へ、告げて曰く、汝便ち馬を率きて歸り大王及び國の群臣に此の狀を奏し且つ我が爲めに謝せよと。車匿言ふ、吾當さに隨從して、太子の所須を供給せんと。太子復た說て言ふ、汝若し我と止まらば我が衣服及び犍陀は如何にす可きぞ。又父王及び耶輸陀羅は如何にして我が成行を知らんやと。干時犍陀は長跪して主從の問答を諦聽しつゝありしが、卒然顚倒して氣息絕へたり。されど太子を載せて宮城を遁れ出でし功德により、直ちに生を兜率天に受けたりき。車匿は悲泣しながら接足禮拜して辭し還れり。而して當時の成行を國王に奏せり。

太子離俗を得て踊躍欣喜、先づ頭髮を剃ちんと欲し、右手劍をとり、左手髮を握めり。而して思へらく、我若し成道を得るものならば今此髮を虛空中に擲するも決して落下することなかる可しと。即ち之を切りて空中に擲せしに、十六哩高さの塲處に止りて落下せざりき。時に天神一大金篋を携へて出現し、頭髮を其中に收め諸天子と之を忉利天に安じ、法の如くに供養せり。次に又一天神出現して沙門所須の八品を供給せり。悉達多即ち舊衣を脫し、新に袈裟衣を着せり。悉達多は追使の及ばんことを恐れて、翌朝早く出立し、其日四百八十哩徒步して[三五]王舍城に達し、東門より入り、鉢を持して戶々食を乞へり。

太子王舍城に入りしときは一大祭日なりしを以て、諸人民衆所々に聚集せり。然るに今顏貌相好殊特、容姿端嚴優麗なる一沙門の入り來れるを見て觀喜愛敬、舉城皆悉奔馳瞻視、或言天人、或言帝釋梵王天神龍王、歡喜踊躍不知何神、事國主[三六]頻婆娑羅王に徹す、王即ち親臣を使はして彼を伺察せしめ、且つ使者に謂て曰く彼若し忽然として消失せは、彼は確かに天神なる可し。若しそらすして施與物を食はゝ確かに一の沙門なる可しと、使者王命の如くに彼を追ひ、且つ彼れ忽然消失するか、又は其の施與物を食ふかを伺へり。

太子既に食を得ること十分なるを見て、去りて。[三七]槃頭和岩の下に坐し鉢を執て施與物を食はん

とせり。然るに日頃美食佳肴に飽きし身の他人の殘物は食ふ可くもあらず。見るさへ嘔氣胸に衝き來りて堪へ難ければ、太子はしばらく瞑目默想して謂へらく、此食物我が腹に入らざるか。此食物は我が身体と同し諸大種より成立するものに非ざるか。されば今此食物を食ふは即ち同質の二物を相混和すると異ならざるに非ずやと。遂に之を食へり。頻婆娑羅王の密使之を見て直ちに王に復奏せり。されど王はタトヒ天神ならずとも決して凡俗の人にあらずと信じ、群臣と出で太子に詣る、便ち問ふて曰はく、是何人乎。從何國來。何所姓族太子答へて曰はく、迦比羅城主淨飯王の一子なり。今衆生濟度の道を成せんが爲めに沙門となれりと。王之を聞き驚起して曰く。太子生多奇異、形相炳著、德喩乾坤。當王四天下爲轉輪王。四海顒顒臺神寶至。何棄天位、自放山藪。假令太子不樂本國、願以鄙邦貢上處焉。訓誨黎庶各得其所。五樂自娛唯當納受。不可距至懷。太子答曰吾久達此一切無常、棄天地位無可慕樂、是故出家行作沙門（佛說普曜經第四卷告車匿被馬品第十三（藏經西帙第四冊））王種々觀告するも太子の毅然として動かざる見て、遂に其の志の奪ふ可からざるを覺り、便ち曰はく、汝今爲於大解脫故、而欲者、敢不相留。唯願太子、所期速果、若道成者、願先見度（過去現在因果經第三卷）太子は該岩の村里に近く常に騷然として修行を妨げらるを以て去りて苦行林に入り。四境寂靜にして喧鬧聞もるなき場所を選べり。時に五人の梵志あり。其の名を憍陳如、跋提、婆敗、摩訶男、阿說示と稱す。常に太子に奉侍して太子の無上正覺を證得するを待てり。太子も亦修行怠懈なく早く佛陀の高位に陞らんと勤めたり。されど尙は眞理の曉光だに拜する能はざるを以て、一日自から念ふやう、我かく勤精怠りなきも尙は正覺を得る能はざるは、是れ常人の如く飲食するを以て ならん。今より日に一麻一米とせん。以て彼岸に達するに近からんと。此くて斷然減食して苦行を勤修せしかば身体羸瘦して枯木の如く、顏容憔悴して三十二相消失し、体力衰弱して自から立つことすら能はざるに至れり。一夜除歩深思惟しつゝありしが卒然昏倒し、氣息殆んど絶へたり。爾時諸天族集して降來し、或は云ふ、太子既に死せりと。或は云ふ、只一時の昏倒に過ぎずと。一女天あり、即ち迦比羅城に飛行して、淨飯王に現はれ、太子既に死せりと告く。淨飯王眉をひそめて云ひ玉ふやう。然らば太子既に無上正覺を證得せしかと。女天答へて曰く、否な然らず、無上正覺を證得せんとて勤修せし苦行の甚大にして太子の身体之に堪もる能はざりしが爲に死せるなりと王愀然として曰く然ば太子は未だ死せざるなり太子は佛陀の三十二相を總具せり、何ぞ正覺を得ざるの前に當て死す可けんやと。女天即ち歸り見れば、太子既に蘇生してありければ、再び迦比羅に飛行して、之を淨飯王に告げたりき。

太子漸く蘇生し、起ちて鉢を執り、村里に出でゝ食を乞ひ、直ちに之を食ひしかば氣力回復して、三十二相も亦現出せり。さて成道の日いよ〳〵近づき、其前夜となりぬ。時に太子は五夢を見たり。譯者曰、成道の前夜に五夢を見たりと云ふことは余は左の諸經を撮したれども見當たらず。是れ全く北方佛教徒の傳說になるものなるか。又は余の撮捜したる諸經外に之を記述せる書あるか。但し余の捜撮したりし經は方廣大莊嚴經、普曜經（二經、藏經、宿帙四）過去現在因果經、修行本起經、太子瑞應本起經、異出菩薩本起經、異出菩薩本起經、藏經、宿帙七冊）、佛所行讚、佛本行集經（以上同藏帙七冊）、摩訶僧祇律、佛本行集經（以上藏經、長帙第十冊）

太子は五夢を見たりと。

一夢に曰く、大地を床とし大雪山の岩を枕として寢ねしに、四海の水澎湃として大地に溢れ、彼が腕足を浸せり。爾時一切諸天神虛空に現出せりと、覺めて自ら解して曰く床は我が佛位を表はし、枕は我が一切種智を顯はせり。我が敎は一切世界に充滿す可し。我必ず明日佛陀となる可しと。二夢に曰く、一箭臍中より發出して虛空に上り、漸次長大して遂に婆羅門天に達するに至れりと。自から解して曰く、一箭臍中より發出せるは是れ我れ一切衆生を救濟する眞實敎義の中心となる可きを表示せるなりと。三夢に

曰く、黔首白身の小蟲彼が身邊に簇集すと。自解して曰く、之れ一切衆生の我に來るを表示せるなりと。四夢に曰く、千色萬光の羽毛を備へたる諸鳥、遙かに四天より飛びて彼が身邊に來れり。然るに彼が身邊に近づくや彼等は忽然として一切悉く皆な金色に頓化せりと。自解して曰く、是れ一切衆生は各其機根に應じて千數萬宗を信奉すと雖も、終には悉く黄衣を着し、我が教を信奉するに至る可きを表示せるなりと。五夢に曰く、魏然として雲漢を摩する一高山あり。其高さ十六哩なり。全体塵垢を以て成立せり。彼れ徒跣にて其上に登り、遂に其の絶頂に達せるに毫も足を汚がす事なかりしと解して曰く、是れ、我宗教の奉信者は種々貴重なる物を以て、我及び我諸弟子を供養すとも我等は決して其等の物にて心の純潔を汚さるゝことなきを表示せるなりと。全然夢覺めて後、佛は大に勇氣を增したり。思へらく、成道の自近し。此等の吉夢は其の前兆なりと。一樹の下に結跏趺坐して東方に面す。而して其寶身より煥發する大光明は赫奕たり。之に映する樹枝樹葉は悉く金色を呈せり。

夫より佛は坐より起ちて、尼連禪河に至り、清流に入りて洗浴し、一深林に入りて、娑羅樹を求め、其の下に結跏して其の日を送れり。夫れより、菩提樹下に移らんとせり。是に於て諸天降下して二樹の間に道路を作れり。其幅三百尺。一面に花を散せり。佛此の途を歩みて菩提樹の下に達し、樹の四側を觀視して遂に東側に於て金剛座を設くるに決せり。蓋し是れ一切過去諸佛の降魔成道せし場所なれはなり。さて佛は途次一梵志より授けたる淨軟草を設座の場所に投せり。其の草の落下して觸るゝ所、大地蹠然として分裂し、中より金剛座忽然として現出せり。其高さ十四尺なりき。佛靜かに其の上に陞りて結跏趺座し玉へは四隣の草木自から日光の障壁となりて清涼なる陰を作れり。于時一切諸天は之を見て曰はく。見よ、悉達多太子無上正覺を證得するの時期到着せり。我等降りて太子に供養禮拜し、且つ大魔軍降伏の景狀を目覩せんと。

さて大魔王は太子成道の時期到來せるを見て、憤怒に堪へず、大聲叫破して曰く。悉達多成佛するは今日なり。我之を妨けざる可からず。我隙を伺ふこと既に六年間、而も曾て幸機を得ず。今や彼は愈々無上正等正覺の位に陞らんとす。我今日を失はゞ又何れの日あらんやと。即ち大鼓を打つ、其聲蹠然たり。諸天婆羅門之を聞て戰慄す。されど太子は端然金剛座に結跏して敢て動かず。心竊かに思へらく、魔軍來襲の順備をなすならんと。魔王は傲然大象に跨り、五百の巨頭を現はし、一千の赤眼を照かし、五百の紅舌を火の如くに吐けり。而して千手各異なれる武器を執れり。さて順備全く整ひけるが彼は竊かに思ふやう、我今前面より攻擊せんとせば、其の彼に近接するに先だち、彼は遙かに我軍を見て心大に警戒を加へ且我と戰ふの順備せん。故に密かに背面より近接し、一微音を發して彼の心を惑き、其何事なるかを見んとて顧みるの一刹那、直ちに進んで彼を捉へんと。于時魔軍充滿虛空、圍繞菩薩、三十六三六由旬、皆使變成師子熊羆兕虎象龍龍牛馬犬豕猴猿之形、不可稱言、蟲頭人軀蚖蛇之身龜龜之首、而有六目或一頸而多頭、齒牙瓜距、擔山吐火、雷電四繞獲持戟鉾、修所本起經卷下出家品第五 諸天之を見て大に恐怖し大地の下に遁れ入りて皆々悉く戰慄せり。

太子徐に兩眼を開きて、無量無數の魔軍の來襲と諸天の遁逃を見て、思へらく。爰には我を助くる父母兄弟なければ親族朋友臣下もなし。實に我只獨あるなり、されど三元六波羅蜜多は我が父母兄弟親族朋友臣下たる可く、佛陀の三十七大德は我が勇將たる可し。而して無量無數の我が修行は

大猛軍たる可し。又我が深大なる性能は我を繞れる濃涯なり。我が大慈悲心は之を充たせる大水なり。故に如何なる強敵と雖ども決して我に近づく能はざる可し。又我が四〇沙覩波理首圖尸羅は我が城門なり。我が四一因度羅讖我羅尸羅は其の衛兵なり彼等は決て敵の爲に其門戸を開かざる可し此の金剛座は光榮の座たる可し。此の美はしき菩提樹は勝利の天蓋たる可しと。此く考へつゝ太子は嚴然として不動不怖。（譯者曰、闍寳前太子かゝる言を吐きしことは支那譯釋迦傳經には何處にも見當らず。）

爾時魔王は菩提樹の後方より突進し來りて攻擊を始めんとせり。されど太子の身体より燒發する光明の赫炎たるに打たれ、近接する能はずして退けり。次に猛風を起せり。颯然として大岩を虛空に投上し大樹を倒す。其勢甚大にして當る可からず。されど太子の一毛菩提樹の一葉をだに落さざりき。魔王は太子必ず大風に吹かれて他界に投下されしならんと思惟し、一大岩の上に登りて、遙かに之を瞰めば、太子は湛然としてもとの金剛座に端座し、其寳身よりは、光明燦然として曜輝し、宛も大陽の中天に掛かるが如くなりき。

次に魔王は黑雲を起して大空を蔽へり。電火は閃々として暗黑をさき百雷は轟々として天地を振動す。而して大雨は盆を覆して降れり。されど其の太子に近づくや忽然として細雨と變し、微かに太子の面を拂ふて去れり。以て太子をして宛も足は疲れ、喉は渴ける旅人の綠林の蔭に入りて、清水の滾々たるを掬飲せる時の如き快感あらしめたりき。次に魔王は燃熾せる大山大岩を雨らせりされど其の太子に近づくや、忽爾として或は美麗なる花冠と變し、或は紅白千色の美花と化して太子の四圍に散亂し、宛も天妙花を供養せるか如き觀ありき。次に魔王は千種萬樣の兵器を雨らして、以て太子の身体を微塵に切刻せんとせり。されど是亦悉く華花と變して、太子の四圍に堆積したりき。其後又魔王は燒砂を雨らせり。されど之れ亦薰香と化せり。次に又塵垢を雨らして太子を埋まんとせり。されど之れ亦薰香と化して太子の四圍に散亂し宛も太子に供養するか如くなりき終りに大暗黑を起せり。されど其の太子に近つくや、忽倏として、大光明と化し、以て太子の寳身を照曜せり。此く九大難を下せるも彼等は何の害をも與へずして經過せるを見て、魔王は恰も狂象の如くに瞋忿し、而して毒心尙ほ止まず。即ち大聲魔軍衆に令して曰く、悉達多を捉へ、彼をつき、彼を切り、彼を粉碎し、彼が成道の念を斷て、逃すなかれと。自から大象に跨り、卒先して進み、太子に近より、叱して曰く、我が金剛座より去れと、太子は毫も怖るゝことなく、莞爾として答へて曰く、罪業深き魔王よ、我は此座を得んとて、四四二阿僧企耶一却波洛沙の間總波羅蜜多を修せり。故に我は正しく此座を占有す可き者なり。汝は一波羅蜜多をも修せずして如何で之を我座なりと云ひえんやと。魔王之を聞きて愈々赫怒し、更に叫んで曰く、我は汝より多く布施を與へたり。我は汝よりも多く波羅蜜多を修せりと。太子曰く何處に其見證者ある や。魔王即ち其の軍衆を指して曰く。之れ我が見證者なりと、而して軍衆一齊に、然り、然り、我等は其の見證者なりと叫べり。其聲天地も崩るるばかりなりき。魔王は傲然として曰く、ア、、悉達多太子殿下、如何に、我が見證者は多からずや。殿下は一人の見證者をだに出さるゝを得るや と。太子莞爾として答ふる樣汝の見證者は皆な悉く生きたる又不公平なるものどもなり。我が見證者は生きたるものに非らず。又毫も不公平の念を有するものに非らずと。即ち手を下して大地を指せば、大地轟然として音あり、忽然裂けて百三十六地獄より猛火炎々たる數多の大火山現出せり。魔軍衆之を見て大に驚愕し、木葉の風に散るが如く十方に散失せり。魔王の大象も亦驚倒し、

（譯者曰、菩提樹之下魔軍來襲は佛本行集經第二十三卷に、七卷に至る間及び方廣大莊嚴經第九十卷一降魔品第二十に最も詳しく描寫せり。）

而して再び起ちて逃走せり。時に魔王は地上に投下されたりしが、其身体大地に觸るゝや千手千兵器は忽然として消滅せり。即ち大叫して曰く、ア、悉達多太子殿下、我は今殿下の權能の强大にして又赫炳たるを知りたり。殿下は三十婆羅蜜多を修得せり。我は殿下の勇氣を世界に宣言せん。我は殿下の權能を宣言せん。願くは免し玉へ。願くは免し玉へと。此く叫ぶこと三度にして、魔界に逃走せり。後又閻浮提州の或所に隱れたり。魔王に三女あり。四三羅知、單波、藍伽と云ふ。父の魔界に歸らざるを見て、大に悲み、其の隱くるゝ所を求め、遂に閻浮提州にあることを探知せり。而して此く退隱せし原因を推知し、即ち彼の前に至りて曰く、妾等父よりも更に巧妙なる方法を以て悉達多を誘はんと。魔王之を聞き、彼等に勸告して曰く、止めよ。悉達多は到底我等の勝ち得可きものに非ずと。三女之を聞かずして菩提樹下に至り、六百の婇女と化して、大に太子の美貌を稱讃し、又何故に太子はかゝる所に獨居し結ふやを問ひ、更に太子は后妃を有せざるか、此處に獨居し結ふは戀しき美人に逢はんが爲めなるかを問へり。されど太子は寂然不動なりき。單婆は更に續きて太子の美貌を稱讃し、又彼に諂諛せり。而して其の功なきを見て、更に種々佞辨を弄して太子をして今捨てし娛樂を再び思ひ起さしめんとせり。されど總て功なかりしかば、彼等は遂に失望落膽して去れり。諸天婆羅門は襲さに魔軍の來襲に恐れて大地の下に逃走せしが、今や魔軍の降伏を見て、天界に歸り來り、太子に微妙の天花を供養し、且つ大に叫んで曰く魔王は逃走せり。我等の太子は大勝利を得たり、我等の太子は大勝利を得たりと。

余は更に進んで佛陀の傳記の概略を叙述するに先だち、茲に諸君の注意を乞ひたき二事あり。もつとも詳はしくは後章に論說す可ければ茲には只其要點を擧ぐるに止む。(一)宇宙の二元的觀想及び善惡二力の爭鬪なり。此二觀想は初代の耆陀的觀想より印度後世の哲學的觀想に至るまで、總て印度の諸宗敎を貫通して現はれ、又波斯の宗敎に於て更に論理的なる斷結、狀態に臻達せるものなり。

(二)佛陀及び基督の逼試の類似なり。而して時(場合)の類似は誘試の事柄性質の類似よりも更に著し。佛陀は惡魔の巧誘逼試を却けたる後、直ちに無上正等正覺を證得せり。而して基督の誘試は又彼が救世主としての天職に入る眞前なりき。

太子魔軍を降伏せし時は、大陽尙は西天に沒せざりき。第十時に至て嘗て無終無限諸世界に生息せし一切衆生の境遇を悉知する智慧を證得し、第二十時に至て、天眼を證得せり。之を以て觀察世間悉皆微見、如明鏡中自覩我面像。更に第十時に至て、輪廻の衆因を開披する智慧を受けたり。此智慧によりて以て一切因果應報の關係を知識するを得るなり。翌朝明星出づるの時、一切の妄想邪念は全然太子の心裡に斷滅して、一切衆生は茲に无上至尊最勝佛の新たに生まるゝを見たり。而して六色の大光明は赫炳として佛陀の寶身より煥發し、一切衆生を遍照せり。而して此の大光明を浴せしものは皆な悉く叫んで曰く見よ、如何に美はしき光明ならずやと。彼等は此く佛陀を目前に拜するの幸機を得たる功德によりて輪廻の羈を解かれたりき。爾時又三十二端相は現出し、一切諸天人間は無量無數の讃歎と供養とを呈せり。四四 爾時太子の心は蜜漿を以て充ちたる瓶の如く達磨の四五 菴伏洛娑を以て漲り、溢れて左の偈となれり。

多くの樣々なる生を經て、
我は情慾の家の建築者を求めつゝ、

而も彼を見ることなくして走れり。
轉生は苦痛なり。

譯者曰、下文の偈は、匿々漢譯諸經を搜檢せしかど遂に之れあるを發見すること能はざりき。蓋し十分に搜檢に拙なりしに見當りしらん。方あれば教へられよ。

あゝ、情慾の家の建築者よ、我は今汝を見たり。
汝は再び我が爲めに一の家を建つる能はず。
我は汝の桷を破壞せり。
汝の中心の支柱は破毀されたり。
我が心は涅槃に行けり。
我は今邪念の皆滅に達せり。

此偈を繰返して唱へたる後、佛陀はかく思惟せり。我は今正覺を得たり。魔王を降伏せり。一切邪念は斷滅せり。我は今三界の主なり。而して是れ皆な此座に於て得たるものなり。故に更に此の美はしき座に止らんと。此くて尙は茲に止りて結跏趺坐すること、七日間なりき、諸天之を見て思へらく、太子は尙は佛陀とならざるならん。尙は勤修す可き行あるならんと。佛陀は竊かに諸天衆の此の疑訝を起せるを知り、即ち金剛座より起て、虛空に上り、暫時止まりたる後、菩提樹の北東側に下れり而て茲に七日間樹を觀視して禪を修せり千時諸天は此場所より金剛座まで金道を作れり。佛陀此道を往復すること更に七日間連續せり。次に諸天は又樹の北西側に金殿を造れり。佛陀茲に獨坐すること更に七日、其間今證得したる法智に就て反省せり。而して此く思惟せり。我は四十五年間佛陀として此の世に止まらん。[四六]舍利弗及び目連は我が大弟子たる可し。我が宗教は五千年間連續す可し。我は三藏の教を開說す可しと。第五七日に[四七]阿闍波羅樹の下に至り、[四八]涅槃果を樂めり。第六七日[四九]目眞隣陀湖に至れり。是時寒風霖雨七日霽れず、目眞隣陀龍王即ち

湖中より出現し、身を以て佛を衛り、以て諸害を拒げり。故に佛は怡然として禪定を修せり。第七七日には[五〇]其利波留林に入れり。茲に又石床の上に止まること七日。此期までは彼は嘗て一物も食はず。只涅槃の果によりてのみ生命を保てり。されど第五十日目に[五一]帝釋天は[五二]菴羅多羅留の一片を與へたり。佛之を食して大に氣力を回復し、阿耨達羅湖畔に至りて清水を以て漱ぎ、次で其利波留林に歸れり。

正覺證得後は佛は嘗て飲食せざりしが、此時始めて遠國より來れる二商人の供養せる蜜漿を食せり。是れ佛陀の位に陞りて後、受けたる第一の供養なり。

第八七日佛其利波留林を去りて、阿闍波羅樹の下に至れり。而して茲に自から念じて曰ふ、

聖道甚難登、　智慧果難得。
我於此難中、　皆悉已能辨。
我所得智慧、　微妙最第一。
衆生諸根鈍、　著樂癡所盲。
順於生死流、　不能反其源。
如斯之等類、　云何而可度。

（過去現在因果經第三）

譯者曰、右は佛陀の偈なり、南佛教徒は此の偈を傳へざるが如し。されど佛陀此の時に起せし思想と稱して傳ふる所の言は其の意右の偈と同一なり。故に今之を譯するに當て右之偈を以て之に代へたり。但し上文にも云へるが如く、余は著者が本文に於て純然たる南部佛教の傳說を描寫するに對して、各目下細字を以て北部佛教の傳說を書き入れ、以て兩傳說の異同を示さんとせしが、印刷の期迫りたれば之をなすに暇なく、不得已其計畫を捨てたり。されど尙ほ兩傳說の一致せるところは之を和譯せずして可成的漢譯經の句を以て之に代へ、聊々兩傳說の一致せる點だけなりとも示さんとせり。之れとても甚だ不完全なること云ふまでもなし。他日問暇を得ば、余自から此の問題に就て一冊を著す可し。

爾時大梵天は諸天を率ひて佛の所に至り、妙法輪を轉じて、生死の大海より衆生を救濟せんことを勸請せり。佛默然として之を受けたり。大梵天及び諸天は佛の受請を知りて、頭面禮足、各還所往。成佛後第六十日、佛陀は阿闍波羅樹を去りて獨歩、五三伊師波多那五四精舍に赴けり。其距離二百八十八哩なり。此日の夕方伊師波多那に着せり。爾時過去佛の說法せし場所は、蘊然として裂け、內より金剛座現出せり。佛即ち其の上にのぼれり。時に夕陽既に西山に隱れて餘光尙は西天を染め、碧空に掛れる無量無數の星辰はやゝ其の光芳を放たんとす。好景云はん方なし。而して三千大千世界一切人天等衆佛の上下周圍に充滿して諦聽せり。即ち佛陀は靜かに金口を開きて五五轉法輪經を說けり。劈頭に曰く、

出家之人有二種障。何等爲二、一者心著欲境而不能離、是下劣人無識凡愚非聖所行、不應道理、非解脫因、非離欲因、非神通因、非成佛因、非涅槃因。二者不正思惟自苦其身而求出離、過現未來皆受苦報、比丘汝等當捨如是二邊。（佛說方廣大莊嚴經第十一卷轉法輪品第二十六之一、大藏經宙帙第四冊五十六枚）

譯者曰、漢譯佛說轉法輪經（大藏經辰帙第六冊十六枚裏）には左の如く譯せり、

世間有二事墮邊行、行道弟子捨家者、終身不當與從事、何等二、一爲念在貪欲無清淨志、二爲猶著自愛不能精進、是故退邊行、

佛本行集經（大藏經辰帙八冊第三十四轉妙法輪品五十二裏）の譯はほゞ莊嚴經のに同じ。

爾時佛は摩伽陀語を以て說き給ひしと雖ども、諦聽の一切衆生の耳には各々自國の語を以て說き給へるか如く聞へたり。故に畜生の類に至るまで其の寶敎を解するを得たりき。

夫より佛は諸國に遊化して數多の弟子及び奉信者を得たり。其の摩揭陀國の竹苑に在りて說法しつゝある時、父淨飯王は太子已に得道せしを聞きて、中心欣喜渴仰々積り、即ち一釋種に一千の隨從を與へ、竹苑に至りて佛を迎へしめたり。其の使に言をよせて曰く汝正覺を得んが爲め、家を去りて既に七年。今や志願成滿せりと云ふ。而して先つ汝か父、妻及び眷屬を敎化せずして之を諸人に施す。是れ正道なるか。請ふ歸り來りて又我等をも敎化せよと。さて使者の一行竹苑精舍に着せしとき、佛金口を開きて獅子吼し玉ひつゝありしかば、即ち聽聞者の外圍に跪立して、之を諦聽せり。而して遂に五六羅漢となりて精舍に止り、國王に復命せざりき。國王は永く使者の復命を待ちしかど、使者遂に歸り來らざるを以て、更に第二の使者を送れり。されど是れ亦歸り來らざりき。此くて國王は九回まで使者を送り給ひしかど、皆な悉く歸り來らざりき。彼等は精舍に至りて佛の說敎を聽聞するや、皆な悉く羅漢となりて其處に止りしなり。是に於て國王は大に愁ひ、其の最とも親任せる貴族五七迦留陀を召して曰く、我は九度まで九人の貴人と九千の隨從者を送りたり。されど一人も歸り來らず。我は生前に於て一たび我が子を見んと欲するなり。汝竹園に至りて彼に面し、來りて我を見んことを勸請せよと。迦留陀答へて曰ふ樣、王若し我を許して出家せしめば、我其の命に從はんと。王曰はく若し彼を勸めて、來り我を見せしめば我は汝の欲する處を許さんと。迦留陀即ち五八王舍城へ出立せり其の精舍に到るや、時正に佛陀說法の眞中なりき。迦留陀之を聽聞して遂に又羅漢となれり。後七八日を經て、春風は吹き來れり、地は一面に綠草を布けり。草木は皆な美花をつけたり。迦留陀竊かに思へらく、是れ我が使事を果す可き好時機なりと。即ち佛陀の所に至り、頻りに王舍城と迦比羅城の間の好景を說けり。佛之を怪み、彼は何故に突然かゝる言をなすやを問へり。迦留陀即ち答へて曰く、汝の父は汝を望

むこと、百合の旭日を望むが如く、又汝の妻は汝を望むこと夜嵐に吹かるゝ百合の月光を望むが如しと。佛之を聞き熟考して思へらく今や前佛も其生土を訪ひし時なりと。即ち六十句の一偈を唱し、彼が系統及び生土の事を述へて後、迦留陀に約して曰、我明日此處を出立して迦比羅城に赴かんと。其の精舍を出立するや、之に隨從せる比丘は二萬人なりき。而して一日十六哩づゝ歩めり。されど兩城の距離大なるを以て其迦比羅城に着せしは三ヶ月の後なりき。迦留陀は神足を顯はして飛行し、先つ該城に到りて當さに佛陀の至る可きを報せり。王是を聞きて欣喜無量、直に最美の食物を供せり。迦留陀は鉢を以て之を受け之を食し畢りて、更に美食を受け、瓢然空中に上りて飛行し、佛陀の所に至りて之を呈せり。佛之を受け、欣然として食せり。是れ佛宮城を遁れてより七年父の食を食したる始なり。迦留陀は佛の該城に着するまで日々空に騰て宮城へ往復し以て佛の食を運べり。

さて佛到城の日近づきければ國王は之を迎ふる順備を整へたり。愈々其の日となりければ、先づ五百の童男童女を先導とし、次に五百の皇子皇女を之に從はしめ、國王自から其の後に從ひ一萬六千の隨從を率ひて佛を[五九]尼拘盧陀園に迎へたり。佛該園に入るや、一高座の上に瑞坐し給へり。二千の沙門之を圍繞して立てり。爾時年長の皇族等は竊かに思へり。悉達多は我等よりも若し。彼は我等の甥なり、我等は彼の伯父なり、祖父なり。我等何ぞ彼を拜するの理あらんやと。此くて彼等は若公子等をして、佛を拜せしめ己等は、少しく離れて此方に立てり。佛彼等が所想を察知して曰く、我が眷屬は我を拜するを嫌惡せり。されど我は其の嫌惡の念を去らしめんと忽然高座より起ちて虛空に上り、寶身よりは六色光明を放ち、兩肩、耳、目、鼻、手、足及び九關節九萬九千孔よりは火流を發し、又次に同所より水流を發せり。而して水流は奔亂して一萬世界全体に廣まれり。されど其を受けんと欲するもののみをひたし、其を避くるものには至らざりき。火流も亦均しく一萬世界全体に廣まれり。されど蛛網だにも燒かざりき。夫れより又佛は己と同形の像を虛空に現はしたり。而して二佛相並立して或は共に歩み、或は共に談せり。時に舍利弗は王舍城にありて之を見、五百の弟子を率ひ、虛空を飛んで來れり。而して佛を拜せり。衆人之を見て思へらく、三佛出現せりと。佛舍利弗の志願によりて。[六〇]彌勒菩薩の傳を說き畢りてもとの高座に下れり。爾時淨飯王は佛を禮拜して曰く、我が主、我が佛、我が太子悉達多よ。汝は我が家に生れたる故、我は汝の父なりと雖も、以後我は汝を子と呼ばざる可し。我は汝の奴たるの値だになきものなり。我は既に汝を拜すること二回、而して今再び拜せん。我は我が全國土を汝に供ふるも汝は之を見ること只死灰の如くならんと。全聚會の一切諸人衆は王の禮拜に傚ひて皆な悉く佛を禮拜せり。干時佛は諸天婆羅門、釋迦種、天釋及び羅漢等より四十二萬一種の供養を受けたりき。

翌朝王家の人々は喜欣の餘り、佛に供養するを忘れたり。故に佛は先づ漱き、顏を洗ひ、暫時禪定を修したる後、鉢を執り、二萬の弟子を率ひて、園を出で、戸々食を請へり。而して彼の至る所彼足を下さんとするに先て、大地まづ蓮華を現して之を受け、彼の足之を離るゝや蓮花忽然として消失せり。又彼の進行する所は、道路の高低忽ちに消へ、而して微風は颯々として一切不淨物をふき拂ひ、細雨は纖々として一切塵埃を打鎭めたり。而して彼の寶身よりは光明赫々として輝けり。

其の市城に入るや、赫々たる光明は全市を遍照し、宛も天界の如き觀を呈せしめたり。一切衆民は大に驚愕して、出でゝ佛を拜し、宮城の美姫嫉女は窓を開きて、彼を拜せり。耶輸陀羅姫も亦遙かに彼を拜して曰く、悉達多太子、太子は羅睺羅の生れし夜竊かに宮城を遁れ出で給ひき。其の時には、其の受く可き王國を忌み給ひき。されど今更に光榮廣大なる王國を受け給へりと。即ち起ちて淨飯王の所に至り、偈を以て佛の莊嚴相を頌し、且つ太子鉢を持して戸々食を乞へりと告く。王之を聞きて大に驚き、走せて佛の所に至りて曰く、汝何の故に我を辱かしむるや。吾は汝に食を給する能はざるかと。佛答へて曰く、是れ我が種族の常習なりと。王曰く、何ぞ此の言をなす。汝は摩訶三摩多の裔にあらずや。摩訶三摩多の列祖中誰れか乞食せしものあるやと。於是佛は其云ふ所の種族とは摩訶三摩多族の謂ひにあらずして、佛陀の種族を云ふものなることを告げ、且つ思へらく人若し隱れたる寶を發見せんか其の中の最も貴重なるものを以て、先づ其の父に捧ぐるは是れ其の義務なり。我は今達摩の礦坑を開きて父に捧げんと。夫より王に向て說法せり。說法終りて王宮の貴女四万人來りて佛を禮拜し、又之に供養せり。

爾時國王は使を耶輸陀羅に遣はし、彼も亦來りて悉達多を禮拜せんことを告げたり。されど彼は是に答へて曰ふ。若し妾に太子を拜するの價値あらば、太子自から來りて妾を見給ふ可べし。妾は爾時太子を拜せんと。佛之を聞きて其無禮を咎めず、却て其の言の如く自から彼が殿に至らんと答へ給へり。耶輸陀羅は佛我が殿に來り給ふと聞き自から頭髮をきり、粗服を著し、五百の侍女を從へて、出で迎へたり。而して其の佛を見るや、喜欣の餘り、己れの只一婦人たるを忘れ、佛足を擁して泣けり。但し大梵天すら佛足には接觸すること、能はざるものなり。故に國王は耶輸陀羅の爲めに辨じて曰はく、是れ全く彼汝を愛することの甚大なるより起れるものなり。且つ其の愛は偶然起れるものに非ず。汝宮城を去りてより今日に至るまで七年間、汝其の頭髮を剃れりと聞きし時は、彼も亦同じく頭髮を剃れり。汝粗服を著せりと聞きし時は、彼も亦同じく粗服を著せり。汝の如く彼は只一定の時に於てよりは何物をも食はず飲まず。又其の食ふときも土鉢を用ひたり。汝の如く彼も亦高座裝飾品を捨てたり。而して他の公子等が彼に向て結婚を談するときは、彼は斷乎として之を斥けて云ふ、妾は尙太子のものなりと。彼の汝を愛することかくの如く深く且大なり。敢て請ふ、今彼が犯せし罪を免せと。於是佛陀は、前世に於て耶輸陀羅は未來佛の妻たらんとの志願を起し而して今有るが如く喬答摩の妻たらんが爲めに、如何に四阿僧企耶、伽布洛乂の間、彼を助けたりしかを說けり。之を聞きて耶輸陀羅の悲痛と國王の恐怖は全く去れり。

さて其の翌日は佛の異母弟難陀の祝日（譯者曰、南部傳說は此の祝日は三重の祝日なりと云ふ、即ち新職就任の祝、新殿に移る祝、并に結婚の祝是れなり。）なりければ、佛は其の弟子を率ひて、式場に列せり。彼は先づ設けの高座に就きて、一偈を唱して最大の祝賀は邪念の斷滅、四諦の證得、涅槃の證得等にあるを說き、難陀を勸めて、鉢を執らしめ、之を精舍に伴へり。難陀は一に佛の言を恐れ唯々之に從へりと雖も其の心中は新婦を思ふて止まざりしなり。干時新婦は窓によりて之を見、難陀を呼びて、何所に行くやと問へり。されど難陀は佛を恐れ、敢て之を顧みざりき。而して其の精舍に着するや、佛難陀に說て曰く、（六二）娑扈羅伐留底の榮譽を思ふ勿れ、我の如く比丘となれと。されど難陀は尙新婦を思ふて止まず。爵々として樂まざりき。佛其の原因を察知して一日難陀に謂て曰く、汝の戀姫は美人なるかと、難陀言辭をて飾り

其美容と麗姿を設けり。佛涅槃の水を以て彼が情熱を滅せんと思ひ、更に問て曰く、彼より美はしき女子なきかと。難陀答へて曰ふ。然り、閻浮提全州を探くる彼より勝れたる美人なかるべしと。佛更に問ふ、彼は其の美姫よりも數倍美麗なる女子を見るを望まざるかと。難陀中心に思ふやう、何所を探くるも彼より美麗なる女子あらんやと。爾時佛は難陀の手をとりて帝釋天に上れり。而して途に老朽せる雌猿の燒林（地を耕作する爲めに林を燒き拂ひし地）中に燒殺されおるを見せて曰く、汝かの雌猿の屍を見るかと。難陀然りと答へたり。夫より帝釋天に到り、直ちに五百の天女を呼び難陀に謂て曰く、彼等と汝の愛姫と孰れか美麗なると。難陀之を見て大に驚き、答へて云ふ、彼等と比較しては、我が愛姫はかの燒猿の如しと。佛更に問ふて曰く、汝は彼等の中の最も美なるものを得んと欲せざるか、而して如何にせば彼を得るかを知るかと。難陀彼を得るの方法あるを聞き、大に喜んで其の方法を問へり。佛即ち、佛の敎に從ひ、戒律を守らば之を得るに難からざるを說けり。於是難陀は意を決して戒律を嚴守せり。此くして彼は佛道に導かれたりしが、しばし程經て遂に羅漢となれり。（譯者曰く難陀出家の次第に付ては佛本行集經卷第五十六七難陀出家因緣品第五十七上中に尤も詳しされど本文なる南部傳說と其趣少しく異なれり）成道後第九月、佛六三錫倫に遊化せんとて六四摩訶伐留伽河の河口に着せり。河岸に沿ふて一苑あり。六五摩訶那揭園と云ふ。干時六六那伽王の二軍は此園中に於て激戰しつゝありき故に佛は空中より園に入り、先づ一大聲を發して三軍を驚し、次に壘々たる黑雲を起して大暗黑とせり。暫らくして黑雲散し、黑開くるのとき、彼は空中に出現して寶身一面より黑烟を吐き、愈々彼等を驚かしめたり。次に皎々たる滿月の形を現せり。那伽軍此等の奇跡を見て大に恐れ、佛の求むる如く、大地に下り、革の敷物の覆ひ得るだけの地を占有せんことを許せり。されど佛大地に下るや、敷物の四隅に火柱を起せり。炎々たる猛火は四方に散亂して那伽軍衆を追へり。那伽軍衆は猛火に迫られて漸々退き、遂に海岸に達して更に退くの地なきに至れり。干時一大岩の海岸に漂ひ來るものあり。彼等は即ち其の上に逃れたりしが暫時の後、又本島に歸れり。爾時諸天現れ來りて佛に供養せり。佛即ち此の聚會に向て說法せり。後一瞬間に三たび全島を廻りて六七優樓毗羅に歸れり。佛は更に錫倫に遊化すること二回。第二の遊化は成道後第、五年なり。之れ那伽二王の大戰爭を鎭定せんが爲めなりき。第三の遊化は成道後、第八年なり。此時諸所を遊歷して諸衆を敎化せり。

以上南部佛敎徒の經によりて降神母胎より錫倫遊化に至るまでの佛傳の大略を敍述せり。夫より入滅涅槃に至るまでの傳說には格別上來敍述せしものと異りて面白きものなし。故に茲には略之。但し佛の說法及び敎會組織等に就ては後章に說述す可し。

さて佛は諸國に遊歷敎化すること四十五年、今や入滅涅槃時に近づけり。故に六八拘尸那羅に至らんとて先づ六九波伐に至り、金工七〇準陀の園に入りて暫時休憩せり。準陀之を聞きて大に喜び、直ちに來りて佛を禮拜し、且つ其弟子衆をも悉く其の家に招せり。而して彼等に供養せんとて豚肉を調作せり。諸天之を見て叫んで曰く、今や佛準陀の供養せる豚肉を食して涅槃に入り給ふ可しと。即ち四海の珍香を集めて、供養の豚肉に薰せしめ、其味をしていよ〳〵美ならしめたり。翌日佛茲獨衆を率ひて拘尸那羅に出立せり。蒼空万星の中に皎々たる月珪の如く、佛の寶身は前後導從の茲獨衆中に赫炳たりきされど準陀の供養せし豚肉は或る神秘なる原因によりて下痢を起し、其苦痛甚大なりき。佛即ち神力によりて其の苦痛をしづめ、少しく本道を離れたる一樹の下に至り、隨侍者阿難陀に謂て曰く、阿難陀、我は大に疲れたり。故に憩はんと欲す。我が外衣を

とりて四重にたゝみ、樹下に布けと。暫らくして又曰はく。阿難陀、我は大に渇せり水を飲まんと欲すと。阿難陀之を供しければ佛起ちて進めり。一行之に從へり。而して途に[七二]布久差候を教化せり。後一園林に達せる頃、佛再び云へり。我は疲れたり。臥せんと欲す。外衣を布けと。此くて佛は其力全く盡き自から動くことだに能はずして臥せり。蓋し青年壯者に向て、元氣体力の永續す可きものに非ざること及び如何なる人とても老病死の三苦は免るゝこと能はざるものなるを示せるなり。此くて波伐より拘尸那羅までの距離は僅かに十二里に過ぎざりしかど其旅行を終へるまでには二十五度休憩せり。而して漸くにして拘尸那羅の近傍なる一園林に達せり。爾時阿難陀に謂て曰く準陀に告げよ、汝の供養せし豚肉によりて我涅槃に入らん。汝の功德は實に廣大なりと。

夫より該園を去りて[七三]比藍耶和底河を渡り、拘尸那羅に近き、[七四]優波和留多那と呼べる娑羅樹林に入れり。阿難陀に謂て曰く、阿難陀我は疲れたり。臥せんと欲す。娑羅雙樹の間に首を北にして牀を敷けと。佛即ち其牀に臥したりしが、再び起つことなかりけり。佛又た金口を開きて曰く、我若し[七四]摩留和諸侯の居城近くにて涅槃に入りながら、之を彼等に告げざれば彼等大に悲まん。故に行て彼等に告げよと。阿難陀詣て之を告げければ、摩留和諸侯諸侯姫及び貴人等は大に悲痛啼哭し叫んて曰く、我等の王なる佛陀は今や涅槃に入らん。ァ、我等の最勝最尊なる[七五]多多迦多は今や此の世を去らん。一切吾人の悲痛を憐みし目は今や將さに曇らんとすと。即ち佛陀の前に馳赴し、身を地に投じて號泣せり。

翌早朝佛隨從の一切比丘を集めて曰く、汝等比丘、我四十五年の間、宣說せし敎に就て疑ふ所有らば、今疾に之を云へ。然らざれば他日我在世の間に之を聞くの機を得ざりしとて嘆くも益なからん。若し又我に向て問ふを憚らば相互に其の疑を明せと。されと衆毫も疑なかりしが故、默然として口を開くものあらざりき。之を見て佛更に語を續けて曰く、汝等比丘釋かんと欲する疑を有せざるか。さらば我涅槃に入らん。我は汝等と共に我が法を殘す。タトと全智意の諸元素消滅するも、三寶は尙は殘らんと。語訖りて寂然入滅せり摩留和の諸侯等は佛の入滅を聞き、一時は悲痛哀號前後を忘れしが此くてある可きにあらねば諸侯姫貴人等と共に最良の布と綿を以て佛寶身を包めり、夫より六日寶身に供養し、又茶毘所を整作するに費せり。第七日には一萬世界の諸天婆羅門香花を雨らし、天樂を奏せり。故に凡そ耳目を樂ましむる物は一切、寶身に供養されたり。而して其の茶毘所は摩留和諸侯の即位殿と定められたり。夫より寶身を金棺中に安置し、之に充たすに香油を以てし、又之を十二丈の高さに積み上けたる薪積の上にすへたり。かくて順備全く整ひければ摩留和諸侯中最も勝れたる四人の侯は沐浴齋戒し、新衣を着して、各炬火を乘り、佛薪積を燒かんとせり。されど幾度之を燒くも火終に肯て然らず。諸侯姫等は其の周圍に並列して、金扇を以てあふぎたりと雖も尙ホ功なし。かくて續くこと七日間なりき。諸侯其の緣故を知らずして大に困難し、之を高僧に問へり。高僧答へて云ふ。[七六]大迦葉に非ずんば、之を燒くこと能はず。彼の外に之を燒く力を有するものなし。故に大迦葉の來るまでは如何に畫策を廻らすも益なしと。此時大迦葉は既に波和を出立して拘尸那羅に來る途上にありき。高僧は諸侯に命じて彼を迎はしめたり。大迦葉は五百の弟子を率ひて來れり。直ちに佛積の側に至り、而して之を回ること三回、佛足の伏する方面に止りて、今一度之を禮拜せんことを竊に願ひければ、佛足積を開

きて忽然出現せり。大迦葉即ち稽首禮拜せり。干時聚會の全衆も亦皆均しく禮拜せり。而して大迦葉の禮拜畢るや、佛足は再び忽然として薪積中に隱れ、薪積は於是自から燃へ上れり。然り而して只四齒二臉骨及び頭骨の外は金剛体全く燼滅せり。爾時天雨を下し、地水を上げて、薪火を消滅しければ諸侯は即ち象牙の杖を以て灰をかき、全く遺骨を拾集して之を金瓶に收め、還て城に入り、之を高樓閣に安置して一切禮供養せり。而して思へらく、閻浮提州の諸國王佛滅をきかは必ず來りて遺骨を求め、我若し聞かざれば兵力に訴へんこと必せり。預め之に備へずんばある可からずと。果して其の言の如く、隣側の諸國王は佛滅を聞きて大兵を起し、遺骨を求めんとて拘尸那羅に來れり。而して將さに劍刃相交らんとするの時、一婆羅門あり、其名を獨樓波と云ふ。此一大危期を見て、直ちに諸國王の間に奔走し、勸說大に勉む。諸國王皆な其の言の理あるに服し、遂に彼か調和策に從へり。於是獨樓波は諸國王を集め、遺骨を等分せり。諸國王之を得て大に喜び、各其國に還りて、高塔を起し爰に之を安置して以て後昆に傳へたり。

上來叙述せる所、聊々傳說的佛陀傳の一班を示し得たりと信ず。故に本章は之にて擱筆し、次章に至て之れが批評的檢研を試みんとす。但し本章はスペンス、ハーデー氏の佛教書を正依とし、ビール氏の英譯佛所行讚經(東洋聖典集第十九卷)を傍依として講說せしものなり。

第四章　佛陀傳の批評的研究、佛教之傳播及び其の現狀

前章に於ては毫も私見を挿まず、古傳の說くが儘に佛陀の傳說を叙述せしが、今本章に於ては先つ此が批評的研究を試みんとす。夫れ今やかゝる問題に向て科學的研究を施さざる可からざる所以は全く現思想界の大勢に基因す。若し百年前にありて斯問題を考究するとせんか毫も科學的研究の必要を感せざりしならん。されど今日の學者にして若全く斯研究を顧みず、直ちに宗義歷史等に論及せんか、其所說如何に巧妙ならんも到底學者間の信認を得る能はざる可し。余は今斯研究の必要は現思想界の大勢に基因すと云へり。聊々之を論せしめよ。夫れ余の見る所にして誤りなくば、現代思想界の一大特質とも稱す可きものは超自然的勢力に於ける信仰の缺乏是れなり。吾人の祖先は嘗に宇宙を創造し指導する最勝無上力の存在を信仰せしのみならず、更に鬼神、幽靈及び其の他妄想の創する種々なる物の存在をも信じて疑はざりしなり。故に余輩の眼には如何に誕漫不經に視もる物も彼等が强大なる信仰力にありては之を咀嚼するに於て敢て困難を感せざりしなり。故に佛陀の品性勢能に關する奇話怪譚も毫も其の宗教の傳播を障害せざりしなり。否な之によりて信徒は愈々畏敬信仰の念を强固にし、又末信徒は之れによりて漸次尊崇の念を起せしなり。今や前章に叙せしが如き物語は到底余輩の腦髓に入る能はずと雖も祖先等の信仰力は之を受容して尙は餘綽ありしなり。然るに第十九世紀に至て未曾有の進步に到達せるも のは、總て自然の運行上超自然力の關涉の之れに加はることあるやを疑訝するに至れり。否な之

を否定するに至れり。宇宙間の新羅萬象一として恒定不變の天則に支配されざるはなく、又毫も他の勢力の關渉を受くることなしとは科學者の常に揚言する所なり。アーガイル侯の「法則の統御」を一讀する人は如何に此思想の深く又汎く現思想に流通するやを覺らん氏は實に熱心なる基督教信者にして、又第一流の科學者なり。而も現科學的論理の潮流に捲席せられてスペンサー、ハックスレー、ヘッケル等の過激なる科學者か、依て以て超自然的勢力の存在を否定排斥するの利器精兵となせる理說を採容するに至れり。然り而して今此理說を以て眞實無繆のものとなさんか、佛陀神通力を現はして火風を使役せりとか、一瞥以て暴風雨を鎭壓せりとか云ふが如き奇譚の運命は如何になる可きか。自然力の上に更に或る勢力の加はることなくしては此等の事件の行はるゝ可き理なきなり。

故に今や古代の遺書、殊に幾千年の昔世人が毫も疑訝の念を挿まずして總て祖師等の宣說する所は其儘に信受せし時代の遺書に向ては、其の所載の事柄の眞實を疑訝し毫も周到精細なる搜檢を施さずして直ちに之を否定排斥するに至れる學者は其數決して尠少ならざるなり。されど是れ過激なると共に又論理に適合せざる所爲なり。余輩は之に贊同する能はざるなり。かゝる事柄の眞僞を判斷するにはよろしく其の時代の人心人情を心頭に置かざる可からざるなり。決して之を輕々に看過す可からず。一見有り難く見もればとて直ちに之を排斥せば第十九世紀を除くの外人類過去の歷史は盡く抹殺せざる可からず。余輩はかゝる所爲に向て毫も同情を表する能はざるなり。余輩は確信す。今日傳存する古代の記錄中には、實に荒唐無稽にして進步せる人智の決して觀容する能はざる事柄を含有すること多しと雖ども、又確實にして信據す可く決して疑ふ可からざる事柄をも包藏すること多し。故に今歷史と小說、事實と想像を精細に鑑識分別するは眞正なる批評家の一大任務なり。余は今斯精神を藏し、斯觀解をもつて、之より本章第一部に於て佛陀傳を搜檢し、聊々怪譚妄說の堆積中に潛伏する事實を辨識せんと欲するなり。

又本章第二部に於ては佛教の傳播及び其の國民上に及ぼせる影響を概敍し、第三部即ち最終部に至ては斯教將來の命運に就て一言す可し。今特に本章の一部をさきて第三の問題、即斯教將來の命運に付て余輩の思辨を煩はさざる可からざる所以も亦現代の大勢に基因するなり。夫れいまや地與上基布羅列する諸人種諸國民は愈々相接觸し來れり而して此の景勢中一の悲しむ可き現象と又た祝賀す可き現象は顯出せり。之を論ずるは本題外の事なりと雖ども、余は少しく之に付て辨說するなくして進行する能はず。諸君しばらく余を許して之を辨說せしめよ。さて何をか悲しむ可き現象と云ふ。小人種の衰滅即ち是れなり。されど此れ自然の法則によりて然るものにしてよし之を悲しむとも、別に人爲的方法によりていかんともする能はざるものには非ざるか。見よ、進取的アルヤン人種と接觸せる北米印度人は善良なる基督教徒の百方策を講して其生存を維持せしめんとするにも拘はらず、日に月に漸々減少しつゝあるなり。而して此は啻に北米に限らざるなり。世界至る所强盛なる新人種と接觸せる小人種間に行はれつゝある一般の現象なり。(勿論其等の小人種が全く絕滅に歸するは尙ほ長年月の後なる可きは云ふまでもなし)。今世界の地圖を開きて一見せば、即ち便ち余の上述せし事實を認識するを得ん。然り而して其等の退步的小人種が全く掃去されて、其地を進步的大人種に奪はるゝ日に至らは其の結果は如何ならんか。夫れ一切の弱小人種がよし全滅に歸せざるも、全く勢力なきものとなり、世は擧けて强大人種のものと

なるに至らば、惟ふに彼等は或方法を設けて攻刼爭鬪、侵略呑噬をやめ、互相の利益の爲め平安を保持せんことを勤むるならん。否な既に此傾向は顯然たるなり。之れ余の祝賀す可き傾向と稱するものなり。かゝるうるはしき、幸ひなる時代の來らん時には、一切諸國民はいよ〳〵親密に交接し、今や日々文明諸國民の間に行はれつゝある觀念の交通は愈々頻繁となり、遂には人種血統の異を問はず、一切諸國民は皆な悉く同一の靈法によりて支配さるゝ一團体をなすに至らん。もつとも其時代の來るは尙ほ長年月の後ならんも、今や吾人は實に此の高大なる理想を目的とし、之に向て進趣しつゝあるなり。されば今人種國民を分離する心靈的宗敎的諸勢力に就ては十分精細なる檢討を施し、其一致契同する諸點を發見せんことを勉むるは當然にして又至要の業なり。夫れ宗敎なるものは如何に蠢愚蒙昧なる蠻民の信奉する所のものと雖ども、其內には又善良優勝なる或る物を含有すること疑ふ可からず。然り而して未來の人類が渾然融合して以て彼等が日常の行爲を制裁する新信條を組織せんとするは、即ち此等の善良優勝なる諸元素なり。此の調和的計畫は嘗て實際に試みられたることありき。其は二百年以前の事なりき。之を爲たるは波斯の詭辨派なりき。彼等は實に斯般の研究と開祖と云て可なり。彼等は謂へらく、一切諸宗は皆な悉く同一の目的を有す、即ち人類の心性を改善し、神に至るの道を備へしめんとするなり。然らば彼等は敢て相爭ふの理なきなり。惟ふに彼等の間に衝突爭鬪の絕へざるは、一に互に他の言語思想を解せざるによるならんと。而して左の例を以て之を解示せり。曰く嘗て或る國にて四人の旅行者偶然途上に遭會したりしが同時に路傍に一金貨の遺てるを見たり。彼等は各々思へる樣、此の金貨を拾て葡萄を購ひ互に之を分配せんと。されど互に他の言語を解せざりしを以て其の希望を通ずる能はず、遂に喧嘩爭鬪を始めぬ。時に其傍を過くる一哲人あり、彼等の爭鬪するを見て之を止め其の理由を問へり。彼は總て彼等の國語に通達せる人なりしかば、即ち彼等の希望を領解し、彼等に向て云ひけるは此の爭論は余に一任せよ。余は宜しきに處せんと。即ち其の金を以て葡萄を購ひ來り、彼等に分配して、さて威儀を正し、儼然として曰ふやう、余は諸氏の爭論の何の爲めなるやを解する能はず。諸氏の欲する所は皆な同一なるなり。只各々他の言語を解せざるより、其の希望を互に通ずる能はざるを以て、かゝる爭論を惹起せしものなり。諸氏若し能く互に他の言語に通じたらんには、毫も爭ふ可き理由なきを知る可しと。更に語をついで曰く、總て宗敎上の爭論も亦皆な之に類す。諸宗敎徒の相爭ふは實に互に他を知らざるに基づく、若し相互に其思想を解したらんには決して爭論を惹起せざる可しと。夫れ總て國民の精神的特質は宛も其の言語の相異なるが如く、互に異なれるものなり。故に正しく他を解せんには吾人は十分勤勉して之を學ばざる可からず。然るに百般の研究中宗敎の研究ほど容忍寬待の精神を欠乏せるものはあらざる可し。世人は諸般の事柄に於て此の精神を保持するを得るなり。然るに獨り宗敎的觀念の比較に於てのみ、殊更に汎き同情と深き同胞的親愛を要する宗敎上に於てのみ、格別に此精神を欠乏するは何故なるか。此問題に答へんは容易の業にあらず。此は甚だ複雜にして多岐に亘れる問題なり。されど余は之れに答へて「然り、總て宗敎上の問題は多少吾人未來の運命及び創造者に對する吾人の義務と連結すればなり」と云はゞ、あまり眞實をはなれたる言にあらざる可し。故に人類は己れ天啓に出づると信仰せる敎義を、他に攻擊せられ又は普通の理由を以て解し去らるゝときは心中安然たるを得ず隨て其の人及び其人の觀解に對して嫌惡の念を發するものなり。而して余の知る所に

ては從來嘗て諸宗教徒一堂に相集りて、互に其の崇奉する所の信仰を他の前に開陳し、又他と比較して以て、互に他の眞性實相の眞實領解を企圖せしことなきが如し。ヤ、此企圖に近づけるものは、先年米國シガコ府に於て開設されたる萬國宗教大會なり。されど自から其講演を耳にし、又其の講演集を閲讀せし人々は其の所説のあまりに論辯的にして預望に反することの甚しきを見て大に失望の念を起せるならん。各講演者は己れ奉信の宗教の美を發揚せんとて總て他の宗教の弊習、(單に自から想像せしものをも之に加へ)を列舉して一も餘さゞらんことを之れ勉めしが如し。或る宗教の講演者の一人の如きは眞に己の論評しつゝある他宗教の性質如何は毫も知らずして、而も口をきはめて之を攻擊非難せり。若し基督教徒に一人の惡漢あらんか、これを以ての故に基督教は善良なる宗教に非らずと論斷するは爾時の或る佛教家の論法なりしが如し。又基督教徒の方にありても、眞に佛教又は婆羅門教の根本的教義の如何を知らずして、叨りに之を攻擊せしものもありたりき。余はかゝる人々に向ては只云はん。今や印度は其の獨立を失ひ、他の拘束を蒙れる亡國なり。毫も進動の元氣を發揚することなく、いよ〳〵怠眠に沈みつゝあるなり。されば其の道德風俗の如きは大に腐敗を極めおること言を俟たず。是れ實に勢の然らしむる所なり。然るに今此等の弊害を擧けて悉く婆羅門教に歸するは、實に苛刻に非ずや。否な不正に非ずや。余輩は先づ婆羅門教を採て精究に附し、其等の弊害の幾分は彼に基因せるや、又彼は之を矯正改善するの性能を有せざるやを穿鑿したる後、彼れが價値を判斷するも敢て後からざるなり。否な此くなしてこそ、始めて公平正當を得るものなれ。其の形而上的性質をも、實際的感化力をも、又其の歴史的發達をも研究せずして直ちに其の價値に向て苛刻なる判斷を下すは實に無法なりと云はざる可からず。

さて余は本卷に於ての如く、基督教を採て、他の諸宗教と同列に排し又之を取扱ふこと毫も他と異なることなきを見て、神學生諸君は或は之れ甚だ不敬なりと感せられんもはかられずされど余はかく感せざるなり。余は確信す。基督教の美は之を他の諸宗教と比較對照するときに愈々明かに表はると。黄金は之を他の諸金屬と對比するに於て其の光彩いよ〳〵燦然たるに非らずや。余は又確信す。他の諸宗教を研究すること愈々多ければ、隨て新しき觀念を得ること愈々多しと。而して基督教は總て此等の新しき觀念を吸收同化し得るものなり。夫れ基督教は佛教よりも回々教よりも其他如何なる宗教よりも新しき觀念を吸收同化するを恐るゝの理由毫も之れあるなし。其の初代に於ては希臘及び羅馬の思想を吸收同化するに因て自から大に利益する處あらざりしが。希臘の哲學及び言語は其の普遍的教義の組織的發達を助くること實に大ならざりしが。羅馬政府の組織は彼が教會の組織に向て好模範たらざりしが。若し夫れ其幼稚の時代、少しにて他より假借し、又他に模擬するときは大に其斬新性を毀損する時代に於てすら、尚ほ俗界の智識を吸收同化するに因て自から大に利益せしものとせば、今日多くの新しき又勝れたる宗教と相接觸する時代に當りて、彼等の惡醜を排斥し、善美を吸收同化するも何の不可あらんや。若し夫れ基督教にして佛教中より或る善良なる元素(教理上に於ても又は教會の組織上に於ても)を吸收同化するとせんか、佛教は元來アルヤン的凡神教的なるを以ての故に基督教は其の至要の特質を失ふに至らんか。謹嚴なる思想家は決して然か思惟せざる可し。實に基督教は二千年程の長年月を通過して進歩し來れる間、嘗て自我の一致を失したることあらざりしなり。否な愈々之を强固にし、

其特質は愈々顯然たるに至れるなり。されば以後益々進んで種々の人種國民を感化し行く内には其外相は決して一定不變ならざる可きも、又其の根本の自我、根本の教義は永却不變、恒久一定決して變ずることなかる可きは敢て余の論ずるを要せず。

上來説述する所、聊かかの進歩的三宗教を研究するに當て之に對する余が精神及び之を取扱ふ余が方法の大概を告白したり。されば之より其の孰れの宗教たるを問はず。其の善美は之を賞揚し、惡醜は之を貶斥するに於て毫も忌憚する所なく、毫も斟酌する所なきを見るも、諸君は爲めに一驚を喫せらるゝことなかる可しと信ず。余は本講の初めより只眞理を闡明發揚するを以て最大の目的とし、毫も他に望む所なきを揚言し又此精神を實際に表彰せんことを勤めたりしが、殊にこの三大宗教を講究するに當ては、一層注意を深くして、常に此精神を保持し、決して之を失はず、聊々眞理熱求者たるものの一分を盡さんと欲するなり。

第一　佛陀とは何人ぞや。如何なる時代、如何なる國土に出興せしや。

此の二問題は最とも必要なり。余は之より聊々之れが答解を試みんと欲す。既に上文に述べし如く、現代の思想界を貫通する深刻なる懷疑は吾人をして佛陀の現はしたりてふ神通力、行ひたりてふ神變不可思議の事柄を認容すること能はざらしむるなり。余は既に云へり、該般の懷疑は現代思想界の特色なりと。蓋し佛教興りてより今日に至るまで二千五百有餘年を經過すると雖ども其間世人は嘗てかゝる問題に思ひ及ばざりしなり彼等が主要なる動力は信仰なりしなり。彼等は偏に信仰によりて動き信仰によりて靜まりしなり、彼が心中にありては如何なる力も此の力を壓する能はざりしなり。されど漸々信仰は懷疑に其の地歩を讓り、而して懷疑は又探究を惹起せり。

今や佛陀とは何人ぞや、彼果して口傳の傳ふるが如き事を行ひしか、又口傳の傳ふるが如き人物なりしか、等の問題は吾人の念頭に浮び來れり。而して此等は決して輕々に觀過す可からざる問題なり。

さて佛陀又は釋迦てふ名の始めて汎く歐洲に知らるゝに至りしは現世紀の初代なり。之れ印度人と歐洲人の間に同族的類縁の儼存することの發見されし後、又印度文學の研究に向て新らしき精神の注入されし時代なり。夫より以前にありては佛教と婆羅門教の差別に付てすら、世人（歐洲人）は只漠然たる智識を有せしのみ。蓋し此等の早代にありては該二大宗教に關する世人（歐洲人）の智識は甚だ不完全なりしなり。彼等は通例二千百餘年の昔歴山大王の遠征に隨從せし人々の書き遺せし記録によりて之を學びしなり。かくて其の知識の不完全なるからに、種々なる架空の想像を廻らして、以て佛陀を解せんとせり或る者は云ふ釋迦とは舊約書に見もる埃及の王シェシュクの事なりと又或るものは云ふ之れ猶太の僞預言者の一人なりと。其他斯種の解説は續々頻出せり。案ずるに其原因は左の二事にあるが如し。（一）は無智なり。夫れ無智は經想の母なり。人性は可成的（ナルベク）無智の告白を避けんとする樣組織されたるものなり。到底吾人の領解し得可からざる事柄に於てすら、尚は吾人の不能を告白するを心宜しとせざるなり。吾人は單に是等の事柄に就てすら無智不能ならざることを示さんが爲めに或る事を云はんと試むるなり。然り而して心意組織の此狀態は屢々吾人を導きて、經想、否な笑ふ可き見解にすら至らしむるなり。釋迦に於てセミチック的始源を發見せんと試みし人々は此の一例なる可し。

（二）は彼等が宗教的僻見に因由す。彼等は自己の宗教の外に人類の三分一以上の上にさる强大な

る勢力を有する他の宗教あるを聞くを心よく感せざりしなり。否な之を聞くに堪へざりしなり。故に彼等は佛教の始祖の名と人となりの内に異教徒の僞預言者を看出し、又其の教義の内に其の僞預言者の異端邪說を發見せんとせしなり。

余は上文に此等の諸見解を擧げしは、之れに向て嚴正なる攻擊を加へん爲めには非らず。之れ別段取擊を要する底のものにも非ざればなり。然るに之を列擧せし所以は只佛教の名が始めて歐洲に入りし時に當て、人々は之に對して如何なる感情を惹起せしかを示さんが爲めなり。

されど輓近悉達多なる歷史的人名の實体の存在如何に就て起れる異論は、其の性質大に前者と異なれり。此等の異論は深大なる思想家勤勉なる研究者が其本原に遡りて施したる勤勉なる探究の結果なり。故に余輩の之を檢査批判することも亦極めて謹嚴ならざる可からず。

今先づ斯派の論評家の所見の一班を示すは甚だ緊要なりと思惟す其の主要なる諸點は左の如し。

總て波斯教の如き猶太教の如き、又婆羅門教の如き宗教にありては吾人は思想の永き鏈を見、又此鏈が嘗て或る國民的覺醒によりて破斷されたるを見る。而して此等の普遍的覺醒に於ては、或る一箇人先づ之を創起したる上、其の全運動を指導せしものに非らず。其の性質に於ては該種の運動は全く國民的のものなりき。されど此等の運動既に過古の一事實となり、後世の歷史家之を記錄せんとするに當ては、彼等は其の全運動の中心を定め、之を一箇人に歸して敘述せんが爲め、モーゼとか、イエスとか又はブタとかゾロースターとか云へるが如き人物を假作せざるを得ざりしなり。之れ大に小說家の描寫法に類似す。今一の小說家ありて或る國民の風俗習慣を描寫せんとすと假定せよ。彼は如何にして之をなすならんか。彼は必ず先つ僅少の人名を撰擇し、而して其を中心として該國民全体の思想行爲を反照せしむるならん。過古の宗教的運動の敘述に用ひらるゝ方法亦之に異ならざるなり。歷史家なるものが幾千年前の出來事を描寫せんとするや、其方法小說家の描寫法と異ならざるなり。先づ僅少の人名を撰擇し、而して其等の人名を通じて當代の狀態運動を顯彰するなり。夫れ宗教なるものは決して一箇人の力によりて發明又は製作さるゝものに非らず。勿論一箇人の行働は大に宗教の盛衰に關係するものなり。されど彼は決して之を創設し得るものに非らず。宗教は一日一人の事業に非らず。一の宗教を創起し、又之を發達せしめて、遂に佛教或は基督教の如きものとならしめんには國民全体の協働的良心と、タトヒ幾千年間ならずとも少くも幾百年間の歲月とを要するものなり。」

右敘述せる所によりて以て聽講者諸君は、釋迦に對する該派の批評家の位地を推知せらるゝを得可しと信ず。更に其中の一人の言を錄して以て、余の說きし所を確めんに、故クエチン博士はヒッペルト講義中佛教論の部に於て左の言を吐けり。曰く

吾人は、突然眞理の域に進達するものに非らず、只誤謬の境を經て始めて之に近接するものなり。故に今前代流行の見解の正しからざるを覺識することによりて以て吾人の前に登立する眞實の問題、即ち如何にして佛教は婆羅門教より發達せしか、如何にして普及教は國民教より發達せしかゝる眞實の問題の答解に達せんことを望むは、決して無理の事に非らざるなり。然り而して今余の見る所にして誤なくんば、余輩は少くも其の求む可き方向を發見したるなり。即ち佛教が其の直接の前項を看出したるは流俗の信仰に於てあらざれば更に何たる社會的必要又は社會的熱望に於てもあらず、實に哲學的思辨と制慾主義とに於てあることを

發見したるなり。

右に引用せる言によりて以て、クエチン博士の所見は、佛教は他の二宗教の如く一箇人の創説したるものに非らず、其の哲學的思辨と制慾主義との二方面に於て婆羅門教の一段進歩發達したるものに過ぎずと云ふにあることを知らるゝなり。約言せは佛教は普及的に變化したる婆羅門教に外ならずと云ふにあるなり。

若し夫れ佛教に對してかゝる見解をとらんか、左の二觀念の之に伴ひ起るは自然の理なり。(一)此發達は僅少の年月間に又一箇人の考案によりて成滿すること能はざる可し。國民全体の意識をして國民的より普及的に發達せしめんには勿論幾世紀間の年月及び多數の人々の同心協力を要するならん。而して其等多數の人々の中にて或る人々の殊に目立ちて見もるは、宛も現在の風俗習慣を破壞し、全然社會の組織を變更せんとする社會的革命に於て、或る人々の殊に他の人々よりも目立ちて見もるが如しされど其等の事業の性質は共に箇人的なるよりも寧ろ國民的なり。(二)上來論ずる所にして誤謬なくんば、佛教の婆羅門より發達せしが如き變化にありては之にたづさはれる人々は、其の何人たるを問はず總て口碑中に傳はれる釋迦の如き位地を占むると云ふ譯に至らざること明らかなり。

さて今日にありては吾人は佛教全体の組織を以て悉達多と稱する一箇人の生産物なりと感ず。而して此の悉達多なるものは一切人間中最とも温厚なる、最とも景慕す可き人物として、吾人の心眼に髣髴たるなり。傳説が彼に歸する奇跡の大多數を除去し、又彼が人格の周圍に堆積せる超人間的光榮を悉く洗滌するも、尚は彼は人間理想の臻達し得る限りよりも更に高尚なる品性を總具して吾人の前に髣髴たるなり。されど上述の批評家はかく完全偉大なる理想に臻達せる人物のあり得可きことを認許せざるなり。同書中クエチン博士は又左の言を吐けり曰く。

佛陀の傳記は、其の吾人に傳はれる何れの体裁にありても、純然たる歴史に非らざるなり。されど其等の傳説よりして一の歴史を作らんとするは今日の佛教學者の可成に一致する所なり。而して此は、簡明に余の消去法 Reducing process と稱し得る所の方法に因て行はるゝならん。曰く天賦の英才と皇族の特權を有する太子の尊身にして、人生衆苦惱の觀に感激し、父王の金殿玉樓をすて、可憐の愛妻の腕を離れ、閑寂幽靜に退きて生死解脱の正道を默想し、妖治の巧誘と畏赫の逼試を恐びて後、菩提樹下朝光煥發するの際廓然無上正覺を證得し、夫より諸邦に遊歴説法して有縁の衆生を教化し終に人壽の極に達して誠實なる弟子衆に周繞せられ、最愛なる弟子の腕に擁せられて寂然入滅せる人。是れ諸人の熟知せらるゝ佛陀なり。今余輩をして通例なされしよりも更に謹嚴に充分に、此の偉大なる品性を具して而も吾人と同じ情慾動機を有する人なる佛陀は歐洲の學者の創造物なりてふ事實の上に考一考せしめよ。

右の言を見て、余輩は茲に敢て無禮を顧みず。クエチン博士は佛教歴史の本源に遡りて、之を愼嚴に研究したる人に有らざる可しと云はざるを得ざるなり。傳記又は傳説の佛陀は歐洲の學者の創造物なりてふが如き言をなす人、かゝる人は眞に宗教歴史の批評家として其地位を保つ能はざる可し。余は實に博士の博學に感し、又其批評の鋭利なるに服する所多し。されど其の佛教歴史の批評に至ては、余は博士は其の本源の材料に遡りて之を撿究せざりしならん、故に所説偏僻極

れりと云ふを憚らざるなり。

次に又佛陀の實在を否定する有名なる批評學者あり。佛國のセナー氏是れなり。氏は深く本原の材料を搜檢し、精細なる研窮を施したる人なり。而して大陽神話を以て佛陀の傳記を說明せんとして一奇軸を出せり。其の所說の要は左の如し。曰はく佛陀は眞實實在の人物に非らず。其の傳記は天空の諸天体に對する太陽の地位及び關係よりして說明するを得可し。數例を擧ぐれば、佛陀魔軍と爭鬪しきてふ話は黑雨欝勃として起り、日光を陰蔽せる時の狀態によりて說明するを得可し。佛陀幾萬の弟子衆を有しきてふ話は大陽の光明を反照する無數の星辰ある事實によりて說明するを得可し。佛陀の眼光は無邊の宇內を遍照すとは無論日光の至らぬくまなく天地を普照するを意味するなりと。是れセナー氏が佛陀傳を說明する一班なり。

諸君は本講第一卷に於て韋陀のアルヤン人を研究せられしとき、彼等は其の想像の富膽と言語の壯麗を以て、天空地の三界殊に天空二界の現象を宇宙の一大活劇として觀想し、又之を描出躍如たらしめしことを知られしならん。今セナー氏は、悉達多の傳記は同一の自然的活劇の更に數層箇化 Individualized 擬人 Personified されしものに外ならずとなすなり。韋陀アルヤン人の活劇に於ては太陽は其の中心たり、故に佛陀の傳記に於ては悉達多てふ一人物其の中心となりて太陽を代表し、其の幾萬の弟子衆及び反抗者は他の諸元素を代表せるものとなすなり。

以上略說せしが如き種類の解釋には、一見上吾人をして大に感服せしむるに足るものありて存するなり。今日の如き時代にありては殊に然り。夫れ吾人の時代は超自然的なるものは一切排斥して餘す所なからしめんとするなり。故に超自然的なる超人間的なる事柄を含める記錄は一切之を

信認せず。單に古代の仙話怪譚として打ち捨ておくか、若し然らずは或る方法を設けて之を通識的に解說し去らんとするなり。現代思想界の大勢は實に斯の如し。さればセナー氏の所說の好評を得たるは敢て怪むに足らず。實に能く時好に投じたるものと云ふ可し。されど余輩竊かに之を案するに、一の歷史的事件が或る自然的現象に類似すればとて、直ちに前者を以て眞實生起せしものに非らずとなし、單に後者の一說明として之を考究せざる可からざる理由あるや。余輩若し此方法を以て古代歷史中の事柄を解說し去らんか、人類は遂に其の歷史の大半を失ふに至らん。今歷山大王の東洋遠征を以て一の大陽神話又は大陰神話として解說する能はざるか。若し彼が遠征を敍して、一小半島國の一若將が僅少なる軍勢を率いて廣大なる西亞諸王國を蹂躙し、而も其の事業の未だ一も成功せざるに、忽然世を去りたりと云はゞ、之れ恰好の一仙譚に非すや。余輩は又セナー氏の方法に倣ひて之を左の如くに解說し得るなり。一若將歷山王が西亞遠征に出立せしてふは元氣活々たる朝陽東天に登りそめたるに比し、廣大なる西亞諸國を壓倒せりてふは大陽中天に達して光輝燦爛十方を照破するの意を寓し、彼が死樣の漠然として明かに知られずてふは太陽高山の頂に隱れて如何にして西天に沒するか明らかならざるに擬せりと。余輩は右の如くに解說することを得ざるか。玆に吾人は一の著しき類似を有するなり。實に恰好なる類似を有するなり。されど余輩は右の如き解說を以て眞實なりと主唱し、歷山大王の實在を否定せば如何。若し然かせば世の識者中余の愚を笑はざるもの幾人かある。然り而して今セナー氏か佛陀の傳記を解說するの方法或は之に類似するかきか。

今余輩をして本題に入り、先づ歷史的人物としての、佛陀の在世に就ては余輩は何を知り居るか

を撿せしめよ。

前章に於て余は佛陀、即ち今一般に佛教なる名によりて知らるゝ宗教の開祖、の在世は基督前五百年、即ち今日より算ふれば二千四百年以前より後かる能はずと云へり。故に此問題に向ては余輩はあまり記錄上の典據、殊に佛陀と同代の記錄を求むる能はざること明らかなり。蓋し古代の埃及、アッシリア、バビロニア等の諸國にありては三千年前の記錄、殊に貨幣又は碑板上に殘れる記錄を有すと雖も、印度にありては書法はかゝる早代に於て、發明されざりしが如し。又印度は甚古の寫本を有せず。實に梵文寫本の最とも古きものは日本に於て發見されたるものなるが如し。而して此等の寫本と云ふも千二百年よりは以前のものに非ざるなり。マクス、ミュラー氏は云へり。

印度にありては基督降生前第三世紀の中頃より以前の碑文は毫も存在せず。現存する最古のものは、阿輸伽王の治世中に建設されたる佛教徒の碑文なり。而して其の廣大なる領土の諸所に其等の碑を設立せし阿輸伽王なるものは西紀前二百五十九年と同二百二十三年の間に王位にありしものなること毫も疑ひなし。

其等の碑文は二種の文字にて記さる。一は右より左に進む、其起源のアラメア文字にあること明らかなり。他は左より右に進む。本國語記錄の必要上セミナック文字を細工して用ひしものなること是亦明らかなり。(印度論二百二十五頁)

かくて佛陀の在世及び傳記に關する問題に於ては、吾人は其の上に光明を與ふる記錄を有せざるなり。故に歷史的に觀察せば佛陀の傳記は基督の傳記の如くに明亮ならずと云はざる可からず。

但し基督の實在に就ては彼が生時の敵又は友の手になりたる文書的證據の今日に傳存するもの少なからざるなり。

されど佛陀に就ても亦、よし彼が生時に記錄されたる證據なしと雖も、尙は印度最古の碑文は確かに彼が在世を證するなり。何をか印度最古の碑文と云ふ。上文に述べし阿輸伽王の碑文即ち是れなり。但し佛陀の實在に就ては、吾人は彼が生時に記錄されたる證據を有せずと雖ども其を以て直ちに彼は實在の人物に非らずと斷する能はず。上文にも述べし如く彼が生時にありては書法は未た發明されおらざりしなり。

さて阿輸伽王の建設せしてふ碑は、如何なるものなるか。此は印度の諸所に遺存する石柱にして、其の表面は四プラクリト語にて記載せる銘を以て充てり。而して其の記載の事柄は佛教の儀範、宗義、儀禮、戒言等に關するものなり。其の一には宗義に信服し、之を尊奉するが故に非らずして、只口に糊せんが爲めに黃衣を着する卑劣漢を譴責する句あり。

今此等の碑文によりて余輩は左の三事を明らめ得るなり。(一)阿輸伽王の時代即ち佛滅後二百五十年頃佛教は一の國教となりおりしこと。即ち婆羅門教を壓倒して其位地を奪ひおりしこと。(二)此等の石碑の散在せる區域によりて、當時佛教は印度全体に傳布しおりしを知らるゝこと。(三)印度に於て發見されたる最古の記錄、即ち佛滅後二百五十年頃に建設されたる記錄は總て一の實在的人物として佛陀の歷史的在世を明示し、又大陽神話の一勇士なるかの感を惹起する底のものを含有し居らざること。

次に佛陀實在の一證據とす可きは、彼に關する古傳の傳はれることなり。總じて古代の人物實在

の智識は古傳より來れり。大概は吾人之を信じて疑はざるなり。何ぞ獨り佛陀に關してのみ之を疑ふの理あらんや。

然り而して佛陀の實在を否定する人士は、右の證據に基づける余輩の信仰に對して、如何なる反證を擧げたるか。彼等は何か余輩の信仰を打破するに十分なる證據を擧げたるか。否々一もさる證據を擧げたることなし。既に一言せし如く後世の群書中に顯はるゝ佛陀の傳記は大に大陽神話に類似するは事實なり。されど夫よりして直ちに、佛陀の神仙性を主唱し得るか。夫れ宇宙の森羅萬象中、互に相類似するものは決して尠少ならざる可し。されど其一を實として、悉く他の存在を否定せば如何。吾人は果して如斯事をなし得るか。

今進んで、佛教の傳播及び其の感化を研究せんとするに先だち、更に考究せざる可からざる一問題あり。即ち佛教と婆羅門教との關係是れなり。是れ諸學者の區々其の所見を異にする問題なり。されど大別すれば左の二種の反對說に網羅せらる。第一種說に曰く、佛教は婆羅門教に反動して起れる一の新宗教なりと。第二種說に曰く、佛教は單に婆羅門教の一段進步發達せるものに過きずと、マクス、ミユラー氏は前說を主唱する人なり。曰はく、佛教は印度舊來の宗教即ち婆羅門教の衰微墮落の上に起れる一新宗教なりとされど佛學の一大家たるリス、ダヴイツト氏は之に反し、後說を唱道して曰く、佛陀は其生活上一の善良誠實なる婆羅門なり。彼は婆羅門教を破壞せんとせしものに非らず。否な之を改善し、之を發達せんと企圖せしものなりと。かゝる正反對說の間に立ちて此の問題を判定せんことは、余輩の甚だ難しとする所なり。徒に管見を提出せば却て眞理を害せん。されど左の管見、或は中庸を得たるやもはかられず。曰はく、佛陀は其の心情に於ては一の誠實なる婆羅門なりしと雖ども、其の宗教を宣說し、舊教を純化改善せんとするに於て彼は屢々婆羅門僧と論諍せざるを得ざりしならん。此くて彼等の反對者と思惟せらるゝに至りしならん。又彼は其の本願を成滿せんが爲めに、一の宗教的團体を組織せしが、歲月をふるに從ひ該團体は漸次舊教より分離し、遂には獨立なる一宗教となり、此くて此方(コナタ)よりも盛に反對するに至れるならんと。蓋し佛陀は舊教に對して大なる愛情を有し、又其の本願は教界の弊風陋習を洗滌せんとするに在りしこと疑ふ可からず。されど婆羅門僧は容易に其の衣食權威の富源たる傳來の制度を放棄して、青年教師の新說を恭順す可くもあらず。當代の狀態此の如くなりしより、佛陀は是非一新團体を組織せざるを得ざりしならん。而して該團体に對して婆羅門僧の好意を表せざりしことは、今日の狀況に推しても知らるゝなり。今や婆羅門教の腐敗を慨嘆し、其の內部より蹶起して、之れが改革を試むる志士は決して尠少ならざるなり。前卷に一言せしブラモ、サマジ教會即ち印度の有神教會の如きは其の一なり。されど彼等に對して最とも刻薄なる攻擊を加へ、最とも困難なる障害を與ふるものは、婆羅門教其物なり。但し之れ亦人性の一方面なれば如何んともす可からず。敢て婆羅門教のみにも限るまじ。又案するに、ブラモ、サマジ教會の事業にして、二千四百有餘年前に於ける佛教の如くに、成功せんか其本願の婆羅門教改良にあるにも拘らず、彼等より今一層烈しき反對を受けんこと、火を見るよりも明かなり。

此點に於ては、佛教と婆羅門教の關係と、基督教と猶太教の關係の間に大なる類似ありて存するなり。夫れ基督はいと謹嚴に猶太教の律法に恭順せしこと、疑の狹む可きなし。彼の來れるは、律法を破らんが爲めに非ずして、之を滿たさんが爲めなることと、彼自からの明言せる所なり。余

蓋は四福書に於て、明かに其の母國に對する基督の愛情を見るなり。其記する所によれば、彼は最終にエルサレムに至り、猶太國民の受く可き嚴罰と、國家の全破滅を預知せしときには涙涕滴々として下りしばしは立ちも得去らざりきと云ふ。而も彼は其の愛情と同情の爲めに、十字架上に斃れたりき。而して今も尙ほ基督教に對して最とも烈しく反對するは猶太教徒なるなり。實に猶太國民の存在の今日までも保存されしは、基督によるなり。猶太人の思想と生活が多くの國民間に流通するに至れるは基督教及び其教義によるなり。彼は羅馬の文明と希臘の哲學を統轄せり。彼は日耳曼及ブリテンの蠻民を教化し、而して今や又亞細亞亞弗利加の中に進入しつゝあるなり。而も今日の猶太人は基督教を以て最大仇敵なるかの如くに思惟し、機の乘ず可きあらば毫も斟酌するなく、直ちに攻擊を加ふるなり。

上來陳述せる所を見よ。該類似の甚大なること、實に驚く可きに非らずや。印度人の思想が始めて其の境域外に超出して、亞細亞國民中最とも進歩せるものを左右するに至りしは、實に佛教の力によるなり。鄔波尼娑土の凡神哲學が健全なる孔子の有神哲學を壓倒するに至りしは、實に佛教の力によるなり。而も佛教出現の初めより常に之を困め、迫害を加へしものは婆羅門教なり。彼等は佛教をして全く其母國に跡を絶たしむるまで迫害を止めざりしなり。

第二部、　佛教の傳播、

本章殘餘の部分に於ては、佛教の傳播及び其國民上に及ぼしし影響を概說し、又終りに該教將來の運命に就て一言せん。

前章に描寫せし佛陀の傳說によりて見れば、彼は既に其の生時中に於て殆んど印度全体を教化せしが如しと雖ども、其等の傳說のみによりて直ちに然か信ずること能はず。佛教の傳播に關する最古の信ず可き證據は本章第一部に於て述べし如く、西紀前二百五十年頃阿輸伽王によりて建設されし石碑なるなり。而して今其の石碑の散布する方處によりて判ずるに佛滅後二百五十年頃には佛教既に全印度に普及せしが如く、又其の碑文によりて考ふれば阿輸伽王は當時殆んど五印度全体を統轄せる大王にして、而して佛教は其の國教なりしが如し。

夫れ佛陀出世前後の宗教界を考ふるに婆羅門教は大に其の原始の清純を失ひ、僧侶の權力は最上の度に達し、四姓の區別は全く民心を壓縮せしに似たり。然り而して斯時斯國に現出して、佛教の如く初めより四姓の區別を認めず、自由と平等を以て人間一切の本具となせる宗教は、直ちに民心を得て汎く傳布するに至るは正さに然る可きなり。されば佛滅後二百五十年頃には既に一の國教となりて婆羅門教の位地を奪へるを見るも、敢て怪むに足らず。然るに茲に最とも奇怪に堪へざるは「かく深く民心に根抵せる佛教が、何故に忽然外國に放逐され、而して婆羅門教は再び振起して其地位を回復し、否な以前にまして堅固なる基礎を得獰然として一切他の諸勢力を排斥し、彼等をして毫も己れに近づけしめざるに至れるか」と云ふ問題なり。夫れ今や印度は英國政府の支配を受け、歐洲思想の茲に流入すること二百年餘なり。回々教も亦茲に傳教すること既に七百餘年、其間常に得意の利器、即ち兵力を弄して以て改宗者を獲んことを勤め、而して多數の信徒を獲たり。而も二者孰れも、婆羅教の上には强大なる刺激を與へ永續す可き印象を刻すること能はざるなり。又佛教は只僅少の山國と錫倫島に於て其跡を殘せるのみにして、印度全体の上より云はゝ殆んど彼なきが如し。惟ふに彼は再び阿輸伽時代の盛大を見る能はざる可

し。

さて佛教の印度國外に放逐されし時代は正確に推知し難し。されど其全く消失せし時代を基督降生後五百年頃におくは、あまり大なる誤謬にあらざる可し。今此問題の材料としては、只支那僧の旅行記の外、一も徵す可き文書なし。案ずるに婆羅門教の再び勢力を回復して佛教を壓倒するに至りし原因は、佛教も追々時代を經過するに隨ひ、原始の純潔を失ひて腐敗し墮落せしによならん。又後章に至らば詳說する如く、現代佛教家の誇稱する佛教の哲學なるものは、もと婆羅門教より抄偷せしものにて、佛陀の創唱にあらず。されば後世の佛教家が全く其の眞正なる心靈的傳道と宗教的性質をすて、偏に形而上的思辨に沈溺するに於ては、漸次民心を失ふに至るは正さに然る可きなり、敢て怪むに足らず。其の競爭の宗教的範圍内にある上は佛教は決して婆羅門教に一歩も讓らざりしと雖ども一轉して哲學的戰場に入るに於ては一度壓倒されし宗教、即ち婆羅門教が再び叩首蹶起して、其の主權を回復するに至りしは、實に彼等の性質の自ずから然らしむる所なり。哲學的方面に於ては佛教は其信徒の滿足をかふに十分なる物を有せざりしなり。若し單に哲學上より觀察せば、佛陀の寺院的宗教は布羅那斯や鄔波尼娑土の如き、深玄幽微なる哲學書に比して何物を有せしぞ。余輩は確信するなり。佛教若し其原始の純潔を保持し、人心本具の宗教的熱望を滿足せしむるを以て其の本願とする一宗教として繼續したらんには、其成功惟ふに今有るよりも數層廣大なりしならんと。されど其の特色をすてゝ、正しく婆羅門教に屬する因果の理法、靈魂の轉生、涅槃の樂果等の如き哲學的問題の論辯に移るに至て遂に其勢力を失ひ、其天職を盡くす能はざるに至りしものならん。されば現今の佛教家は茲に大に顧みる所ありて、若し佛教を以ていよ〳〵進歩的なる宗教となし、いよ〳〵進歩的時代の要求に適應するものとなさんとせば、斷然其の永く自から好んで受けし哲學の拘束羈絆を脱せざる可からず。

さて之より印度國外佛教傳通の次第を考究せんに、其の始めて北は中央亞細亞の諸國、南は錫倫島に傳播せしは阿輸伽王の時代なりしが如し。但し北方諸國にありては、或は阿輸伽王前既に傳播しおりしやもはかられざれど、今日は之を確知する能はず。其の現今最とも多教の信徒を有する支那に傳道せしは西紀前二百年頃なる可し。されど歴史上明らかに記する所にては、王家の尊信を受け、上流社會の間に進入せしは西紀後第一世紀の初代なり。而して一の國教の如くなりしは第四世紀頃なり。

同三百七十年頃支那より朝鮮に傳はり、又同五百五十年に朝鮮より日本に傳はれりと云ふ。今や此の傳說は一般に信受せらるゝに似たれども、疑はしき點なきにあらず。惟ふに日本の佛教は西紀後第七世紀の終り頃、支那より直接に傳はりしものならん。

又今や印度に於ける佛教の本城たる錫倫島は、甚だ往古の時代に直接に印度より受けたるものゝ如し。古傳によれば佛陀自から該島に遊歴して、諸民を教化せりと云ふ。又中央亞細亞諸國及び西藏に於ける佛教傳通の時代は甚だ古し。

現佛教徒の正數に就ては諸說紛々たり。而して其の最とも小數を主唱する人々と雖とも、二億以上ありと云ふ。其の最とも多數を主張する人々に至ては、實に五億以上を舉ぐるなり。されば其の差三億以上の大數なり。以て二者共に信據するに足らざること明らかなり。

左にダヴィド氏の佛教書中より現佛教徒の統計表を轉載せん。此統計表ももとより其の儘には、

信受し難しと雖とも、之によりて以て現佛教徒分布の大概を窺ふに足らん。

國名	信徒數
南方佛教徒	
錫倫	一五二、〇〇〇〇
英領、緬甸	二四四、八〇〇〇
緬甸	三〇〇、〇〇〇〇
暹羅	一〇〇〇、〇〇〇〇
安南	一二〇〇、〇〇〇〇
小計	約二九〇〇、〇〇〇〇
北方佛教徒	
英領魯領	五〇、〇〇〇〇
流球	六〇、〇〇〇〇
朝鮮	一〇〇、〇〇〇〇
ブータン、シクヒム	八〇〇、〇〇〇〇
加濕彌留	一〇〇、〇〇〇〇
西藏	一二〇、〇〇〇〇
蒙古	六〇〇、〇〇〇〇
滿州	二〇〇、〇〇〇〇
日本	三〇〇、〇〇〇〇
泥波留	三三〇〇、〇〇〇〇
支那本部	五〇、〇〇〇〇
	四、一五〇〇、〇〇〇〇
小計	約四、七〇八五、〇〇〇〇

右ダヴィド氏の統計表中、余輩は一事の驚く可きものあるを見る。即ち現今世界の二大佛教國と也稱す可きは、支那及び日本の二大帝國なること是れなり。但し支那佛教徒の統計表中には或る誤謬の攙入しおることと明かなり。第一には、支那の人口は未だ正確に知られざるなり。余輩は常に、支那は人類の三分一以上を有すと聞くと雖ども、されど此言は未だ他の文明諸國に於ての如く、科學的研究によりて證明されざるなり。惟ふに其の人口三億以上はあらざる可し。第二には、總て佛教國と稱せらるゝ國民の全体をとつて佛教信徒中に編入するは、此の種の統計家の常なり。例へは支那は一の佛教國と稱せらるる。故に彼等は其の人民全体をとつて、佛教信徒として計算するなり。されど此種の計算には、誤謬多し。殊に支那の如き其上流社會は常に嫌惡と輕蔑を以て佛教に對し、且つ謹厳に孔子の遺教を崇奉する國民にありては其誤謬のいよ〳〵多かる可きは自然の理なり。

されどタトヒ右の表中より若干數を除去するも、尚は佛教は、基督教を除きては、現在の宗教中最とも多數の信徒を有する一大宗教なり。然り然らば佛教のかく驚嘆す可き勳功を奏せし原因は何なるか。何故に孔教又は婆羅門教は佛陀の宗教の如く、傳播弘布せざりしか。之れ他の宗教中には之れなくして、佛教には本具的なる或物あるによること疑ひなし。故に次下の諸章に於ては聊々、佛教の根本的教義、及び他宗教の欠乏する所にして獨り佛教の包有する所の、人心人情の

奥底に直接する眞理の一班を闡明せん。

第三部　佛教が其の奉信の國民上に及ぼしし影響及び其の將來の運命。

今や余輩は本章最終の問題、即ち佛教が其の奉信の國民上に及ぼしし影響、及び其の將來の運命に關する問題に到達せり。

さて既に佛教の感化を蒙れる諸國民を撿して以て彼が影響を討究するには先つ其内の一國民をとり其の未だ該教の影響を蒙らざりし以前の歴史を以て其現今の歴史と比較するを最良法とすされど茲には之を詳説するの暇なし只其一班を述べん先づ錫倫をとつて例とせよ。夫れ錫倫は吾人の推知し難き往古の時代より常に佛教を信奉し、嘗て他宗に轉せしことなく、又四圍の諸島嶼に之を傳へし南部佛教の本城なり。今此の國民の現狀を以て、佛教生起の地なりと雖ども、遂に之を國外に放逐し、後當に婆羅門教の支配を蒙れる印度半島の現狀と比較せよ。此等の同一の起源を有しながら、而も相異なれる、否な相敵對せる二宗教に支配さるゝ二國民の狀態に於て、茲に余輩は如何なる物を發見するか。此の甚大なる佛教的感化を蒙れる錫倫國民の狀態に於て、(其の道德上、心靈上、社會上、其他何れの狀態に於てするを問はず)、余輩は婆羅門教の儀範儀式の下に躊躇する印度一般の國民に於てよりも、勝れたる點あるを發見するか。否な決して然らざるなり。之に反して若し二者の間に何たる差異ありとせば、余輩は之れ婆羅門教の佛教に勝れたる點なる可しと云はざるを得ず。されど茲に疑ふ能はざる一事あり。即ち錫倫及び印度に於ける佛教又は婆羅門教の影響は、其等の國民の社會的狀態に關する上は、共に甚だ善良なる功果を與へざりしこと是れなり。歐洲の文明及び其の影響の亞細亞に波及するまでは、彼等は常に犯險なる回々教徒の貪慾の犧牲たりしなり。今日と雖ども英國政府若し其の手を引かは、彼等は自ずから回々教徒の掌中に落ちんこと明かなり。然り而して余輩は此の驚異す可き現象生起の原因を何物に歸す可きか。余輩は之を佛教及び婆羅門教の原本的教訓に歸する外、他に之を滿足に説明する一の論理的原因あるを發見せざるなり。彼等の原本的教訓は同一なり。而して茲に余輩は總て人間の精力を吸收し、之を枯死せしむる或物あるを發見するなり。彼等は共に人間を以て一の假象となし、人生を以て一の夢幻となすなり。彼等の教義に從へば、人間は只宿命の機械たるに過きず、人間の爲す可き事は只無慈悲なる運命の指揮するまゝに動くより他なし。

今更に世界最大の佛教國たる支那の歴史を搜撿せしめよ。此の廣大なる帝國には、佛教傳來前、既に固有の一宗教ありて存在したりき。是れ日本固有の宗教神道と大差なし。今簡單を旨として、之を支那の神道と稱せん。さて支那の神道は聖人孔子によりて組織され、純化され、遂に一種の宗教一種の倫理教となれりしものなり。而して此の宗教は今尚ほ存在して、支那の上流社會及び學者社會の尊信を受くること前卷に述ふるが如し。該宗教は一の最勝無上神の存在を信し、又未來の賞罰を信ず。而して其倫理組織は、余の知る所にては、今日に現存する倫理説中最とも實行的なる、最とも單純なる、又最とも高潔なるものゝ一なり。今かゝる宗教倫理を有する國民に向て佛教は何を與へたるか。彼は單に孔教を壓倒したりと云ふの故を以て、孔教より勝れたるものなりと云ふ可からず。是れ余輩の受け容るゝ能はざる論法なり。若し佛教を以て孔教より勝れたるものとし、且つ之を證明せんと欲せば、よろしく佛教の宗義又は組織中に孔教のよりは勝れたる或る物あるを示さゞる可からず。只一の宗教が他の宗教を壓倒したりとか、又之れが地位を奪ひ

たりとか云ふ簡單の事實を以て一の他より勝れたる十分の證據となす能はざるなり。

余は既に云へり。錫倫及び印度に於ける佛教又は婆羅門教の影響は、共に其等の國民の自治的精神上善良なる結果を生せざりきと。彼等は常に回々教徒又は基督教徒の如き外國人の支配の下にあるなり。然り而して今支那帝國の過古及び現在の歴史は或る度までは、同一の現象を呈せざるか。然り、彼は嘗て他國民の支配を蒙りしことなし。彼は貪慾飽くなき歐洲人を排斥するに於て常に成功せり。然りと雖も彼の如き廣大なる帝國、開化せる人民に向ては、余輩の自然望むが如くに、其の境外の諸國の上に何たる影響をも及ぼす能はざりしなり。彼は常に內亂外寇の爲めに苦しめられつゝありしなり。されば彼に向て佛教は孔教よりも勝れたる何物を與へしと云ひ得るか佛教は那點に於て支那人の心靈的道德的狀態を改善したるか。余輩は大にさる點あるかを疑はざるを得ず。

余輩は更に研究す可き一國民を有す。即ち日本國民なり。夫れ佛教は日本國民に向て何をなしたるか。外國人なる余が、漫に之れが答解を試みんよりは、日本の歴史家の言を以て之れに答ふるは寧ろ穩當ならん。先年シカゴ博覽會に呈出されたる日本歴史中には、日本に於ける佛教の感化に付て左の言あり。曰はく、

佛教の渡來は國民の精神上完全なる變化を起しき。從來宗教に關する人民の思想は最とも粗笨なる性質のものにてありき。彼等は只信じき、諸神は崇敬されざる可からず、信賴されざる可からず、又畏敬されざる可からずと。彼等の簡單なる信仰に於て、彼等は禍福幸不幸一切の事柄を神意に歸したりき。故に諸神を祭りて以て禍を攘ひ福を招かんとせり。……神武天皇の治世に於ては、神人の區別毫も存せざりき。又孔教傳來の後も神に對する國民の思想は毫も實体的變化を受けざりき。蓋し孔教の教は毫も古來の觀念と衝突せざればなり。されぞゲトと佛陀の主要なる教說、例へば「惡をなす勿れ」、或は「只善をのみなせ」と云ふが如き教說は毫も孔子の教說と分離せずと雖ども、佛教は過古及び未來を說き、現世の行爲は總て來世に於て其の賞罰を受くと說き、又佛は最上至尊のものなり、而して彼を信ずるものは誰にても自から廣大無量の福德を受く可しと教へしなり。

惟ふに本書の著者は、萬葉集と稱する上古の優美なる歌集に於て見るが如き、最とも純潔なる形体に於て、神道を學ばざりしに似たり。後世に至ては、神道は大に腐敗せしこと疑ひなし。されど其の原始の形体にありてもヤハリ佛教に劣りしか、疑なき能はず。余輩は又神道は最勝無上の實在者の觀念、及び未來賞罰の觀念を有せざりきてふ、著者の言に贊同する能はず。但し神道に付ては、詳しく次卷に述ぶ可し。茲には只神道と佛教の比較に付ては、余は聊々該日本歴史の著者と其見解を異にする所あるを云ふのみ。

上來論ずるが如くは、余輩は、佛教は其の支配せし國民の上に毫も善功を與へざりしと云ふか。否な〳〵決して然らざるなり。余は其の眞實の價値と、其の眞になしたる所を示さんと欲するのみ。現代の傾向は、人類の上に於ける佛教の影響を誇大誇稱せんとするにあり。余輩は聊々此の根據なき誇大的傾向を拒がんと欲す。是れ余輩が二千有餘年間佛教の支配を受けつゝありし諸國民の過古現在の歴史を檢査せざるを得ざりし所以なり。もつとも茲には其の檢査の結果の大要をあぐるに止めしも。若しかゝる傾向の現はるゝなからんか余輩も亦只佛教の功勳を列擧するに止

めしならん。夫れ佛教は其の強大なる教主政体と、高妙なる哲學的教義と又其の富豐なる寺院を以て、其傳播せし諸國民の上に臨めり。何ぞ彼等を利益する所なきを得んや。故に若し佛教其物のみに付て考察せば、彼は人類進歩の上に大なる恩惠を與へしこと、明らかなり。其自制斷慾の教は永久人間行爲の一標準たる可し。今や日に月に強大を極むる自利私慾、の念を抑制するに於て、此の教の與ふる恩惠は決して尠少ならざる可し。實に未來の人類が悉達多太子の宗教に向て、最とも感謝す可きは斯點なる可し。殊に彼自から斯教の効果を其の實行の上に現はしたるは、以て萬世の摸範となすに足るなり。

今更に佛教の將來に付て數言を費し、以て本章を畢らん。但し佛教の將來に關する問題の詳論は本卷最終の章即ち三教を比較對論するの章下まで殘しおくが可ならん。蓋し本卷第一章中に云へる如く、該三宗教は互に世界人類の全体を其掌中に收納せんと勤むれば、各教將來の運命は全く他より離して考究する能はず、三者併觀するに於て、始めて正當に之をトし得可きものなればなり故に茲には只該問題に對する愚感を陳ぶるに止めん。今該問題を採て詳しく開示せば左の問題となる可し。曰はく、佛教は未來永久其現狀に浮滯す可きか、或は一大普及教となりて最後の勝利を得可きか、又は退歩衰微して全く其の力を失ふに至る可きかと。茲に塲合は只右の三箇あるのみ。彼は將來孰れか右の一塲合に遭遇せざる可からず。されど今日より其の孰れに歸するかを確かに預言せんことは甚だ困難なり。只余の感ずる處を陳べしめよ。夫れ佛教若し將來一の大普及教となりて世界宗教界の全權を掌握せんと欲せば、否なよしかゝる大望を起さずして單に其現有の大數の信徒を保持するを望むに止まるも、今一大改革一大純化の其の上に施さざる可からざるものありて存すること明らかなり今や彼等は多年堆積の黴風陋習を一洗して其大功を奏せし原始の狀態に還らざる可からず。余は今茲に彼等と云ふは其の現代の先導者等を指すなり今や佛教は一大改革の氣運に迫られおることは此等の人々と雖も十分自覺する所ならん夫れ宗教の將來は其の教義戒律等の中に道德的法則を顯彰する方法の如何によりて、大に影響さるゝものなり。宗教は常に道德法よりも一段高く地歩を占めざる可からずと雖ども、又常に道德法を以て其の土臺となさゝる可からざること敢て論を俟たず。彼若し常に人心を已に繫ぎ、常に人心に於て其威權を保たんと欲せば、先づ其の教義戒律組織等は能く道德法に適應し、又之れが實行を奬勵するかを反省せざる可からず。而して後、一段高き位地に上進す可きなり。然り而して佛教今日の狀態（余は僧侶の現狀を意味す）は何れの國にありても、余の今縷陳せる要件に適合するや否や。彼等僧侶をして自から判斷せしめよ。

今や佛教の最とも驕る所は、彼は哲學科學の一系体、否な寧ろ哲學科學の宗教なりと云ふにあり。佛教は科學的方法によりて眞理を發見せんとする外、一事も求めずとか、又若し科學にして彼が存在を許容せざらんか、彼は喜んで全然其の位地を科學に讓る可しとか云ふが如き言は、近來余輩の屢々耳にする所なり。(レヌーフ氏が歐米に於ける佛教と題して、千八百八十八年の「二ヶ月評論」に掲載せし論文を見よ)是れ歐洲に於ける一派の佛教家の頻りに唱道する所なり。されど亞細亞の佛教家も亦均しくかゝる見解を懷き、科學に向て同盟を求むるや否やは、確かならず。只近來彼等の内にも亦かゝる傾向のヤ、起れるを見ると云ひ得るのみ。然り而して今余の見る處によれば、かゝる同盟は決して佛教の爲めに有益ならざる可し。其の理由は、先つ第一に科學は毫もかゝる同盟を求めざるなり。彼は單身獨行、毫も他の補助を要せずして其の道に進行せり。之れ彼は如何なる宗教の補助をも要せざる事を示すものなり。然るに佛教若し強ひて、彼が同盟を求めんか、自(オノヅ)から彼に一歩を讓り、彼が次位に立たざる可からず。夫れ此點に於ける佛教の現傾向及び其の先導者の政略等は如何にあるとも、基督教は毫も哲學又は科學に向てかゝる同盟を求めざること明らかなり。タトヒ彼は人間の思想に向て十分なる自由を與ふと雖ども、又常に其の獨立の地位を保持し、毅然として動かざるなり。其理想は常に科學よりも一段高くして、其方法亦之と異なれり。彼が目的は人間の靈性を高め德性を發達せしむるにあり。而して此目的を遂せんが爲めに、神聖なる天啓によりて建設せられ、五十世紀間以上も連續せる一の社會的系体(教會)を有す。而して人間の研究及び其の結果が該系体の原則及び方法に撞着せず之を助くればよし、タトヒ然らざるも彼が理想の方へ進行する途を阻礙せざる限りは、彼は敢て此等の人間の研究に頓着せざるなり。今茲に一の國家あり。彼は二千年以上も連續し、而して其の長年月の間、常に其の法律を守り、國民たるの義務を盡せる人民の間に、絶對的なる滿足と幸福を與へたりと假定せよ。更に輓近の社會に頻々蹤出するが如き破壞黨ありて、其の國に來り、其人民に向て左の如き言を發すると假定せよ。曰はく、汝等の奉する政体は大に平和と幸福を與ふと雖ども、されど其の組織たる余輩が順奉する社會學の原理に適ひ、又之に從へるものに非らず故に今全く之を破壞して、新たに余輩の學説に適順せる一政府を組織せよと。該國の多福なる人民は一瞬間だにがゝる危險者の暴言に耳を傾くるならんか。然り而してこは基督教に對する或る哲學者科學者の勸告に類似する所なきか。夫れ基督教は誠實謹嚴に其の天職を盡し、一切善事の頭に立ち、又其の十字架が平和文明の記號たる限りは、彼は毫も科學者の研究を恐るゝの理なく、又毫も之を恐れざるなり。五千年間の長年月を貫きて連續せる彼が社會は彼の動す可からざることを示せる一證據なり。

若し夫れいま論ずるが如くならば、人或は問はん。基督教は總て科學の結果を排斥するかと。又問はん、彼が教會は多幸多福にして、五千年間も連續し又尚ほ連續するが故に、彼は動す可からざるものと考ふ可きか。若し然らば、彼と均しく幸福なる社會を生せし婆羅門教の如きものに向ても余輩は又然か云ひ得ざるの理あるまじ。婆羅門教は葦陀時代の早代より今日に至るまで、二億以上の生靈に向て多幸多福なる一社會を與へざりしか。然らば彼は其の貴ぶ可き長壽の故を以

て、排斥す可からざるものとなす可きか。然らば先年講究したりし彼が特殊なる一切諸教義は、幾千年間一の幸福なる社會によつて受け容れられたるが故に、眞實なり、眞理なりと考ふ可きかと。之れ決して然らざるなり。余輩は長壽さへ保たは謬想も眞理なりと云ふに非らず。又單に實利の點より理の眞僞を判斷せよと云ふにも非らず。此等は決して保持す可からざる見解なり。余輩の云ふ所は左なり曰はく基督教會はあまりに廣大なる社會的團体なり。故に漫然一箇人の得て批判す可きに非らずと。彼が賦性を領解し彼が教義を批判せんには、宜しく其組織全体を其の本源より研究せざる可からず。監督バットラーやシャクープリアン氏などが該教の廣大なることに就ての全班の觀念を得んが爲めになせし如く、國民の全類（基督教を信奉する）を研究せざる可からざるなり。余輩をして本題に立ち戻らしめよ。

さて佛教を以て一のものとせば、余輩第一の職務は其の哲學の起源及び性質を精研するにあり。余輩は第二章に於て、三藏の一なる論藏は哲學的諸問題に關する論說を大集せるものなるを知りたり。而して今本原の材料に遡りて佛教を研究せる學者にして、該論藏は佛教既に進步的活動的宗教たるの質を失ひ、其の僧侶は全く形而上學の深淵に沈溺せる時代に至て、始めて生れ出でたるものなりとの論斷に達着せざるものあるを見ず。之れ阿輸伽王の碑文によりてもまた推知せらるゝを得るなり。今阿輸伽王の建立せる石碑所載の事柄を檢するに、總て在家出家の戒律、及び德行の奬勵等に關するものなり。後幾百年間佛教家の主要問題たりし哲學的問題に關しては、一言一句之れに說き及ぼせるもの發見されしことなし。而してこは宗教に關する余輩の先天的概念に吻合するなり。今世界の歷史に徵するに、純然たる哲學的思想を以て人間の行爲を感化し得たる宗教は一も之れあるを見ず。又其の正道をすてゝ哲學の上衣を着する毎に其活力を失ひ、好果を呈すること能はざるに至れる宗教は其例多し。今其一例を擧げんに、中世紀に於ける基督教は最とも好適の例なり。此時代に於ける基督教は純然たる哲學的宗教なりき。此時代の遺物として今日に傳はれる哲學的書籍は甚だ多く、其所說實に嘆稱す可きものあり。彼等は「思想の山」と稱せらるゝなり。されど此等の理說が學堂又は寺院に於て盛に辨說論諍されつゝありし時代は如何。基督教の眞生命活勢力は其の最低の度に沈みし時代に非らずや。然り而して佛教獨り此の數に漏れんや。彼獨り一切他宗教と異なりたる特別の運命を有す可き理なし。實に其の哲學時代は彼毫も進步發達の力を現はす能はざりし時代なるなり。

さて佛教は其の哲學系体に固着し、又其に依て起ちそれによつて倒るものとせば、先づ其哲學系体其物を精究するは余輩最要の職務なり。余は特に本章を擧げて之れが研究に當つるものは、之れが爲めなり。

されど今此問題に入るに先ち、少しく述べおかざる可からざるものあり。乞ふしばらく諦聽せられよ。夫れ佛教の婆羅門教に於ける關係は宛も基督教の猶太教に於ける關係に均しとは余の屢々說述せし所なり。さらば今佛教の哲學を研究するに當て、佛教其物に本具なる觀念と婆羅門教より借り入れたる觀念とを能く鑑別すること甚だ緊要なり。勿論佛教は婆羅門教の幾百年間宣說し來りし諸教說を捉へて、之を己が物なりと主張するの權なし。余輩は既にアルヤン人種は最とも思辨に耽る人種なるを見たり。且つ婆羅門教は人間生活の殆んど各方面に就て思想の大量分を產生せることを見たり。而して佛教若し哲學の一系体を以て自から任し、又之を驕らんと欲せば、其

の所說はよろしく婆羅門敎以外に自から創說したるものならざる可からず。其の近所より借用し、又は剽竊したるものなる可からず。今基督敎は其の一神主義を以て驕ると假定せよ。其の原本的信條の一神主義なるは明確なり。されど此の壯大なる上帝純一の觀念は決して彼が創說にあらざるなり。此觀念は其の起原を猶太敎に發し、後基督敎の採用する處となれるものなり。之れ余輩の大に注意す可き點なり。されば今佛敎の哲學を研究するに當ても先づ純然たる佛敎的觀念と其の婆羅門敎より借り入れし觀念とを嚴正に鑑別せんと欲するなり。

更に一事の述べおかざる可からざるものあり。即ち茲に佛敎の哲學を論ずる範圍に就てなり。勿論佛敎經典の包藏せる哲學上の各論說を一切講說せんことは本章の望み得る限りに非らず。故に只哲學宗敎の二者相會合する諸問題を講述するに止む。而して此等の諸問題中にて宇宙の起源及び宇宙に於ける人類の位地の問題は先つ第一に研究す可きものなり。

概するに佛敎の哲學は多くの印度哲學否な總ての亞細亞哲學の如く、論理的精細と系統的組織とを欠けり。但し此二質は總て歐洲思想の特性なるが如し。故に今其の根底に儼在する普遍的根本的概念を發見せんとするに當ては、實に巨多の書を讀破せざる可からざるなり。佛陀は其生時の間嘗て哲學に關することを說かざりしが如し。萬有の起源に關する疑問を受けし時は、彼はかゝる問題を論評するも、毫も益なしと答へしなり、何の結着にも達せざる可しと答へしなり。之れ實に敎祖の金言なり。然るに後彼が繼續者は、彼の解說す可からずとなせし神秘的問題の深淵中に沈溺するに至れり。

さて佛敎の所說に從へば、世界の系統は無量無數なり。而して各系統には夫れ〳〵日月星辰あり。一日月の照らす限りを、一娑花羅と云ふ。各娑花羅は一大地（中に大陸島嶼及び海洋を含む。中央には、摩訶迷盧山あり）。及び一定の諸天諸地獄を有し、三箇づゝ相集りて、廣大無邊の空間に散在す。而して一切娑華羅は左の三類に分かる（一）常に佛の顯現する娑花羅、（二）佛出現することなしと雖ども、尙ほ其の命令を下して支配する娑花羅、（三）佛正覺を得る前に生まるゝことある娑花羅、（其數一萬あり）。而して各娑花羅は左の三部に分かる、（一）無色界、（二）色界、（三）欲界。又左の三部にも分かる、（一）有情界、（二）虛空界、（三）物質界

人間の生息する世界は絕へず成壞す。始めなければ終もなく、成壞連續無窮なり（而して此觀念は實に佛敎の形而上學、即ち諸行無常說の根礎をなすものなり）又此等の變化は因果必須の理法に從ふ。而して因即果果即因なり。此く因果循環成壞連續するは即ち世界の常態なり（此の理說は即ち或る學者等が物理學近世の發見たる運動勢力恒慟の說に極似すと稱道する所のものなり）。

譯者曰、佛敎の宇宙論に就ては大樓炭經、起世經、起世因本經（大藏經辰帙第一冊）等を見よ。

世界壞滅の方法は、火によりて七回、水によりて八回行はれ、又第六十四回目には風によりて行はる。而して此の方法によりて一切世界壞滅したる後、大雨降りて殘灰に生命を賦與し、再び日月諸世界及び萬物をして發生せしむ。宇宙は此の無限圈內を永久に步む、壞又成、成又壞。げに宇宙若しかゝる機械ならば、之れ毫も望みなき機械なりと云はざる可からず。蓋しかく成壞無窮諸行無常の世界にありては吾人は決して完全圓滿に達すること能はざればなり。余は今此の理說を述ぶるに當て、土耳古の磨機を思ひ起かさずんばあらず。夫れ土耳古人は磨機を回轉せしむるに毫も水力を用ひず、全く馬力を用ゐるなり。而して之れが爲めに用ひらるゝ馬又は驢馬は、密

に其兩眼を覆はれ、朝早くより日暮るゝまで、少も日光を拜することなく又何物をも視ることなく、只磨機を引きてぐる〳〵其の周圍を廻ぐるのみなり。

說て茲に至れば、余輩は大に疑はざるを得ず、世界はかく目的なきものなるか。世界若しかく成壞無窮、諸行無常なるものならは、余輩は如何なる目的をも達する能はざる可し。實にかゝる理說は人間をして大に失望せしめ、進步改善を圖るの精神をして全く枯死せしむるなり。

是に於て、余輩は又左の問題を呈出せざるを得ず。曰くかゝる理說は近世科學の發見と一致するかと。既に上文に述べし如く、佛敎は自から科學の宗敎なりと揚言するなり。是に於て一の問題は生起するなり。曰く、科學はかゝる理說を認許するか。科學は無限の時間を通過して宇宙は絕へず、成壞展轉することを敎もるかと。余の知る所にては、科學界に於ける現代最大の發見たる進化論は、世界に於ける人類の位置に關しては少くもかゝる理說を許容せずして、少くも世界全体の壞滅を敎へずして、確かに總ての時代を通過して總ての生物界のいよ〳〵高等なる境に進步發達することを敎もるなり。現代の一大科學者たるアルフレッド、ワレス氏は其近著達賓說中に曰へり。

> 此の望なき又人間の精神をして枯死せしむる信仰（即ちいよ〳〵高等なる生活に臻達せんとする人類總ての努力競爭は全く消滅す可しと云ふ信仰）に反して、靈界の存在を信受する余輩は、宇宙を以て總て其の部分に於て、無限定なる生活と完全に進達し得る靈物（スピリチュヤルビーングス）の發達に適應する樣組織される嚴肅なる一全体と觀ずるなり。余輩に向ては世界の總ての計畫は人間の身体と結合せる人間の靈魂を發生するにありしと見もるなり。（達賓說四百十七頁）

ワレス氏の言若し科學の眞性を表はしたるものならば、科學は佛敎よりも寧ろ基督敎の精神に適合するものと云はざる可からず。基督敎の觀念は、宇宙間の一切諸物は悉く皆な最勝實在者の手に導かれて、いよ〳〵高等なる生活に進化するものとなすなり。實に能く聖徒波羅（ポーロ）の觀想を味はゞ、全宇宙は衰頹と腐敗の中より全体の復本（本來の純潔に復すること）に向て急進しつゝあるものなるを悟るなり。

然るに佛敎の精神は全く此の宇宙的進化改善の觀念に反對なり。彼は儼然として敎へて曰はく、宇宙間の各事各物は悉く恒定不變なる因果必須の理法に拘束せられたるものなりと。彼は全くワレス博士が、自然界がいよ〳〵高尙なる理想の方へ進步するに於て、其根礎をなすものとして受容せる靈界を知らざるなり。されど、茲には二敎を對論するの權利なし。後章此の問題を論ずるに至らば詳論す可し。

此の宇宙觀と連結して佛敎は、彼が無神的感化をしていよ〳〵顯著ならしむる一理說を採用せり。即ち轉生輪廻の說なり。今此の理說を撿究するに先だちて、余輩は左の一問題を研究しおかんと欲す曰はく、佛敎は無神敎なるか或は有神敎なるか。之れに答へんには先づ佛敎々義の性質全班を學ばざる可からすされど今マクスミユラー博士の論決を信受して以て之に答ふるも敢て正鵠を過らざる可し氏の說に曰く佛敎は波羅門敎に反動して起れるものなり。彼は全く波羅門敎の諸神を排斥せざりしとは雖ども之を以て下等の實在物とし、人間と同しく老衰を免かるゝ能はざるものとせり。而して後漸々其開祖佛陀を以て神とし、又其の直接の大弟子及び後世の高僧等をも神として、其始め受信したりし波羅門敎の諸神に代もるに至れりと。惟ふに此の反動及び波羅門敎

の諸神を貶斥することは印度にありて二教相爭ふの間に胚胎及び形成せしものならん。

さて最勝實在者の信仰に對する佛教現今の傾向は、余の觀察する所にては、二流に分かるゝが如し。一は基督教と接觸して其の影響を蒙りし結果にして、佛陀を以て最勝無上の神となし、神に歸する一切の性德を彼に附せんと欲するものなり。他は科學の感化を受け、科學の現傾向は多少唯物的無神的に走れるを見て、佛教をして純然たる無神教となさんと欲するものなり。但し科學と同盟を求むるは、佛教の爲め賀す可きことに非ざるは既に上文に述べたり。

究竟右二流の孰れが勝を占むるかは今預言すること難しと雖ども、佛教若し全く神の信仰を排斥し、一切他の諸宗教と離れて獨り無神を驕るものと成り了らんには、到底一の宗教として永く人心人情の上に其位置を占むること能はざる可し。人間の衷情は已れよりも高く、又依賴す可き或るものを求めてやまざるなり。佛教其自身の歷史に就て見るも、其の信徒は到底神又は神に類するものなくては十分安心する能はざりしこと明らかなり。

とにかく今日の佛教は二大難の間に狹まれおるが如し。彼若し猶太基督教的有神主義を採用せんか、哲理の幽玄を驕る能はざらん。若し無神主義を採用して所謂科學的宗教に擬せんか、遂には一の宗教として人心の上に立つ能はざらん。左せんか好ましからず、右せんか生存する能はず。彼は實に二大難の間に狹まれおるものと云はざる可からず而して今や人心は如何なる問題に向ても曖昧朦糊の間に過すこと能はざるに至れり確然たる定解を得ざれば滿足すること能はざるに至れり。佛教亦孰れにか結着をつけざる可からず。

されど他の諸宗教にありては毫も此困難あるなし。今回々教をとつて例とせんに、彼は慨然として曰はく、宇宙萬有は一の最勝實在者の創造せるものなり。而して此の實在者は預言者摩哈默を下して、其の律法を人間に啓示せりと。彼は此の簡單なる教義と共に立ち又共に倒るゝなり。科學の之を許容すると否とは敢て顧慮せざるなり。彼は只此の宇宙萬有の創造者たる最勝神と此の預言者摩哈默を信受せんことを求むるのみ。而して此を信受するものは其の何人たるを問はず、門を開きて入らしむるなり。されどユニテリアン教の如く門を廣ろめて無暗に人を入れんとはせず又如何なる大哲學者大科學者に向ても、決して一歩も讓らず。王侯貴人に向ても決して其の說を曲けては歡心を得んことを望まざるなり。然り而して此は正さに宗教なるものゝ必ず歩まざる可からざる正道なり。始めより己が依て以て立つ所の基礎を固守せざる宗教は、決して永久不滅なる結果を生ずる能はざる可し。否な宗教の宗教たる用を盡くす能はざる可し。タトヒ摩哈默の宗教には一の景慕す可き觀念なく人情の奥底に觸るゝ情操なしとするも、此の簡單なる事實は以て彼の宗教をして永久不滅なる感化を生せしめ、又宗教の宗教たる眞面目の一分を具へしむるなり。惟ふに其の信徒にして已れの眞に信奉する所のものを剛然として固守し、之れが爲めには生命財產をも惜まざる程の決心を有せざるは、之れ其の宗教の力なく微弱なるの最大確證を自から公然世に示すものと云ふ可し。其の信徒をして上述の如き確信と決心を起さしむる能はざるが如き宗教は、若し之れありとせば、決して其感化否な存在をも永續する能はざる可し。早晩消滅の運命を免るゝ能はざる可し。

余輩は再び輪廻說の研究に立ち戻らん。さて此理說の歷史は最とも印度埃及の二國民と結合せり。他の諸國民に於ては、あまり其の信奉者を得ざりしが如し。猶太教の二派サドカイ派と、パリサ

イ派の間に死者の復活問題に關する論爭の起りしとき、其の復活說の方を採用せし黨派は屢々聖書を引きて一人の靈魂が屢々他人の身体に宿れることあるを示さんとせり。例へば洗禮の約翰は預言者エリヤの生れ更はりしもの、即ち古昔の預言者の靈が一の新しき人体に宿りて約翰となれりと云ふが如き信仰なり。されど猶太人は古代の埃及人及び佛教徒の觀ずるが如くに、此の教義を觀せしものに非らざることを忘る可からず。彼等は人間の靈は其罪業の罰として下等動物の体に移ると云ふが如き信仰を有せざりしなり。彼等の信ずる所は左の如くなりき。曰はく、惡人の靈は死後地獄に墮つ、されど善人の靈は屢々他の善人の体に移ることありと。ヘロデ王が基督を以て既に斬首に處せられたる洗禮の約翰の化身なりと思惟せしが如きは此の一例なり。されどアレキサンドリアの猶太教及び後世神秘哲學がプラトー哲學の新しき形体を裝ひて流行せし時代の猶太教は、輪廻說の範圍を更におし擴めて、人間靈魂の轉移するは單に人間界内に限らず、生活物の總ての境に通ずるものなりと唱道せり。之れ大に佛教の輪廻說に類似せり。

古代の基督教會にありてはオリゼンは此說を唱道せりとの非難を受く。されど余輩は能く時代の性質を考へざる可からず。夫れ基督教が始めて世界の舞臺に現れしはアレキサンドリアの新プラトー派が哲學の最とも高尚なる最とも流行せる形体たりし時代なり。猶太人の如き哲學の好尚を有せざる人種すら、其の感化を受けし時代なり。されば古代の基督教會に於ても多少之れが影響を蒙りし人あるを見るも敢て驚くに足らざるなり。古代の基督教の一派にして、總て基督教の教義は人間の理性によりて解說せらるゝを得可しと主唱せし諾斯土派は、全く此の理說を受容したりき。今斯派の沿革を檢するに、其根本的教理は佛教の教理に異なること大ならざるを見るなり。

されど基督教は甚だ早く全然此理說の影響を脫したりき。後章に論說せる該教の教理を見よ、余輩は毫も此理說に感染せる所あるを見ざるへし。

又回々教は毫も佛教或はプラトー哲學の影響を蒙らざりき。アラビア哲學は其性質上純然たるアリストートル的のものなり。而して之れ全く回々教諸王の朝にありしシリアの基督教徒より傳はりしものなり。摩哈默の宗教は常に哲學を好遇せず。彼の下にありては思想の自由とか、良心の自由とか云ふか如き思想は全く其の影をも止めざるなりアラビア人は甞て深邃幽玄なる思辨の爲めに其の心力を勞せしことなし。彼等は只確定の事實として宗教を受け、又勇氣と忍堪とを以て之に順服するなり。

今印度人の輪廻說を研究するに先だち、此の問題に向て希臘人は如何なる思想を抱きおりしかを概論せん。但し希臘は一切思想の形体が各々其の住家を得し地なり。

夫れ希臘は他の諸國民の如くに、國民の指導として神より啓示されたる聖書を有せざる國民なり。彼には新約書なく、舊約書なし、聖陀もなければ三藏もなし。總て希臘人の宗教思想は哲學者の唇頭より來れるものなり。故に古代の希臘人の宗教界及び宗教思想に達せんには彼等が哲學者及び他の諸學者を研究せざる可からず。

古代の希臘哲學者の内にてプラトー及びピタゴラスの二人は人間の靈魂は其の作業の賞罰として、人間又は他の動物に轉生するものなりとの理說を唱道せり。此の問題に關するプラトーの思想はフエドー（人名を以て書名となしたるプラトー「ダイアログー」中の一書、）中に明らかなり。彼はソクラテスの口をかりセベスに向て曰はく。

惡人の靈は其の前生の罪業を償ふ爲めに其墳墓の近傍をさまよふなり。而して彼等の心情を煩はせる慾念の滿足され、又他の身体(パデー)中に禁錮さるゝまでは絶へずさまよふものなり。而して彼等は其前生に於て有せし性質に從ひて他の身体中に投入せらるゝものならんと、想像せらる。

セベス問ふて曰はく。

ソクラテスよ、前世の性質に從ふとは如何なる意ぞ。

ソクラテス答へて曰はく。

我は暴食、淫色及び豪酒に耽り、此等を避けんとの考を有せざる人々は、驢馬及び同種の動物に轉生す可しと、云ふなり。汝は如何に考ふるや。

セベス、曰はく、

さもある可しと考ふ。

ソクラテス、曰はく

又不正、壓制、及び暴虐なる所業を撰びし人々は狼或は鷹鳶に轉生す可し。

彼等の内に於ても或るものは他のものより幸福なり。而して己が心身及び其の宿所に於て最とも幸福なるものは鄭重及び親切等の諸德を修行せし人々なり。何となれば彼等は己が性質の如き或る温柔なる親切なる性質のもの例へば蜜蜂又は蟻の如きものに轉生するならん。否なもとの人間にすら復生し得るならんと思はるればなり。

されど哲學者又學を愛する人にして、其生活全く純潔なる人は獨り神に達するを許さる。

（「フェドー」八十一節八十二節）

プラトーの教説は猶太後世のパリサイ派の教説と全く反對なり。後世のパリサイ派は云ふ、善人の靈は獨り彼等にのみ與へられたる特權として、轉生するを得るものなりと。

蓋しプラトーの轉生説は、彼が觀念論全体の組織に適合せるものなり。之れ彼れが觀念論を人間の靈魂上に適用したる結果に外ならざるなり。

基督前五百八十二年頃に在世せしピタゴラスは、埃及に遊歷して始めて轉生輪廻の説を學び、希臘に歸りて之を其國人に傳へたりしが、後又プラトー之を受けて大に布衍したりきと云ふ。されどピタゴラスの遺書は今日に傳はらざるを以て、今彼が學説として吾人の研究するものは、皆なを他人の遺書より蒐集組織されたるものなり。而して其等の遺書の傳ふる處は悉く信據する能はざるを以て、彼が學説は未だ明確に研究されたるものと云ふ可からず。ラエルチユースが希臘哲學者傳中には、セラピオンの子ヘラクリデスの言に據りて、ピタゴラスは靈魂に就て一詩を遺せりと云へり。されど其の詩すら今は傳らず。其他直接に彼の學説を研究す可き材料は一も傳はらず。

然りと雖ども、彼が學説中には多分靈魂轉生の説も既に發達しおりしならん。

上述する所によりて見れば、轉生説は早くより希臘人の熟知せしものなるが如し。而して此は恐くは埃及より傳來せしものならん。蓋し埃及の古代の希臘に對する關係は宛も古代の支那が日本に對する關係の如きものなりしなり。後世の傳説は希臘の轉生説を以て印度より傳はりしものゝ如くに説けども信じ難し。されど其の何れの國より傳はりしかを問はず。とにかく此理説は希臘人古代の宗教的生活を感化すること深大ならざりしなり。彼等の思想及び日常の行爲は、印度人

及び埃及人の如くに、此理說の影響を蒙らざりしなり祖先の靈魂は時々生者の住所に來りて、供物を求め、又之を受くとの思想は一の哲學的系体に組織さるゝまで發達せざりしなり。

余輩は今佛敎の轉生說を研究するに先だち、婆羅門敎は此理說に對して如何なる地位に立つかを檢せん。先づ利瞿韋陀を檢するに、余輩は此思想の傾向甚だ微少なるを見る。且つ又人間の靈魂に關する韋陀の觀念は、古代の希臘人の觀念と大差なきを見る。其觀念は甚だ簡撲なり。曰く、義人の靈は幸福圓滿なり。屢々生殘の家族を訪ふて供物を受く。されど惡人の靈は苦界に墮ちて、其の生時の罪業の輕重に應ずる苦罰を受くと。

されど前卷に講說せし如く、印度人の思想宗敎は强健なる韋陀の多神敎に於て永く止まる能はざりしなり。時代より見るも、所載の事柄より見るも、韋陀に次て必要なる摩奴の法典中には轉生輪廻の說の明らかに記述さるゝを見るなり。該書第二章、即ち婆羅門種の無上階級に達する爲めに順備する徒弟の順奉せざる可からざる諸律を記せる章には、彼等が敎師に對すること甚だ鄭重にして、十分敬意を表はさざる可からざることを記し、而して敎師を誹謗せしものは、死して再び生まるゝとき驢の生を受く可しと云ひ、又窃かに敎師の財を盜みしものは、蛆蟲に轉生す可しと云ひ、又敎師を非難せしものは、犬に轉生す可しと云ひ、又敎師を嫉みしものは羽蟲に轉生す可しと云へり。(摩奴法典二章二百一節)。又第十二章に於ては、立法者は宇宙の存在物を三類、即ち彼が言を以て云はゞ三線に區別せり。曰はく、元精、欲情、暗黑。而して一切有情物は皆悉く此等の三線より成立す。此等の三線は又常に有情物の身中に爭鬪して以て互に他を壓せんとす。故に獨り元精を以て充溢せる人あり、欲情の强大なる人あり全く暗黑に支配せらるゝ人あり元精を以て充溢せる人は其行の善なるによりて知らる。彼は韋陀を解し、妄情を抑制し、自己を反省し、而して行爲純潔なり。欲情の强大なる人は、其の意志强固ならずして常に動搖し、又屢々肉体の娛樂に惑溺して、不正の所行を犯すこと多し。暗黑に充滿する人は、貪食、暴虛不信不敬虔等によりて知らる。彼は怠眠を好み、乞食に安し、又事々甚だ不注意なり。

然り而して元精を以て充溢する人々は其報酬として神性を證得し、欲情の强大なる人々はやはり普通の人間に轉生す。而して暗黑に左右さるゝ人々は動物に轉生す。其の最とも劣れるものは蛆、羽蟲、魚、蛇、龜、家畜等となり、中なるものは象、戰馬、獅、虎、牛、水牛、蠻人、首陀羅等となり。而して最とも勝れたるものは、禽鳥、漂流者、僞善者、惡靈等となる。

拳法家、角力者、俳優、刀劍製進者、暴飲者、及び賭徒等は欲情線の最劣等なるものより、王侯將卒は其の中等なるものより、而して諸神の隨從者は其の最勝なるものより轉生す。

苦行を修する人々、世を捨てたる人々、婆羅門衆及び星辰は元精線の最下等より、祭司、卜占者、諸神、韋陀、星座及び年月は其の中等類より、婆羅門、諸物の創造者、達摩、及び大人聖人等は其の最上類より發生す。

以上叙述せる所は、彼此轉生する宇宙萬類の最とも完全なる說明及び分類なり。後世の作なる布羅那斯殊に鄔波尼沙土の如きものにありては、此理說は更に思辨的見解より說明さるゝを見る是れ既に余の屢々述べし如く、アルヤン人種が强健なる大雪山の空氣を失ひ、而して後印度をして著名ならしめし隱微なる思辨に沈溺せし時代の產生物なり。

余輩は之れより、佛敎の經書中に記され又敎へらるゝ轉生輪廻の說を研究す可し。佛經にありて

は轉生輪廻は羯摩と稱せらる。此の語は語根の「クリ」より來れり。「クリ」は爲す、行ふ等の義なり。故に羯摩は人間の所行を意味するなり。詳言すれば、吾人が今世に於て爲す所の一切作業は來世に至て其の報を受くとの觀念を表はせるものなり。更に此の觀念を例解せば、吾人若し我が目を惡事に用ひは、來世には必す盲者と生る可し。若し不正不潔の事に耳を傾けば、來世には必す聽覺の力を失ふ可し。總て吾人現世の作業に隨ひて來世には之に應ずる報を受く可しと云ふことなり。

さて佛教の有する轉生の觀念と、他の哲學宗教の有するものとの間には二箇の差違あり。而して此等の差違は根本的のものなり。只表面上の差違にあらず。夫れ佛教の哲學は宇宙に於て自由的行働の存在を認許せず、萬般の事物一切不變の天則に支配され、各物因あり、各因果あり。故に自由の動力たる人間の靈魂なるものは全く存在せずと唱道するなり。彼は論理の精嚴を維持せんが爲めに、かく全く自由的實在物を否定せるなり。彼の人性論は、心理學上より云はゝ、人間論の他の諸系体と異ならず。されど論理上必然の斷結を避けて所説の整合を損せざらんが爲めに彼は靈魂の實在を否定するに至れり。否な箇人的實在を信ずるは異端なり邪説なりと唱破する程極端に達せり。されど人間の理性は最とも信愛さるる僻見、すら之を壓する能はざる程強大なり。釋迦は彼の教説と自己内部の意識を調和する或る方法を發見せざる可からざりき。而して彼は終に彼が生國の一切學者否な世界一切學者と同一の斷結に到着せり。即ち人間は總て天則の支配を受けて破壞衰滅する物質的身体によりて拘束せられるゝにかゝはらず尚ほ其の内部には之れが爲めに其の存在を失はざる靈力心力の結合を有すとの思想に到着せり。實に此の事實は釋迦すら否定する能はざる程強大にして、彼は終に其の所説をして之と調和せしめざるを得ざりき。リス、ダヴィド教授は云へり。釋迦は其の始め全く轉生輪廻の説に誘惑されざりしが、後四圍の環象の影響によりて漸々其の淵に陷りしものならんと。余の見る所によれば原始の佛教は總てかゝる形而上的思辨に向て其心力を費さざりしか如し。佛陀の觀念は總て教理上の思辨はなるだけ之を避けたる宗教的同胞團体を建設するに有しが如し。故に此轉生輪廻説も後該團体が其の本國に於て愈々強大堅固を致し、其の宣教者の中には追々學者も現れ出づる時代に至て、婆羅門教中より吸收せしものならん。

第二の差違は人間の死は他生に轉移する原因なりてふ觀念なり。是れ亦因果必然説の一結果なり。一因も他の新しき形体(果)にて再現することなくして、全く消滅するものに非ずと信ずるが故に、人間も亦タドヒ一度其命を終るも他生に轉ずることなくして、全く死滅に歸するものに非らずとの論理的斷結を纏繹せしものならん。

惟ふに佛教の最大美は其四諦縁起説に存するならん。さて四諦と云ふは苦と集(因)と滅と道と之を合して四諦と云ふなり。左に各諦の略相を説かん。

(一)苦諦、　生老病死皆な苦なり。愛するものに別れ、欲する物を得ざる又苦なり。天地萬物審思觀察すれば、一も苦ならざるはなし。

惟ふに佛教の厭世主義全体の組織の秘鑰は爰に存するならん。彼は、箇人的存在其物は苦なりと斷す。故に之を滅するは最大幸福なりと信ずるなり。而して之れ其信徒即ち佛者をして一種の失望者沈鬱者たらしむる所以なり。もつとも佛教を

譯者曰、四諦説に付ては舍利弗阿毘曇論、問分四聖諦品、第四(大藏經秩帙第二冊)轉婆羅論第九卷四聖諦所第三十四の一井に餘(攝帙第九冊)

信する國民は總て進取活動の元氣なく、失望憂鬱の悲境に沈めりと云ふに非らず。されど若し彼が教義を一々實踐躬行に施し、其の論理的必然の結果を避けざらんか、到底此邊に達着せざれば止まざる可し。されど吾人は屢々事の中途に止りて其の究極の結果を避くることあり。然り而して此の論理的不整合は却て其の論理的整合に達するよりも人生を益すること多き場合少なからず。

(二)集(因)諦、　一切苦の因は煩惱なり。煩惱は感覺に執着するより起り、生命の永壽を望ましめ又他界來世をも望ましむるに至る。而して現世に執着すること愈々大なれば、苦果を感ずること亦愈々大なり。

(三)滅諦、　苦は煩惱より起る。故に苦界を脱せんと欲せば、煩惱を斷滅せざる可からず。「ヅ〻ムヾ、パダ」經に曰く、「此の鄙む可き煩惱に勝つ人よりは、蓮華より落つる露の如くに、苦は落ち去る可し」(同經三百三十六句、)

説きて爰に至れば、一の疑問は起り來る。即ち自殺は此煩惱を滅盡する最良方法にあらざるかと云ふ疑問是れなり。げに佛教厭世主義の本領は究極人をして此の念を發せしむるに至らん。されどかゝる行爲を認許する宗教は決して、世に受容れらるゝこと能はざる可し。佛教も亦此極端なる論理的必然推到の結果を避けざる可からざりき。故に教て曰く、かゝる行爲は事物の秩序を攪亂するが故に、決して犯す可からずと。而して他に一切苦を解脱する方法を與へたり。其の方法とは何ぞ、曰く道是れなり。

(四)道諦、　是れ有德有智する生活の道なり。此の道に入れ、一切苦惱は絶滅す可しとは佛者の順奉する金言なり。

上來説述する所によりて見れば、佛教も亦他の諸宗教と同じく慈悲有德なる生活を教もること明らかなり。タトヒ其の究極の結果は彼等と異なるも。而して此の正見を得し、正道を歩む人々は終に涅槃の樂果に達す可しと云ふ。涅槃は佛教形而上學の終極の結果なり。余輩は之れより涅槃とは如何なるものなるかを檢究せん。

涅槃問題は甚難なる問題なり。諸國の學者は種々所見を異にせり。佛教の學者間に於ても其解釋區々として一致せず。左に余の檢査したる主要の諸見解を列擧し、又聊か之に向て管見を加へん。

(一)早代の基督教の學者等は涅槃を以て眞正なる最勝神と解せり。既に上文に於て、轉生輪廻の説を順奉せし早代の基督教徒は、義人の靈は轉生の方法によりて宇宙を廻りたる後大王即ち神の宮殿に達す可しと信せしことを説けり。此觀解は古代の希臘、殊にアレキサンドリアの猶太の學者及び後世の猶太の學者等の唱道せし轉生輪廻の説に異ならざるなり。

(二)凡神的宇宙觀、此の觀想を以て解せば涅槃は萬象萬物の究極に還沒する大宇宙なり。婆羅門教の本元還沒觀、即ち宇宙萬有は婆羅摩より出でゝ、婆羅摩に還ると云ふ觀解は即ち是れなり。而して之れ啻に轉生説を唱ふる婆羅門教のみならず、タトヒ此理説を有せざるも其の宇宙觀の多少凡神的性質を具する諸哲學諸宗教は總て此觀解を抱懷するなり。日耳曼の基督教神秘論者の間にも、又波斯の回々教徒の間にも、此の觀解は唱道さるゝなり。されど彼等は轉生説を知らず。

(三)リス、ダヴィド講師は佛教の涅槃は行なり、物に非らずと解せり。故に氏の解に從へば、涅槃

は全く寂滅の境に非らずして、寂滅の行なり。氏は此の語の意義を撿して消ゆる、盡くる等の義なりと云ひ、而して之を以て其の所見を確むる一助とせり。されど此の語の意義は甚だ復雜にして、氏の擧げられし外更に永久の福樂、一致、連合、合体、再び神と合躰する事、天福、慈惠、流合、及び象の水浴等の諸義をも有するなり。又静息、虚空等の義をも有するなり。(ウイリヤム氏の梵語字典涅槃(ニルヴァナ)那の條を見よ)

されど今ダヴィド氏の説に從ひて、此語を静定、消滅等の義に解せば、されば何物の消滅、静定を意味すかと云ふは次に起り來る問題なり。氏曰はく。

此は靈魂の消滅にあらざること明らかなり。是れ人間の心情の罪障ある慾念深き心情の狀態(即ち煩惱)の消滅を意味するなり。若し此情態にして全然消滅せざらんか、羯摩の大秘法に從ひて箇人的存在の輪廻の原因となるなり。該消滅は心情の正反對なる狀態の生長によりて成せらる可く、また之れと競走し而して斯の正反心狀の全く達せられたる時に完成す。故に涅槃は罪障なき寂静なる心狀に同じ。さらば若し此の語を英譯せんと欲せば、「ホーリニス」と譯するが、恐くは最ともよからん。但し此處にては此の「ホーリニス」てふ語は佛教徒の意味するが如く、完全なる平和、慈悲及び智惠の義として解す可し。

されど此の涅槃と云ふが如き多義の語を翻譯することは甚だ困難なり。否な甚だ危險なり。故に此の語は、佛教の最上善を意味するとして、其儘に保存するがよからん。(但し佛教の最上善とは即ち上文にも解せし如く、幸福なる心狀、有德なる狀態、箇人的性格の變化を云ふ)

又余輩は此の語は該最上善を表はすと同時に古代の佛教徒に於てなせし如く、余輩をして罪障の滅盡に趣く道と、罪障の滅盡より生ずる業感緣起の破壞の二者を想起せしむるものとして用ゐ可し。今斯罪障の滅盡及び業感緣起の破壞は涅槃の果ならざる可からざること明らかなり。何となれば涅槃に於て滅盡する心狀は正しく、佛教の大神秘によれば人間の死に於て其の死人の業の轉移さるゝ新しき箇人を形成する處のものなればなり。(佛教書百十二頁百十三頁)

今氏の解する處、若し單に初代の佛教に付て云へるものならば、之れ涅槃てふ語の眞正なる解釋として余輩の異疑なく許容する所なり。若し基督教の教義に於て之に類するものを求めば、基督がニコデムスに教へ給ひし復生説は最とも之に近かる可し。即ち初代の佛教徒の有せる涅槃てふ觀念中には基督教の復生説に類する點あるなり。(約翰傳第三章を見よ)、されど後世の哲學的佛教にありては、涅槃てふ語は一實在物の生活の箇人的狀態より以上の或るものを意味すること疑ひなし。

されど佛教の經典に於ては此の語の用ひらるゝ範圍は甚だ汎し。或は靈魂の一狀態を意味することあり、或は轉生を意味することあり、或は箇人的性格の滅了せる狀態を意味することあり、或は基督教の天國の如く一の場所を意味することあり、或は印度人の婆羅摩の如きものを意味することあり。

次の偈は佛自から其弟子衆に向て唱せしものなるが、之を以てリス、ダヴィド氏の提出せる解説の意義を説明するを得可し。

與ふる(布施する)人には德增上す可し。
自から抑制する人には怒氣發する能はず。

正しき人は一切の罪障を拂ひ去り、
又貪慾と苦難及び一切の忘念を拔き去るによりて、涅槃に達するを得。(東洋聖典集第十卷八十四頁)

されど又次に引用する所の「ヅハムマ、パダ」經中の一句は他の解說を確かむるものとして用ひらるゝを得可し。

或る人々は復び生まる。惡人は地獄に墮ち、善人は天界に上る。而して一切煩惱を脫離せる人々は涅槃に達す。(第百二十七句)

右の句にては涅槃てふ語は單に人間の性格に於ける變化を意味するに非ずして、或る一定の場所を意味すること明らかなり。若し惡人は地獄に墮ち、善人は天界に上らば、一切忘念を洗滌して絕對的純淸に達せる人々は前二者よりも一層高等なる或る境界に到らざる可からず。

又同經の第三百六十七句より同七、八、九、十、即ち三百七十句に至る五句には左の語あり。

決して自から名と形を一にせず、足らざるを悲まぬ人は實に比丘と稱せらるゝなり。愛を以て行爲し、佛の法に靜息する比丘は靜所(涅槃)即ち情慾と娛樂の絕滅に達す可しォー比丘よ此舟を空虛にせよ。若し空虛にせば、舟は速かに進む可し。而して慾と憎を斷ては汝は、涅槃に行く可し。五感を斷て、五感を捨て、五感の上に立て。五感の繫縛を脫せる比丘は、洪水より救はれたる人と稱せらる。

上來叙述するが如くならば、余輩は涅槃てふ語を以て如何なる義に解す可きか。人々正道を通行するによりて證得するを得る純潔と神聖の心狀を意味するとして解す可きか。或は正道を通行したる後、人々の達し得る完全の狀態を意味するとして解す可きか。

余輩は後者の解說を受容するに傾く。蓋し前文にも指示せし如く、初代の佛敎徒にありては涅槃は眞と德の道を通行する人々が此世に於て進達し得る狀態としても思惟せられしに似たり。是れ婆羅門行者の修達せんと企てし絕對的寂靜と靜息の狀態に類するが如し。されど此の語は之よりも多く意味すること疑なし。タトヒ新宗敎(佛敎)創說者の最大希望が單に衆生を救ひて、現世の苦惱と災禍の中より解脫せしむる眞實道を發見せんとするにありし時代には、かく一定せる意義を有せしとするも、後佛陀の宗敎が人間の行爲を指導する道德法より發達して遂に形而上學的系體の最とも隱微精緻なる物の一となりし時代には、其の意義漸々膨脹して甚だ廣漠なるものとなれりしこと疑ふ可からず。げに其の意義若しダヴィド氏の云ふが如くに一定せるものならんには、佛敎哲學の系體其物は不完全なるものとなる可し。既に述べし如く、其の哲學に於ては佛敎は全く因果必然の理法を主宰とする宇宙論を土臺とするものなり。而して宇宙間に活動する此の因果力は一定の時限に於て宇宙全體を壞滅するものとなすなり。其の人間論も亦其の宇宙論と異ならず。人間を以て甚だ望ましからぬ一の結果なりと敎へ、其の存在の絕滅すること早ければ早きだけ、幸なりと說く。されど又此滅無は暴行を以て成ずる能はず、德を練り、眞實道を修行することによりて之に進達するを得るものなりと說くなり。

然り而して涅槃若し一の境、一の物にして、一の行にあらずとせば、更に其の境と云ひ物と云ふは如何なる義ぞ。

(四)上來論述する所によりて、佛敎哲學の全傾向は涅槃を以て其の原始の未發的狀態にある宇宙

となすにあること明らかなり。絶對的寂靜の狀態是れ即ち涅槃なり。其の有情物に於てすると、非情物に於てするとを問はず活動は總て害惡なりと思惟するなり而して寂靜は啻に初代の佛敎徒の最上理想(サンムハボウム)なるのみならず、總て多少神秘敎の質を具ふる哲學系体一切の最上理想なり。此の絶對的不動の狀態は一切存在の欲念を斷滅することによりて證得せらるゝものなり我の永存を欲する念は一切罪惡の根なり。此の根を芟除すること早げれば早きだけ幸なり。但し此の欲念の究極的滅無に達する道は次章に詳述す可し。

惟ふに今述べし涅槃の解はリス、ダヴィド敎授の解よりも多く鄔波尼娑土の哲學と契合するならん。同敎授すら佛敎は總て其の哲學的觀念を婆羅門敎より借り容れたりてふことを許容せるなり。げに此は佛敎の最とも幽玄隱微なる敎理を解する最とも合理的なる方法ならん。然り而して佛敎若し其哲學的觀念を婆羅門敎より借り入れしものならば、此の借り入れしてふ事によりて、余輩は佛敎の哲學は婆羅門敎の哲學を毀傷し淺薄にするより、寧ろ之を布衍し膨脹せしめたるものならんと想像するに餘あり。既に上文に少しく述べおきし如く、涅槃說は二種に分ちて研究せざる可からざるなり。第一には其の初代の簡撲なる佛敎の涅槃說、第二には後世行者的乞食の生活をすてゝ哲學の衣を着せる時代の佛敎の涅槃說。而して此く二種に分ちて研究したる後、歷史的研究によりて其關係を檢し、發達的連絡を發見したる時に、始めて涅槃の何物たるを全く解し得るなり。

余は今婆羅門哲學に於ける唵てふ語の發達に付て諸君の注意を乞はんと欲す。抑々韋陀時代にありては、此語は單に韋陀を誦するに當て、敎師が生徒の注意を次章へ牽かんとする時に用ひしものにて、ヤ、今日の文章に用ひらるゝ情呼點に類する用をなせしものなり。されど婆羅門敎が形而上學的思辨の深淵に沈みし時代に至ては、此の語は宇宙の本精として用ひらるゝに至れり。さらば如何にしてかゝる簡單なる語より此かる神秘なる義の發達するに至りしかと云ふは、正さに起るべき問題なり。而して之れが答解は單に之れ人間悟性の茫漠朦糊たるによると云ふにあるのみ。鄔波尼娑土を繙きて此の語の定義を讀みし人々は、其の著者が此の語は韋陀の誦讀に用ひらるゝ注意語なると共に又宇宙の本精なりてふ事を諦聽者に解せしめんとて如何に困難するかを知らるゝならん。

故に余輩は左の結案に達するなり。曰はく、佛敎は鄔波尼娑土時代の婆羅門哲學より其の涅槃說を吸收し、之を其宇宙說及び輪廻說と融合して、タトと多くの點に於ては其前行者たる婆羅門敎に極似すと雖とも究極の結果に至ては根本的に之れと異なれる一新系統を開設したるものなりと。然而して此の二大系統間に存する究極の差違なるものは、佛敎が總てアルヤン民種遺傳の古傳を放棄し、全然之と分離せしより起れるものなり。婆羅門敎は其哲學的傾向に於て如何にあるとも、彼は決して韋陀を捨て、韋陀の權威を否定せしことなく、又韋陀中に現はるゝ强健なる多神敎を認容せり。而して韋陀の多神敎的なると、又其の權威の强大なるとは、後世に至るも婆羅門學僧を牽制して凡神的思辨の極端に進達せざらしめ彼等をして深く無神敎か、或は凡神的宇宙論中に沈溺するに至らしめざりき彼は婆羅門敎哲學をしてアマリ横道に進行するを得ざらしめたりき。之れ印度後世の文學に於て明らかに現はるゝ所なり。其の思辨の結着は如何にあるとも、該文學中には阿耆尼の如き、伐留那の如き韋陀の古き諸神は巍然として其權威を保てるを見るな

り。而して人若し彼等諸神の存在を否定せんには、異端邪説として社會の貶斥を蒙りしなり故に哲學者は是非其理説をして一般に信受さるゝ教説と調和せしめざるを得ざりしなり。

然るに佛教にありては情狀全く之れと異なれり彼は其行路の初めに於て既に古傳と分離せり韋陀の尊重と其の内容の神聖は毫も佛教徒の顧ざりし所なり。佛教徒に向ては韋陀も又其の諸神も毫も普通の事物と異ならざりしなり。而して先卷なる婆羅門教論中に述べし如く、佛教出現前後の時代には唯物的及び無神的諸系統は漸々現出せしなり。而して此の景勢は佛教の憤然として傳來の諸神諸説をすて、一切存在の究極の寂滅靜止を以て究竟涅槃とするまでに勇進するに於て大に彼を鼓舞推動せしものならん。

余は今本章を終らんとするに當て、讀者の便をはかり左に上來講述せし所を概括せん。

(一) 佛教は婆羅門教の僧侶及び教義の濫用に反抗して起れる一の新しき宗教的系統なり。

(二) 其初代に於ては主として實行的道德の教に力を盡くし、修德の最要を説き、族制の區別を壞り、四民平等四海同胞主義を宣説せり。

(三) 後世印度全体に傳播し、婆羅門教及び他の哲學系統と接觸し衝突するに至て、漸々哲學的思辨に力を盡くし、終には三藏中の第三藏即ち論藏の如き重に哲學的論辯を以て充滿せる經書の現出するに至れり。

(四) 佛教の哲學は宇宙萬有を以て無始無終のものとし、其の始源は解す可からずとす。

(五) 宇宙の萬象は因果必然の理法に從ひて出沒運行す。宇宙間至る所として因果の理法の達せざるなく、自由の運動なるもの存在するなし。故に人間の如きも、他の事物と異ならずして外部の強迫的原因によりて支配され、決して自由に行動するものに非らず。宛も水車が水の力によりて廻轉すると同じ。

(六) 此の盲目なる無感覺なる原因即ち力は有情物の出現を率起す。故に其の活動は害惡なり。故に各實在物の職務は出來る丈力を盡くして其活動に反抗し、又之を鎮壓するにあり。

(七) 幸福の最とも大なる狀態は絶對的不動の狀態なり。不幸の最とも大なるものは生るゝて ふ事なり。

(八) 一切有情物は其の作業に應じて一より他に轉生す。善人の靈は高等なる生に轉じ、惡人の靈は下等なる生に轉ず。之れ轉生輪廻の説と稱せらるゝものなり。

(九) 有情物の全傾向は其の本元即ち涅槃に還沒するにあり。涅槃に於て各有情物は靜息と絶對的寂靜を得。

(十) 涅槃は種々に解せらるゝと雖ども、其眞實義は未だ之を攪亂する動なくして寂然恬靜なる宇宙萬有原始の狀態を表はせるものなり。

(十一) 故に佛教は其究極の哲理に於ては無神教なり。

(十二) 此の普遍的吸收の觀念は婆羅門教より借りたるものなり。されど婆羅門教は韋陀の多神教の制裁の下にあるを以て無神論に達着するに至ざりしと雖ども、佛教は毫も之れが制裁を蒙らず、否な却て異端視せられしし當代の哲學に向て同情を表せし程なるを以て、遂に婆羅門教の正反對、絶對的無神論に歸着せしものなり。

今本章を終るに先ちて、更に二事の考究す可きものあり。第一は一切他の哲學宗教の諸系統と佛

教の關係、第二は人性の發達上に於けるかゝる諸系統の影響。

第一の點に關しては、余輩は既に佛教の教義教説のうちにて、他國の哲學宗教の諸系統に類似するものを摘指せり。リス、ダヴィド氏の如き佛教を稱讃する人すら、其の哲學的思辨の最多數は婆羅門教より借り入れたるものなる事を許容せり。否な氏は更に進んで、其等の觀念を借り入るゝに於て佛教は正しくなさる可き度を超へては之を布衍せざりきと云へり。たとひ余輩はダヴィド氏だけ進まざるも、尚は佛教は一の哲學的系体の創設を以て、自から誇ること能はずてふ眞理は毫も其の價値を毀損されざるなり。其の哲學上の行路に於ては諸事萬般既に婆羅門教の備へおきしものを採用せしに過ぎず。げに佛教の哲學は諸神てふ觀念を洗滌したる婆羅門教に外ならざるなり。

更に上文に講説せし佛教哲學の諸説を採て他國の哲學宗教中之に類似するものを求むるに、余輩は諸國の宗教哲學中に於て佛教説く處の諸教義に對應するものゝ既に存在することを見るなり。因果説は殆ど希臘歴史の初めより宣説せらるゝもの、又轉生説は或る學者が人類普通の思想なりと云ひし底のものなり。而して涅槃説も亦既に述べし如く、印度及び多くの他の諸國に於て既に佛教に先ちて存在せしものなり。然らば佛教は吾人の尊重讃稱するに足らざるものか。然り豈然らんや。佛教の天賦性は全く矛盾撞着せる諸觀解を採て、之を超人間的に融化妙合して而して世に類するものなき一新系統を産生せしに在り。世に現はれし哲學宗教の系統は多し。されど佛教の如く極端なる無神論と深厚なる宗教的感情を和合せしもの他に之れあるか。佛教は實に此の普道の人間以上の力を要する至難なる事業を成就せり。一方に於ては冷かにして同情の温氣なく、尊にして人情の切なる祈禱を聞くの耳なき、涅槃を見ると共に、又他方に於ては深大なる人間の悲痛と苦惱の激發するを見る。此く撞着せる二事を融化妙合して一全体を形成せる佛教は吾人の讃嘆をかふ能はざるか。總て他の系統は只廣大なる問題の一邊を解するに止まる。されど佛教は總ての邊を觀視し、總ての部分を精査し、而して驚嘆す可き推理の一鏈鎖を産出せり。一理以て宇内の諸法を解し去らんとせしハーバート、スペンサーもカントもプラトーもアリストートルも、佛教の哲學に於て解説せられたる問題の十分の一部分だに能く處置する能はざりしならん。又其天才如何に廣大にして、其思想如何に深邃なる哲學者と雖ども、佛陀の聚集し又之れが上に君臨せし奉信者、信徒ほど巨多の奉信者を得たる哲學者は一人もあらざるなり。否な佛教徒の百分の一の奉信者をさへ得たるものあらざるなり。タトヒ他の哲學宗教の如く、佛教も亦他日其の信徒に捨てられ、世に顧られざるに至るときあらんも、尚は釋迦牟尼の宗教が其觀想に於て其の異説和合の方法に於て又其の教會組織に於て、煥發する一種の殊光特色は決して消滅するの期なかる可し。

余輩の今研究せんと欲する第二の點は人類一般の進歩上に於けるかゝる觀念の影響なり。前章に於ては一の宗教として佛教が其の受け容れられたる國民の上に及ぼしし全般の影響を論せり而して茲には人類の上に於けるかゝる諸般の觀念の影響を論せんと欲するなり。單に宗教として佛教の影響を論せんとするに非らず。余輩は又、上文に於ては哲學的諸説の一連鎖として佛教を論したれども、一の宗教として其等の諸觀念が實際に施さるゝ狀態を論せしには非らず。さて諸君の熟知せらるゝ如く今日及び今より前幾世紀間にも實際に宣説され説教され又修行さるゝ佛教は、

書籍の上に現はるゝ抽象的佛教とは全く異なれり。蓋し人心は常に多少具象的の或物を熱望するなり。如何なる哲學系統と雖ども、單に其の乾燥無味なる骨格のみにては、世人の心を牽く能はざるものなり。人間は單に腦髓のみにて成立するものにあらず、又心情をも有するものなり。故に人間は冷やかなる哲學の骨の上に更に暖たかき温氣を具したる肉をも要するなり。其の祈をきき、願に答ふる或物を要するなり。佛教獨り例外たるを得んや。然り彼も例外たるを得ざりしなり。若し佛教は因果論業感論及び涅槃說等の如き乾燥無味なる哲理を宣說するのみに止らんか、到底二十四世紀間以上も四億以上の生靈の尊崇をかふ能はざりしならん。彼は其の古き殼を脫けいで、人情の需要に應せざる可からざりしなり其の原始の時代にありては乞食と遁世を旨とせし宗教が、今や壯麗精緻なる儀式典禮を擧行するに至れり。もと物質不存在說と感覺の眩惑說を基礎とせし宗教が、今や突兀として雲漢を摩し、燦然として人目を眩せしむる輪奐の美を具へたる寺塔を建設するに至れり。之を要するに佛教は、他の諸宗教が多くの信徒を作り又作りたる上は彼等が宗教的本能性を滿足せしめん爲めに用ゐる、諸般の事物を一切利用するに至れりと云ふ可し。儀式禮典を制定するとか、寺塔を建設するとか云ふが如き觀念は、佛教の本性に於ては全く存せざる所のものなりと雖ども、彼は人情の切なる希望に迫られて其等の觀念を起さざるを得ざりしなり。今全く其等の觀念を捨て、論藏の哲學的佛教に還らんか、是れ自ら其の破滅を招くものなりと云はざる可からず。さて上來論述する所によりて、余輩は他の哲學諸系統を研究せし時學び得たる一教訓は、又茲にも存するを見るなり。何をか該教訓と云ふ、曰く人間は只乾燥なる哲理のみにて生活する能はず、其の心靈の諸能力をして更に健全に發達せしめんが爲めに、暖たゝかき或物を要すと云ふ事實是れなり。若し其等の理說をとつて其の本体の儘に、毫も斟酌を加へずして、信徒日常の行爲に適用せば其の生ずる結果の如何なる可きかは茲に之を詳述すること能はずと雖ども左に二三の例を擧げて以て其の結果の一般を示さん。先つ轉生說を撿査せよ。此の理說の最とも究極なる論理的斷結に達し、又其の斷結の人民日常の生活に適用されたるは埃及なること諸君の熟知せらるゝ處なり。こゝに轉生說は種々奇怪なる又人情に反する弊習陋慣を生せしなり。古代の希臘人が始めて彼等に接せしとき、かく文化に進める國民か、何故にさる弊習陋慣を保持するかを解する能はずして、大に之を怪み訝かりたりきと云ふ。或る希臘人は嘲弄的に云へりき。「埃及人よ、汝等の神祇は林苑の中に發生す」と。

又一切有情物は本來に苦腦を有す、其の存在の續く限りは之を脫することを能はず、故に其存在を絕滅すること早ければ早きだけ幸なりと云ふ說に就ても然り。若しかゝる理說が嚴正に實行されんか。人類は一日の中に皆な悉く自殺し果つるならん。是れ實に一切人間の希望と進步の根本を破壞する觀念なり。されど誰れかかゝる觀念を嚴守せしものぞ。佛教徒はかゝる教義を有するが故に其の生命を輕するか。彼等は幼少の時より人生を以て神の惠與と信じ、之を尊び、之を愛し又之を改善する方法あらば總て試みざる可からずと信ずる基習教徒よりも人生を見ること重大ならざるか。然り豈然らんや。彼等は却て佛陀決してかゝる自殺的行爲を教へしことなしと主唱せん。

其他佛教の哲學的理說に就ては大概上文と同趣の批評を下すを得可し。然り而して佛教は哲學の外に尙ほ或物を有することを忘る可からず。其哲學的系統は、其の最終の產生物なり。彼は其の

他に尙は景慕す可き一物を有するなり。其の一物とは何ぞや。倫理的教説是れなり。實に彼が最美の點は、其初め大教祖が枯死せる人類に與へたる優秀なる道德的訓言に存するなり。人類全体は此の教に向て大に悉達多太子に負ふ所あるを忘る可からざるなり。余は今後世の佛教徒の沈溺せし乾燥無味なる又一點の景慕す可きものなき哲學的理説を觀察し了りて、其の最美なる生命注入的なる道德的教訓を味ふに至らんことを大に樂むなり。

第六章　倫理の一系統として佛教を論ず。

余は本題に入るに先だちて、左の二點に關する管見を開陳しおかんと欲す。(一)倫理又は道德(エシックス　モラリチー)てふ語の意義、(二)道德と宗教の關係。

(一)倫理又道德てふ語に依て余輩の意味する所。倫理即ち英語の「エシックス」は希臘語の「エトス」より來れるものにして、其本義は單に風俗習慣等を意味するもの、其内には善惡の觀念を含みおらず。又道德即ち「モーラル」てふ語は希臘語の「エトス」に對應する羅甸語にして其本義宛んど同一なり。かく此二語は共に善惡の觀念を含まずと雖ども、尙ほ其の行爲には善又は惡の資を具する實在物の風俗習慣を意味するなり。此は該二語の實際に用ひらるゝ有樣によりて、知らる。吾人は決して動物の働作を話すに此語を用ひす。吾人は決して道德の標準を牛馬の働作に適用せず。否な人間の行爲に向てすら、總ての行爲に此標準を適用するに非らず。飲食、歩行喫烟等の生理的行爲は直接に道德と關係せず。故に道德又は倫理てふ語の適用さるゝは只道德法によりて判斷され得る行爲のみなり。されば道德法によりて判斷さるゝ行爲とは如何なる行爲なるか。之れ人間行爲の全体に非らず。人間の風俗、習慣、及び一切の所行は悉皆道德の範圍内にあるに非らず。余輩の見る處によれば、道德法は只道德又は不道德の資を具する行爲に關係するのみ。更に明亮に云ひ表さば、道德法の支配する範圍は適當に善又は惡、德又は不德として分類され得る行爲に限れり。或る哲學者は人間一切の行爲を道德的行爲なる目の下に編入せんと勤む。されど若しかはぞに道德的行爲の範圍を推し擴めんか、吾人は動物の行爲をも其の中に入らしめ、

而して隨て又道德法の支配を彼等の上にも及ぼさざる可からざるに至る可し。古代の羅馬人をして、人間の行爲を判斷する爲めに制定されたる法律を以て下等動物の行爲にまで適用するに至らしめしことあるは、蓋し道德法の範圍をかくの如く廣きものと誤解せしによるならん。古代の記錄中には羅馬府の市民が、他の動物を殺したるの故を以て牛を死刑に處せしことあるを見る。

上文に於ては道德的行爲と非道德的行爲の別を說きたるが、更に道德的行爲と不道德的行爲の別をも說ざる可からず。今此の三種の行爲を例解せんに、爰に中飯を喫する人あり、又强盜を働かんとて人を殺すものあり、又他人の難澁を、見て之を助くる人ありと假定せよ。道德法に關して云ふ上は、第一の人の行爲は非道德的なりと云はざる可からず。即ち善とも惡とも稱す可からざる行爲なり。第二の人の行爲は不道德的なり。即ち道德法を破れる行爲なり。而して第三の人の行爲は道德的なり、善行なり。即ち道德法に適合せる行爲なり。されど此の世界にありては、德不德の二者は常に人心に於て連伴するが故に、倫理學者は通例此二種の行爲の區別を別々に取扱はす。されど本論に於ては此二者を混合して一系体となすは好ましからず。蓋し茲には余は全く不道德的行爲の起源、動機及び過程を撿究せず、只道德的行爲をのみ撿究せんと欲すればなり。」然らば道德的行爲を成すものは何ぞ。余輩は上文に於て總て善行は道德的行爲てふ目の下に來ると云へり。されど道德法及び總て之に屬する行爲は善行と其の範圍同一なるか。即ち道德的行爲と善行とは異名同物なるか。余輩は既に上文に於て他人の困難辛苦を救助するは善行にして、又道德的行爲なりと云へり。然らば余輩若し他人の困難辛苦を救助せざれば不道德的行爲を犯したるか。言を換へて明かに云はゝ、茲に甚だ貧窮なる人ありて余に救助を懇願せしが、余は或る理由より或は別段に理由ととてはなくして彼が懇願を拒絕せり。然るに余が傍にありし人之をきゝて大に彼の人を憐み、喜んで金圓物品を惠與したりと假定せよ。然らは余の行爲は不道德的にして、傍人の行爲は道德的なるか。余は不道德的行爲を犯せるの罪を受く可きか。然り豈然らんや、余は不道德を以て余を責むる倫理學者あらざる可しと思惟するなり。故に余輩は、一切の善行は道德法の下に來らずと云ひ得るなり。言を換へて曰はゝ、一切の道德的行爲は善行と其の廣汎を同ふするものに非らずと云ひ得るなり。然らば孰れの行爲は道德的なるか。余は茲に之を詳論するの暇なし。只單に左の言を以て之に答へん。曰く道德的行爲とは人間が爲さざる可からざる、又行はざる可からざる行爲なり。ヤ、哲學的の言語を以て之を表さは、總て義務より發する行爲は道德的なり。されば義務は吾人の道德性否な寧ろ道德的行爲の源泉なり。今其の性質善にして而して義務の範圍外、否な寧ろ道德の範圍外にある行爲の存在することは疑ふ能はす。約束を守りて借金を返濟するが如き種類の行爲は總て道德の範圍內に屬す。されど巨大なる金銀勞力を投じて慈善的事業に奔走する人々の行爲は如何なる目の下に分類す可きか。道德的にして義務より發する行爲てふ目の下に入る可きか。若し然らば慈善的事業に關係せざる人々は一切不道德的なる人々と稱せざる可からす。余輩若しかゝる論法に從はんか人類の大部分は不道德を以て責めらる可し。殆んど總ての人類は不道德のものとなる可し。

余は上來述ぶる所によりて、人間社會に於ける道德的行爲の範圍を明らめ得たりと信ず。故に今第二點に移る可し。

(二)道德と宗敎の關係は如何。上文に於て道德の解釋を述べしに倣ひて茲に先づ、宗敎の解釋を

述ぶるは適當の順序ならん。されど時間の都合によりて之をなす能はず。又余輩は宗教の性質及び其の須要等に就ては既に道德と非道德及び不道德との間の隱蔽なる區別よりも多く知識しおれり。

さて道德と宗教の二者は共に親密に連結するものなることは、今や疑ふ可からず。又此の言の眞實を示さんが爲めに證據を排列するは今や無用の冗作となれり。夫れ此の二者究竟の目的とする所は同一なるなり。即ち人類の現未兩世の狀態を高尙にし改善するにあるなり。不道德を奬勵する宗教は一瞬間だに存在する能はざる可し。一切宗教は互に如何に完全に彼等は善と稱せらるゝ道德的情操に感染するかを示さんと競ふ。但し世界は汎し、宗教は多し內には慘刻なる不道德なる行爲を準裁するものなきに非らず。されど尙ほ余輩は熟知す。總てかゝる行爲も其の旨とする所は善良なる志望を成滿せんとするに在るを。彼等は其等の行爲を以て目的とするに非らず。只其の目的を達せんが爲めの方便とするに過ぎざるなり。故に余輩はさる行爲をなす人々を憐まずんばあらず。余輩は又熟知す。無智は屢々慘刻なる暴行の父たることあるを。されば余輩はかゝる行爲を判斷するには其目的によらざる可からず、行爲其物を以て直ちに判斷を下す可からず。とは雖ども、其の目的さへ善なれば、行爲の如何は敢て問ふ所に非ずと云ふに非らざるは勿論なり。余は人身御供の如き儀式に向ても、其の所行は如何に慘刻亂暴極れりと雖ども、其の目的は良心の呵責を鎭め、理想の神怒を和ぐるにあるを以て、決して之を責む可からずと云ふに非らず。されど余輩のなす可き事は、徒に之を責めんより、寧ろかゝる處行をなす人々に向て其の所行の慘刻にして人情に戾れることを知らしめ、且つ其の善良なる目的を達するにはよろしく更に好適なる高尙なる精神的道德的方法即ち讖悔祈禱等を用ゆ可きことを懇々說示し諄々敎訓するにありと云ふなり。

上來論述するが如く、道德宗教の二者は最とも親密に一致連結して以て、正義、善德の進行を誘導するものとせば、然らば此の目的を成滿するに於て、右二者が各々如何なる事をなすや、各々如何なる力を與ふるや道德の力は宗教の力に勝るか又之に反して宗教の力は道德の力に勝るかと云ふは次に起り來る問題なり。此問題に向て完全なる滿足なる答解を與ふるは甚だ難し。されど余の見る所によれば此の二者の連結實に親密にして、之を分たんと企圖するは全體の調和的組織に向て不幸なる結果を生ずるに至らん。之れ恰も右手の用を知らんと欲して、左手の用を止むるが如く、又手足の用を區別せんと欲して、之を身體より切りはなすが如し。さて今歷史に遡りて此問題を研究するに先づ、古代にありては各事各物皆な悉く宗教の奴婢たりき。道德も亦此の運命を免るゝこと能はざりき。然るに中世紀に至りて之れが反動の現起するに及んでは、世論一變して又他の一邊に走り、遂に宗教も道德の奴婢たるの運命を受くるに至れり。　大哲學家と稱せらるゝ人々の中にてカントは、人間は道德のみにて充分なり、宗教は無用の冗物なりとの觀解を呈出せし最初の人なり。彼が觀解の大略は左の如し。曰はく、吾人若し道德法を嚴守せば、夫れにて神の意志は成滿さるゝなり。されば道德法さへ存在すれば宗教は何の用もなきものとなる可し。蓋し宗教の最大目的は神の意志を成滿するにあるなればなりと。彼は更に論じて曰はく、神は愛の目的物に非らず。余輩は神を愛すと云ひ、又神を以て愛と同情の目的物と思考する時は、之れ無限物をして一有限物となすなり。されど、吾人道德法を嚴守成滿するによりて、神の意志

を成滿するときは之れ最高最大の宗教を奉するものと云ふ可し、豈に別に宗教なるものゝ存在を要せんやと。尙ほ彼が觀解の詳細を知らんと欲する人は、「純理の制限内に於ける宗教」と題する彼の著作を一讀せられよ。終りに彼自身の言を擧げんに。曰はく、道德的訓令と異なれる律法的なる宗教的行爲或は儀式によりて神の愛寵を求むるは、無功の業なり。眞實なる宗教的精神は神聖なる訓令として一切吾人の義務を認識するにありと。

カントの宣說せし道德哲學を研究するに於て、余輩は直ちに彼は道德法の範圍を吾人の快よく受容し得るよりも汎く推し廣めしことを見るなり。また彼は道德法を以て神聖なる命令と思惟す可しと宣言することによりて、彼自から道德法及び倫理的義務は更に高尙なる或る物、即ち彼等の有するよりも更に高尙なる或動機を要する事を認識せるを見る。げに今日進化論を奉ずる哲學者にしてカントの觀解を受容するものは一人もあらざる可し。若し夫れ道德なるものは、カントの說きし如く義務の無上命令の上に基くものならば、其の義務の成滿をして容易ならしむる爲めに訴ふ可き所を求むるの必要なし。義務は成滿さるゝを要し、而して吾人は其の神より來ると何處より來ると問はず、之を成滿せざる可からざるなり。人類は各義務を以て神より來れるものと思惟せざる可からずと云ふカントの言は、義務の内に弱き所あるを示せるものなり。恐くはカントほど義務の勢力の上に重目を置きて道德を論せしものはあらざる可し。されど吾人は義務其自身のみにては其れ自身の律法を强行すること能はざる境に至るときは、義務よりも更に高尙なる或物の存在することを、認信せざるを得ず。道德的義務の達すること能はざる此の高等なる境、余は之を愛の境と呼ぶなり。此の愛の境は廣大無邊なり。其の前にありては道德は只一小物に過ぎず。約翰傳に曰はく、「人その友の爲めに己れの命を捐るは此より大なる愛はなし」と。爰に吾人は道德的義務の如何なる形態よりも高等なる事物の一狀態を見るなり。他人の爲めに己が命を捐てよと命ずるが如き道德は何處にも存在せざる可し。若しカントは此の觀念をも亦倫理法の内に含ましむるものならは余輩は只カントは道德をして宗教の範域を横領せしめたりと云ひて止まんのみ。

今余輩は人間心靈力の發達上最とも强大なる二勢力の間に存する差違を檢したり。其の檢査の結果を概說すれば時の點に於ては道德は第一に立てり。之れ吾人の同胞に向て、又は神に向て發する吾人の義務の觀念の基礎なればなり。人間社會に於ける貴重善良なる物は一切其の上に立てり。而して宗教即ち更に精練なる高尙なる形態のものは之れに次で來る。其の性質に於ては、宗教は道德よりも勝れ又美はしきものなれども、尙ほ上文に述べし如く道德とは最とも親密に關係して之を分離せば互に其の存在を毀損するなり。一箇人に於てか、又は國民に於てか、此の二者の最とも親密に一致提携して進行せる所に吾人は人類の最とも高尙なる最とも高等なる形態を見るなり。二者孰れを欠きても吾人は人間の眞面目を發揮し、人間最高の理想に臻達すること能はざるなり。

余輩は今本題に入るに先だちて、一言諸君に法意しおかざる可からざるものあり。即ち宗教の倫理學なるものは哲學者の手になりし倫理學の如く、一定の論理法によりて道德に關する一切の問題を組織的に論述せるものに非らざること是れなり。佛教にありても、基督教にありても、又回々教にありても、其の教祖は一定の論理法によりて道德問題を解說せしに非らず。彼等が道德的

確言又は倫理的金言は彼等が遺書中此所彼所に散在するなり。故に其等の金言確言を此所彼所より蒐集して之を組織的に整理し、一見以て其所説をして明亮ならしむるは之れ學者の職なり。然り而して今此の方法を用ひて、佛教の倫理學を研究するに當ては余輩は他の宗教に向てよりは寧ろ好便利を感ず。蓋し佛陀及び其直弟子の言にして今日に傳はれるものは多くは道德に關するものなればなり。佛陀其の生時に於て弟子衆に宣説せし教説の吾人に傳はれるものは、多くは道德性に關するものなるなり。又三藏の第一藏殊に「ヅハムマ、パダ」經は道德法及び訓言を結集せるものなり。余が之れより佛教の道德の大概を講述せんとするは、即ち其等の書によるなり。

既に上文にも述べし如く、余は今荒寥なる佛教の哲學を去りて、此等の昂憤心靈的教訓に移るに當ては、宛も廣茫たる砂漠を去りて樹木翁鬱し、清泉湧出する林苑に入るが如き感あるなり。恐くは諸君も亦然らん。

余は前章に於て云へり。佛教の全系統は整合せる一全体なりと。即ち其の形而上學と宇宙論は其の人間論と不可離的に結着し、又其の人間論は其の道德説と密着せり。而して總て此等の理説は相和合して涅槃説及び一切萬物は究竟宇宙的陶に還沒すと云ふ説に達着せる壯大なる一全系統を成せり。

之れより其の聖道中に啓示さるゝ倫理説の一班を講説す可し。さて此の聖道は有德有智なる生活の道なり。而して八正道、四果向を以て成立す。先づ八聖道の名目を示し、次に四果向を説かん。

八聖道分、

(一) 正　見　　譯者曰はく、增一阿含經四諦品（大藏經、昃帙第二冊）には之を八品道と稱し、其目を正見、正治、正語、正方便、正命、正業、五念、正定とし、轉法輪經（大藏經辰帙第六冊）には又、正見、正思、正言、正行、正命、正治、正定とせり。其の他經によりて譯語は多少異なるが如し。又八正道の解釋は大抵四諦の解釋と連結して諸經中に散見するが如し。但し特に之を解説せるものなきにも非らず。大藏經辰帙第六冊には佛説八正道經あり、就て見る可し。

(二) 正思惟
(三) 正　語
(四) 正　業
(五) 正精進
(六) 正　定
(七) 正　念
(八) 正　命

四果向、

(一) 初果向又は預流向、（譯者曰預流向は又至流向、入流向とも云ふ。本文は阿毘達磨俱舍論の譯に從へり。）
(二) 第二果向又は一來向、
(三) 第三果向又は不還向、
(四) 第四果向又は阿羅漢向、

（譯者曰預流向は又至流向、入流向とも云ふ。本文は阿毘達磨俱舍論の譯に從へり。）

（譯者曰、四向四果説は、阿毘達磨俱舍論、分別聖賢品（大藏經第十冊）同論釋、分別聖道果第一冊（冬夔帙）第一冊（冬夔帙）四聖諦所攝（收帙第九冊）阿毘曇論、問聖諦品第四（秋帙第二冊）

譯者曰預流向に至りたる人は直に須陀洹預流果なり

(一)初果向即ち預流向に至るには(一)善を友とし、(二)法を聽聞し(三)觀念を正ふし或は(四)德を修せざる可からず該向に至らざる人は罪、恨及び不淨の惡習に因て智見正しからずされど如上の方法によりて四諦を證得せば該向に入る。而して該向に入たる人々は我執の念佛法を疑訝するの念及行法の功德を信ずる迷より脫離す「ヅハムマ、パダ」經に曰はく

轉輪王の聖位に陞るよりも、天界に昇るよりも、一切諸世界の王たるよりも初向（フルト、オブ、ゼ、ファースト、パッス）の果を得るは更に幸福なり。（第百七十八句）有德なる人は此の世に於て幸福なり。又來世に於て幸福なり。彼

は現未二世に於て幸福なり。彼は其のなしたる善業を思ふ時に幸福なり。彼は善道を歩むときに更に幸福なり。（第十八句）

されど「ヅハムマ、パダ」經中の多くの部分に於ては所謂道なるものは殆んど總ての宗教の說もる所の普通の道なり。而して佛教の所謂道なるものには二種あり。

辱す可からざることを辱じ辱す可きことを辱しざる人々、かゝる人々は邪見を懷きて惡道に入る。懼る可からざる時に懼れ、懼る可き時に懼れざる人々、かゝる人々は邪見を懷きて惡道に入る。禁せらる可きものなき時に禁じ、禁せらん可き物あるときに禁せざる人々、かゝる人々は邪見を懷きて邪道に入る禁せられたるものを禁せられたりと知り。又禁せられたらざるものを禁せられたらずと知る人々、かゝる人々は正見を懷きて善道に入る。（第三百十六句より第三百十九句に至る）

（譯者曰漢語にて向と譯せるもの、英語にては「パス」と譯せり和譯して道と云ふ。故に下文の道と云ふは向と同義なりと察し玉へ。）

（二）第二果向即ち一來向に至れる人は直に斯陀含果即一來果を得（譯者曰く、斯陀含は略語にして詳しくは「サクリダーガーミン」と讀む可し。）入流向に於て疑惑、我及行法の迷執を脫離したる人々は本向に至て憎惡、我執及び貪慾を極小度に減却す。

初果向と第二果向の差違は甚大なり。初果道に於ては人々は佛法に對する疑惑我及び行法の迷執より脫離すと云ふ。然るに第二果道に於て余輩は再び我執の記戒せらるゝを見る。又佛法に對する疑惑の記載さるゝによりて當代の人民が佛陀の權興に就て大に疑惑せしものなることを察知せらる又初果及び第二果の二向に於て共に我執の擧げらるゝを見る。之れ佛陀は此の點に就て大に勤めし所あるを示せるものと思惟せらる。蓋し佛陀出世の時代に當ては、婆羅門教は大に腐敗を極め、隨て國民の風紀は亂れ、道德は頹り、人々只私利私慾にのみ齷齪たりしなり。されば佛陀必生の力を極めて、我執を斷滅せしめんとせしも理なきにあらざるなり。但し人類は果して此の教に順從し、我執を滅するものなるや否やは斷言し難しと雖ども、とにかく此の教には一利一害あるなり。即ち一方に於ては自利私慾の念を滅殺するの益ありと雖ども、又他の一方に於ては、一擊して人間活動力の源泉を乾涸せしむるの害あり。之れ人間の心をして常に寂莫荒寥たる墳墓を思はしめ、毫も光明燦然たる希望を起さゝらしむるに至る。慈悲愛憐自克献身の原教たる佛教が悲哀失望の宗教と化せしは即ち爰に基因するなり。人間の靈魂は更に高尙なる或物を要す。恰も兩翼を切り去られたる鷲の如く、身は地上にありと雖ども、常に再び高空に上りて自由に翱翔せんと欲するなり。

（三）第三果向即不還向に至りたる人は直に阿那含果即不還果を得（譯者曰、阿那含正しくは「アナーガーミン」と讀む可し。）此の位に至りたる人は全く貪欲及び瞋恚の餘臭を絕滅するなり。

（四）第四果向即阿羅漢向に至りたる人は直に阿羅漢果を得（譯者曰阿羅漢正しくは「アルハト」と讀む可し。佛果、殺賊、不生、應供等の譯あり。）是れ人間の達し得る最高果、最大完全なり。此果を得たる人は正智見によりて上三向に於て脫離したる五惑の外更に現世愛生天欲及び驕慢、自正、無明等を悉皆解脫するなり。

阿羅漢果を得たる人は困難なる谷間を經たる後、又一歩誤れば千仞の底に墮ちて身を粉碎する嶮崖の絕端に臨みたる時卒然身を翻して高山の頂に登り一切の危險と困難一切の悲慘と嘆息を免れたる後大安心を以て過きてし險路、堪へこし危難を顧み得る旅人の如し。彼は其位より無常轉變の此の世の一切事物を觀察し又其眞値を見る。彼は一切浮世の汚穢の上に立ち、如何なるものゝ誘

惑をも蒙らず。彼は一切の忘念邪思を斐除して、只己れの爲めには正願を立て、他人に向ては慈悲、尊敬靈愛を起す。迷兜多經に曰く、

己が生命を失はんとしても、其の子其のひとり子を保護する慈母の如く、阿羅漢をして一切衆生の間に無量の慈念を修せしめよ。阿羅漢をして一切無差別の感を以て上下四方一切世界に無量無限の慈念を修せしめよ。人をして其の覺醒の間は立つときも歩むときも坐するときも、臥するときも常に確乎として此の心情の狀態に止らしめよ。此の心情の狀態は世界中最良最善のものなり。

さて佛教は嚴刻なる斷慾主義を以て有德者の生活の最大理想となさんとせし唯一の宗教に非らず。婆羅門教瑜伽派の信徒は今日も尙は嚴刻なる苦行を勤修することは既に前卷に說けり。早代の基督教會に於ても此の主義は暫時行はれたりき。されど印度に於ての如く刻に達せざりき。上來說述せる所は正道の積極的方面即ち入道者の勤修す可き箇條なり。次に消極的方面即ち彼等の犯す可からざる箇條あり。夫れ四向の位に至れる人々は十惑即ち十纏を斷せざる可からず。而して其の十纏とは

(一) 我執
(二) 疑佛及び法を疑ふこと
(三) 行執儀式及び苦行の功德を信ずること
(四) 貪慾肉体上の慾
(五) 瞋恚
(六) 現世愛
(七) 生天欲
(八) 驕慢
(九) 自正す自から己を以て正しとなすこと、
(十) 無明

全く前五纏を斷滅するときに阿羅漢となりて第四果向に至り、後五纏を斷滅する時は阿世伽となりて一切の迷執及び一切の憂愁を脫解す。

リス、ダヴィド氏曰く、佛教徒の書中に充滿せる心情の此狀態、第四向の果、阿羅漢、即ち佛教徒の信仰によれば完全なる人間、の狀態に對する嘆稱讚美の言句を集めば大卷の書を充たすに難からざる可し。「ヅハムマ、パダ」經に曰く、

正道を修了し一切憂愁(ソルロー)を出離し、自から四周の事物より脫解し、一切の繫縛を斷絕したる其人(阿羅漢)には、最早一切の憂愁(グリーフ)は消滅して其痕跡を止めず。御者によく馴されたる馬の如く、感覺の靜定せる人(阿羅漢)、驕慢、肉慾、生慾、及び無明の汚穢を脫離したる人、其人は諸天すら之を羨む。行狀正しきかゝる人は大地の如く動搖せず、城門の柱の如く動かず、靜溫なる湖池の如く亂れず。かゝる人は輪廻の羈を脫せり。かく平靜となり、智慧によりて自由となれる人の心は平靜なり、言行は平靜なり。

又羅多那經に曰はく、

確固たる心を以て邪念より出離し、よく佛の敎を修練せる人々、彼等は第四向の果を得、又

自から其の神食中に沈みて償なしに受け、又涅槃の果を樂む。彼等の古き業は盡きて新き業は生せず。彼等の心情は未來の世活を望むの念より出離せり。彼等が存在の原因は破毀せられ、而して新しき執念は彼等の心中に湧出せず。賢明なる彼等は此の燈火の如くに消えたり。

又三摩波利部伐闍尼耶經に曰はく、

智見によりて邪念に勝ち、其の目よりは妄念の雲晴れよく佛の法を修練せる比久は自からよく行爲す。而して執着を離れ、涅槃の智識に熟せる其の比久は涅槃に達せり。

以上陳述する所は其の形而上學の全組織と連結せる佛教倫理說の概略なり。之を論ずるは正しく前章の範圍に屬すと雖ども、余は明亮に佛教の倫理說を說示せんと欲するが故に之を本章まで殘したるなり。さて上來說述せる所によりて、佛教道德法の全班の觀念は、古代に於て希臘人の有せし一班の道德法の觀念、又は近世に於て基督教の感化の下に、或は獨立なる科學的方法によりて、發達せる倫理學の主唱する所の一班の道德法の觀念とは異なれるものなることを知らるゝならん。佛教にありては道德法の大体の旨趣とする所は或る目的を達する爲め、即ち我の永續を斷滅する爲めの、一方便たるに在り。極言せば佛教には全く道德法なく、有る所のものは寧ろ或る物質的行動を成ずる爲め、即ち箇人的存在を斷滅する爲めに組織せられたる物質法なり。夫れ道德的行爲なるものは其の結果の如何に關係なく義務によりて命せらるゝ行爲なり。例へば今「虛言を告ぐる勿れ」と云ふ戒言を實行すると假定せよ。茲に吾人の義務は毫も其の結果の如何に關係なく全力を盡して之を斷行するにあり。されど若し佛教の倫理說に從はんか吾人はかく云ふ能はざるなり。余輩をして暫時此の「虛言を告ぐる勿れ」と云ふ戒言を考へしめよ。佛教徒の倫理的概念に從へば總て戒言は靈魂の存在を滅絕するものならざる可からず。然るに此戒言は却て之を永續せしむるものなり。されば忠實なる佛教徒の戒言に對する狀態は如何ならんか。實に彼若し佛教の精神眞意に從はんか、彼は虛僞及び誠實に關する道德的觀念を變更せざる可からず。人間行爲の一切變化の內に不變不動なりと思惟せらるゝ倫理的法則及び義務は彼が靈魂の熱求する理想に達することをいよ〳〵迅速ならしむる樣に變更されざる可からず。

余輩は寧ろカント流の倫理說に從ひ其の結果の如何に介心せざる可し。カント流の倫理說は義務を以て道德法の根底となし、不可動の基礎となす。又余輩は義務の嚴正道に順服し、其結果は吾人をして不幸と罪惡の爭鬪を永續せしむるか又は究極の大勝利を得せしむるか、其の孰れの結果に至らしむるかは敢て問はざる可し。

今佛教の倫理說が私慾主義なりとか、自利主義なりとか云ふ批評を蒙るは實に爰にあるなり。其の究竟の目的か自利にあるを以て即ち涅槃の樂果を得んとするにあるを以て、然か評せらるゝなり。

英國の大神學者哲學者たるウイリヤム、パレーは嘗て之れと同主義の倫理說を唱道せり。ヲヨン、スチワード、ミル氏が主唱せし功利說も亦之れに類せり。爰に余輩は義務と實利の異名同義とせらるゝを見る。爰に「誠直は最良の政略なり」哲學の極端に推到せらるゝを見る。されど誠實は最良の政略ならざる場合實に多し、否な一切政略中最とも苦難なる政略なり。而も尙ほ余輩は之れを順奉す。是れ義務なればなり。カント絕叫して曰く「ア、義務よ。驚嘆す可き思想かな。彼は諂媚によりて又脅迫によりて動かず、されど只靈魂に於て自から裸体の律法を保持することによりて働く。而して己自身に向て、よし常に從服ならずとも、常に尊敬を强求す。彼の前にありて

は一切慾念は默然たること唖の如し。タトヒ竊かに反逆を試るも。ァ、義務ト汝の始源は何處にあるか」獨りかゝる基礎の上に立ちてこそ道德法は永久に確乎不動たるを得るなれ。若し彼を次等の位地におき、只或る目的を達する爲めの方便とせんか。其の目的たる如何に、高尚壯大なるも、彼は其の威權を失ひ其の正位を失ひ、漸々衰弱して終に滅亡するに至らん。

第二に其の純想哲學の全系体中に發達されたる佛敎の道德法は、其精神寧ろ薄弱なるに似たり。夫れ道德法なるものは寧ろ强迫的なる可きものなり、蓋し正なるが故なり。然るに佛敎の道德法は其性質消極的たるの弱點を有せり。基督敎の道德否な回々敎の道德すら、激衝的なる强大なる精力を有するなり。但し此の問題に就ては次章釋迦の宗敎を論ずる條下に再論す可し。

佛敎倫理の形而上學的系統の外に、數多の道德的戒律あり。而して其等の戒律は如何なる宗敎又は道德の系統も、毫も佛敎敎理の根本に接觸し又之を受容することなしに、快よく採用し得る所のものなり。先づ第一に注意す可きは八戒なり。

(一) 不殺生戒
(二) 不倫盜戒
(三) 不妄語戒
(四) 不飲酒戒
(五) 不婬戒
(六) 夜中非時食戒、
(七) 花冠戴頭香油塗身戒
(八) 廣高大床戒

右八戒の內にて始めの五戒は佛陀自から制せしものなり。故に佛者は必ず之を守らざる可からず。されど終りの三戒は後世の追加なり。故に嚴正に一切戒律を守らんとする佛者は決して此の三戒をも犯さずと雖も、されど必ずしも之を守らざる可からざるの義務あるに非らず。

又右之積極的戒律に對して十惡なるものあり。十惡とは身三口四意三なり。

身三、
(一) 殺生、 (二) 偸盜、 (三) 邪婬、
口四、
(一) 忘語、 (二) 惡口、 (三) 綺語、 (四) 兩舌、
意三、
(一) 慳貪、 (二) 瞋恚、 (三) 邪見、

此等の諸德に就ては茲に辨說するの要なし。如何に無智なる社會と雖ども總て之を知らざるものなし。既に上文にも述べし如く邪見罪の事は佛敎書中最とも屢々記載せらる。リス、ダヴィド氏曰く「邪見てふ語は只一の特殊なる黨徒、即ち現世、來世、佛陀敎法、道德的原因の結果、生、輪廻、及び現世又は未來の存在等一切此等の諸事を全然否定する人々の黨徒に適用さる」と。吾人は之を見て佛敎の自殺的論法に一驚を喫せざるを得ず。若し總て此等の事項を否定することが一大罪ならば、佛敎は一切罪人中最大なるものと云はざる可からず。蓋し其の形而上學は總て此等の事項を全然否定すればなり。

又日常の生活の義務を說ける經あり。今該經によりて其等の義務に關する佛敎の思想を說示せん。

(一) 親子間の義務

親たるものは

(1) 其の子をして不德に陷らしめざる樣保護せざる可からず。
(2) 德を敎へ又之を訓練せしめざる可からず。
(3) 技藝又は學問を敎へざる可からず。
(4) 好適なる妻又は夫を與へざる可からず。
(5) 家產を讓らざる可からず。

又子たるものは左の如く云はざる可からず。

(1) 吾は吾を給養せし兩親に奉養す可し。
(2) 吾は彼等に負ふ所の家族的義務を盡くす可し。
(3) 吾は彼等の財產を保護す可し。
(4) 吾は彼等の相續者たるに適するものとなる可し。
(5) 彼等の去(死)れるときは、吾は彼等の紀念を祝す可し。

(二) 師弟の義務。

弟子たるものは左の如くにして師に仕へざる可からず。

(1) 彼等の前には起立せざる可からず。
(2) 彼等の用務をたすけざる可からず。
(3) 彼等に從服せざる可からず。
(4) 彼等の必要を供給せざる可からず。
(5) 敎訓を受くるには十分注意せざる可からず。

敎師たるものは左の如くにして弟子に向て其の愛を示さざる可からず。

(1) 一切善事を敎訓すること。
(2) 早く智識を得る樣に敎授すること。
(3) 學藝を授くること。
(4) 彼等が朋友同輩には彼等の事を好く云ふこと。
(5) 彼等を危難より保護すること。

(三) 夫婦間の義務。

夫たるものは左の如くにして其妻を愛す可し。

(1) 尊敬を以て彼に接すること。
(2) 親切を以て彼に接すること。
(3) 彼に誠實なること。
(4) 彼をして他人の尊敬を受くる樣にすること。
(5) 適當なる衣服裝飾を與ふること。

妻たるものは其の愛を夫に示さざる可からず。

(1) 能く家事を整理す可し。
(2) 親族朋友に親切なる可し。
(3) 貞節なる妻たる可し。
(4) 節儉なる家事整理者たる可し。
(5) なす可き一切の事に熟練と勉勵を表はす可し。

(四) 朋友間の義務。

正直なる人は左の如くにして其朋友に接す可し。

(1) 禮物を贈る可し。
(2) 言葉を叮嚀にす可し。
(3) 彼等が利益を增進せしむ可し。
(4) 己が同輩として彼等に接す可し。
(5) 己が幸福を彼等に分つ可し。

朋友たるものは彼に向て彼等の愛情を示さゝる可からず。

(1) 彼不注意なるときは彼か身体を保護す可し。
(2) 彼不注意なるときは彼の財産を保護す可し。
(3) 彼危難に陷れるときは之を助く可し。
(4) 彼不幸に陷れるときは十分に同情を表す可し。
(5) 彼の家族に親切なる可し。

(五) 主僕間の關係。

主人たるものは左の如くにして其の婢僕に安全を與ふ可し。

(1) 彼等の力に應じたる働を課すること。
(2) 適當せる衣食給料を與ふること。
(3) 彼等疾病に罹れるときは親切に待遇すること。
(4) 非時の幸福樂事は彼等にも分與すること。
(5) 時々休日を與ふること。

婢僕たるものは左の如くにして主人に向て其愛情を表はす可し。

(1) 彼の前には起立すること。
(2) 彼よりもおそく休息に就くこと。
(3) 與へらるゝものにて滿足すること。
(4) 喜ばしく完全に働をとること。
(5) 彼の事を善く云ふこと。

(六) 僧俗間の關係。

正直なる人は左の如くにして比丘及び婆羅門に仕ふ可し。

(1) 彼等に對する行爲には愛情を表はすこと。
(2) 彼等に對する言語には愛情を含むこと。
(3) 彼等に對する思想には愛情を藏すること。

(4) 彼等の來訪を受くるときは厚く遇すること。
(5) 彼等に衣食を給すること。

比久及び婆羅門は左の如くにして其の人に向て彼等の愛情を表はす可し。

(1) 不德に陷らざる樣勸戒すること。
(2) 德に進む樣勸告すること。
(3) 法を敎ゆること。
(4) 彼の疑をはらさしむること。
(5) 天國の道を示すこと。

余輩は爰に佛敎の實踐的道德說の大要を說き了れり。此等の六種の戒律を勤修する人々は六方より來る罪業を斷滅するを得と云ふ。總て此等の戒法及び其の果の善良なることは何人も敢て之を否定する能はざる可し。されど予輩は佛敎の眞價は、彼はかゝる簡明平易なる眞理を保有するが故に增加すとは思はず。苟も一歩なりとも下等動物の境より超出進歩せる人間にして此ほどの簡明なる眞理を認識し又之を實行せんとせざるものはあらざる可し。此等の眞理は深く人心の奥底に根抵し生長する人間全体の傳來物なり。總て人間は、其の名の如何に拘はらず、其の子孫の一人が此等の眞理を宣說したるの故を以て、彼が前に其の頭を下ぐ可きか。然り豈然らんや。余は其の基督敎佛敎たるを問はず、又如何なる宗敎たるを問はず、只其の具有する道德的戒言によりて宗敎の價値を判斷する人々に反對するなり。余輩は基督敎は其の山上の說敎を有するを以ての故に一切宗敎に勝れりと思惟す可きか。然り豈然らんや。余輩若し單に其外見上より判斷せんか山上の說敎の如くに高尙秀妙なる生產物は他に少なからざるを見るなり。孔子は山上の說敎又は佛陀の戒言の如き高尙なる言を吐漏せざりしか。されば吾人は總ての聖賢道德家を崇拜す可きか。之れ若し宗敎の本精に對する正當の觀解ならんには、余輩は大に佛陀及び基督の表を張大せざる可からず。ソロンをもソクラテスをもプラトをもアリストートルをもパスカルをもハーバート、スペンサーをも皆悉其中に排列せざる可からず。余輩は思想上に於ても、實行上に於ても、かゝる英雄崇拜に陷らざる樣戒心せざる可からず。人類は既に思想及び事業界の他の方面に於て過多の英雄を有せり、道德界に於ても更に多くの英雄を要す可きか。吾人は眞に或る人の來りて、妻の義務は夫に仕へ、夫の義務は妻を愛するにありと、敎へんことを要するか。吾人は竊盜は不德なり、慈善は美德なりと敎ゆる預言者の現れんことを要するか。人間思想が其の現在の位地に達着せるに至ては、最早、下等動物の或る物すらタトと粗笨なる形態に於てするとは云へ、既に其の萠芽を現起せるが如き道德的戒言を特に敎ゆる人あるを要せざるなり。人類敎化の爲めに天命を蒙りて世に降臨せる宗敎的敎師は其の信認を得る爲めには基本的道德眞理の外に更に或る物を敎へざる可からざるなり。

上來講述する所、簡略ながら佛敎倫理の大要を示し得たりと信ず。道德に關係する佛敎の經書は其數甚だ多く、其所詮又殆んど人類の社會的道德的安寧に關する一切問題を網羅せり。上文中屢々引用せし「ヅハムマパダ」經は其等の廣大なる倫理文學中最とも勝れたる書にして、其所詮の綱目は二十六件なり、隨て二十六品に分たる。

基督敎の說敎集に類する經書は、第二章に於て檢したる如く、其數多く、又其所詮は種々の問題

に關せり。而して大抵は金口の直說とせり。茲に其の一例を擧ぐるは無用に非ざる可し。一天神嘗て最大幸福に關する問を發せしとき、佛陀之に答へて曰はく。

凡愚に仕へず、
聖賢に仕へ、
尊者を尊ぶは、
之れ最大天福なり。
樂土に住し、
前生に成せる善業の果を得、
心に正念を持するは、
之れ最大天福なり。
洞察の力大にして、教育善良、
自制の力强くして、談話快達、
且つ云ふ所、適切なるは、
之れ最大天福なり。
父母に奉養し、
妻子を給養し、
平和なる業に從ふは、
之れ最大天福なり。

僧に施し、正直に生活し、
親族を給助し、
非難されざる作業を成すは、
之れ最大天福なり。
罪を惡み、且つ之を避け、
傲飲を制し、
善事に倦まざるは、
之れ最大天福なり。
恭敬にして遜謙、
滿足にして感謝、
適時に法を聽くは、
之れ最大天福なり。
耐忍にして順良、
平和者(佛僧)に隨順し、
適時に法話するは、
之れ最大天福なり。
自禁にして純潔、
聖諦を悟り、

涅槃を得るは、
　之れ最大天福なり。
無常轉變の中に、
心神を亂さず、
惱又は慾なくして安心確立するは、
　之れ最大天福なり。
斯くの如く行する人々は、
何れの方よりも襲ひ難し。
彼等は何れの方に於ても安然に歩むなり。
　而して彼等の幸福は最大の天福なり。

如何なる宗教又は倫理書に於ても、吾人は今掲載せしよりも高尚なる道念あるを發見せざる可し。實に佛教道德説の此の部分と其の形而上學的の部分との間に存在する差違は甚だ大なり。されど余の閲讀したる歐洲佛學者の著作中には佛教倫理説の此等の二部分の予盾的性質に就て論せるもの一もあるなし。第一の形而上學的部分に於ては、善行を修むるによりて吾人の得る所の信用を破壞せんとする一切の方法を試む。かゝる行爲を修むる人々を呼んで異端邪道と稱せり。されど第二の實行的部分に於ては、善行を稱揚するに孜々として大教師が一切眞實弟子衆の之を修めんことを勸むるを見るなり。善行若しさまで佛陀の稱揚勸告する所のものならば、如何で其の結果を以て害惡となす可けんや。善果を生ずる因は、如何で同時に再び惡と變ずるを得んや。實に一

の形而上學系統としての佛教殊に其の形而上學的倫理説は、一の宗教系統一の實行道德系統としての佛教と予盾撞着すること、毫も疑ふ可からず。該二者は調和さるゝこと能はざるなり。實に彼等は調和すること能はざるものなり佛教は宛も同時に同一事をなし、又なさざらんとするが如し。之れなし得可からざるの事なり。一種の無神哲學の上に一の宗教系統を建設せんとせし祖師等は直ちに其の成し得可からざることを認識せざるを得ざるに至れり。彼等は終に思辨的思想の砂漠を去りて實行的道德の林苑に移れり。さて余は上來講述する所によりて佛教の道德説の大要を示せり。故に茲に筆を擱き、次章に入りて其の宗教思想を講述せん。蓋し實行的道德は最とも親密に宗教と連結するものなれば、今其の實行道德を講し終らば次に其宗教を講述せざるを得ず。若し然せざらんか所説完備せざる可し。

第七章　一の宗教的系統として佛教を論ず

佛教は甚深甚微なる一哲學系統、受容す可き滿足なる實踐道德の一系統としての外、又一の宗教的系統たるなり。而して彼が殆んど人類の三分一を支配するを得たるは一に之れによる。佛陀の教法若し一の宗教的系統を組織せずして、單に道德的又は純想的哲學の一系統たるに止まらんか決して幾千年の長年月を貫きて、幾億萬の生靈の思想行爲を感化誘導する能はざりしならんソクラテス、プラトーの思想甚深玄幽妙なるに於てはけつして佛陀に一歩も讓らず。而も今日は哲學講堂においての外は、彼等を知るものなく、學者の書架に於てせずんば彼等の遺書の住息する處なし。吾人は此の偉大なる現象に於て、宗教は人間必須の一要素なり、之れなくては人類社會は支離滅裂又修補すること能はざるものとならんと云ふ一大眞理の燎然たるを見るなきか。余輩は屢々耳にする言あり、曰はく宗教は不必要物なりと、又曰はく、宗教は只教育を補助する物として用あるのみと。されど吾人人類の歷史は明亮勁健なる言語を以てかゝる言の事實に反することを懇說するなきか。又佛教の歷史は其の內より宗教的部分を夾除し、全く之を哲學の系統となさんとする先輩等の過失を明示するなきか。余は確信す、佛教若し僧衣を脫して哲學者の上衣を着せんか、遂には幾億萬の生靈を感化し救濟するの活力を失ひ、只乾燥無味なる論諍中に沈溺するに至らんと。而してよし一切哲學系統の首領の高座に陞るとして其の然かなしたるときは即ち其の天上の起源を失ひ、只人間腦髓の巧妙なる一產物として見做さるゝに至らん。カントや、ヘーゲル、プラトーやアリストートルの學說と軒輊なきものと見做さるゝに至らん。されど一の宗教的系統として連續する上は、タトヒ其の教義の大部分が識者の排斥する所となるも、尙は其價値を損傷せず、幾億萬の生靈を吸收するを得ん。蓋し彼は其れなくしては如何なる宗教も存在すること能はざる多くの高潔純美なる思想を藏すればなり。然り而して余は之れより其等の思想を一々檢査して以て佛教が他の諸宗教に勝れて巨大なる信徒を獲得せし秘密を闡明せんと欲するなり。

案ずるに佛教が世界の一大宗教となるに至れるは全く其の僧伽の制度に基因せるものならん。之を外にしては彼をしてかく永續むしむる原因之れなきが如し。釋迦若し他の哲學者の如く只哲理を講說するに止まりしならんには彼の教說は只其弟子間に限られて廣く諸民の耳朶に達する能はざりしならん。されど彼は單に理論を說くに止らざりしなり。而して佛教の弘通久住を圖りしなり。一の社會團体を組織建設して以て其の主義の弘通久住せるは一に之によるなり。故に今該團体の制度法律を研究することは佛教研究上の一大要事なり。

さて釋迦の教說よりして余輩の學ぶ所の第一件は制慾主義を嚴守する生活なり。一切世事を出離せる生活なり。而して此の生活を送る可き階級は總て他宗教とは其組織を異にせり。其の主要なる差違は基督教とか婆羅門教とか猶太教とか云ふ宗教にありてはかゝる階級を組織する人々は其の信徒中或る一定の人々に限ると雖とも、佛教にありては然らず總ての信徒は悉く此階級に入らざる可からざりき。第三章佛陀傳中に說ける如く、佛陀生時の間に於て既に幾百萬の人民は其の戒律を奉じ、遁世的生活を送りたりき。是に於てか一の疑問は起り來る。曰はく、一切信徒をして單一なる階級に集めんとするが如き計畫は實際成就す可きものなるかと云ふ疑問即ち是れなり。余の見る所によれば佛教後世の發達は之に與ふるに否定的答解を以てするが如し。佛教は數多の

亞細亞國民を支配すること既に幾世紀間、されど嘗て該階級をして其の信徒の全体と其の範域を同一ならしむるを得しことなし。否な遂に其の原始の計畫を放棄して他宗の例に倣ふに至れり。即ち一定の宗教的職務を行はんが爲めに一般の信徒より區別して、僧侶の一階級を作るに至れり。而して此政略を採用せし利益は其の結果に於て顯然たるを見る。

故に今や佛教界にありても他の諸宗教界に於ての如く、信徒は僧俗の二階級に分かる。而して余輩は先づ僧侶即ち該階級を組織する人々の義務を研究す可し。但し佛教は、其文學上に於ては今日に至ても尚ほ俗人の存在を認めず。尚ほ各信徒を以て該階級の一員となせり。故に該階級の側度律法を研究せば、又同時に俗人の律法をも學ぶを得可し。

さて最初は該階級に入らんと欲するものは只其の入らんと欲する志望を表白するのみにて直ちに入門を許されたりしかど、後該階級の漸々廣大となり富豐となるに及んでは僅少なる要件を設くるに至れり。又最初は毫も入門式を設けず。入門者は只剃髮し黃衣を着し、遁世的生活に入れば夫れにて可なりしかど、後には單簡なる入門式を設ぐるに至れり。今毘奈耶原經（東洋聖典集第二十卷）によりて該式執行の作法を略說す可し。

受戒者は戒場に集れる衆僧の前に出づれば、教授師先づ單白して云ふ。

大德僧聽、是甲某、從和上某甲、求受戒、若僧時到、令吾問遮難。

威儀師は受戒者に向て云ふ、

善男子諦聽、今是眞誠時實語時、實當言實、不實當言不實。

夫より左の諸難事を問ふ。

譯者曰、下文に該階級と云ふは the order なるに譯せるものにして僧伽の階級の意なり。

譯者曰、受戒法に就ては四分律受戒捷度（大藏經列品）分律刪繁補闕機（第五冊）四分律羯磨諸受戒法篇第二（同冊）、羯磨受戒法篇第七（同冊）、羯磨受戒法（同冊）、僧羯磨授戒法（同冊）、毘奈耶律七部雜羯磨受戒法（同冊）等を見よ。

癩癰疽白癲癡狂病頗狂病、汝無如是諸病不。

汝非非人不、汝非畜生不、

汝是大夫不、

汝非奴不、

汝不負債不、

汝非官人不、

父母聽汝不、

年滿二十未、

三衣鉢具不、

汝字何等、

汝和上字誰、

受戒者一々右の諸難事に答ふれば、於是羯磨師三羯磨をなす、其の一に曰く、

大德僧聽是某甲淸淨にして諸難事なく、年二十に滿ちて三衣鉢具れり僧今某甲に戒を授けんとす。衆僧中異議なきものは默然たれ、若し異議あるものは之を云へ。

而して衆僧悉皆默然たらば全く異議なきものとして戒を授く。夫れより剃髮式授衣鉢式等行はれ、終りに教授師受戒者に向て簡單に四波羅夷法を說く、

（一）汝一切不得犯婬作不淨行、タトヒ受戒前に妻を有するものと雖も、受戒後は一切之と交る可からす。

(二) 汝一切不得盗乃至草葉、之を犯さば枝より落ちたる木葉の再び綠色を呈する能はざる如く、再び僧伽に入るを得ず。

(三) 汝一切不得故斷衆生命乃至蟻子、

(四) 汝一切不得妄語乃至戲笑、若比丘不眞實非已有、自稱言得上人法、得禪得脫解得定得四空定、……言天來龍來鬼神來供養吾、非沙門非釋種子。

以上は律藏中に見ゆる受戒法最古の式なり。後世に至てはやゝ複雜となれり。されど佛陀の生時にありては別段かゝる式を要せざりしこと疑ひなし。佛門に入らんと欲するものは單に教主に隨從して彼の行ふ如く行へば夫れにて可なりしが如し。之れ他の諸宗教に於けると異ならず。非督の其の十二使徒を召し玉ひし時も別に入門式を行ひ玉ひしとは見へず。而して使徒時代に至て始めて按手禮の行はれしを見る。今日の壯麗なる按手禮は即ち其の遺制なり。

時に受戒者は衣鉢を受けて戒場の外に出で之を若持して再び戒場に入り來り、教授師の前に至りて膝を地に着け、合掌して是說を作す、

我甲某、歸依佛、歸衣法、歸依僧、

次に十戒を誓ふ

(一) 不殺生戒を誓ふ。

(二) 不盗戒を誓ふ。

(三) 不婬戒を誓ふ。

(四) 不妄語を誓ふ。

(五) 不飲酒を誓ふ。

(六) 不非時食を誓ふ。

(七) 歌舞娼管絃倡伎を誓ふ。

(八) 不著華鬘香油塗身を誓ふ。

(九) 不廣高大狀上坐を誓ふ。

(十) 不受金銀寶物を誓ふ。

此くて受戒者は僧伽の同胞團体に入るを許され、而して長老の訓育を受け、又彼等と同じ寺院に住す。今比丘日常の生活の一班を述べんに、先づ其の食物は全く信徒の布施に依賴せり。總ての比丘は毎朝鉢を持して村里に入り、默然として戶前に立ち、食の與へらるゝを待つ。而して待つこと長時間に亘りて尙は與へられざるときも決して瞋恚の念を發せず、除々として次戶に就く。かくて其の日の食物の十分集まるまでは戶々乞食す。

さて食物を集め之を食したる後には靜かに菩提樹下に結伽趺坐して觀念に入る。其の主要なる觀念に五種あり。(一)に愛情觀、一切衆生の上を觀じ、彼等に幸福の生せんことを望む。(二)に慈悲觀、一切衆生の生死の大海中に轉々輪廻して諸種の苦惱を受くるを憐み、之を解脫して涅槃の樂果を證得させたしと觀ず。(三)歡喜觀、前觀の反對にして衆生の幸福繁榮を觀じて歡喜す、(四)不淨觀、肉身の不淨病老の恐る可きこと、又人生はよどみに浮ぶうたかたの如く生滅無常なること衆生は生死流轉して常に苦惱の內に沈溺すること等を觀念す。(五)靜思觀、世人の尊重するもの及び賤斥するもの、即ち善惡、愛憎、貧富、老少、病健、等世人の常に其の心思を煩はせる一

切の事物に向て、湛然として情緒を亂さず、恬然として心念の安靜を失はざること等なり。さて比丘は如上の五觀を修する外、更に種々の觀法を勤修せざる可からざりき。佛典を繙けば實に千差萬別の觀法あるを見る可し、今佛陀將さに入滅せんとするとき、隨從の一切弟子衆を集めて與へたる遺敎を見るに、其の內に多く此の點に關する敎義を含有するを以て左に之を擧げん。但し其所說の深遠幽妙にして說法の懇切なること實に驚くに堪へたり。

然らば汝等比丘衆よ、我が淸淨法をして、久住を得せしめんが爲め、又衆生緣の慈悲心より諸天人間の利益綏寧の爲めに永續せしめんが爲めに、我が證得宣說したる淸淨法を能く了悟勤修し、又成滿して以て汎く一切衆生に傳へよ。何等を法と謂ふ。四念處、四精勤、四如意足、五力、七覺支、及び八正道即ち是れなり。

四念處とは、(一)身念處、(二)受念處、(三)心念處、(四)法念處、

四精勤とは、(一)已生の惡を斷せんが爲めに、(二)已生の善を增長せしめんが爲めに、(三)未生の惡を生ぜざらしめんが爲に、(四)未生の善を生ぜしめんが爲めに一心に精勤するを云ふ。

四如意足とは、(一)欲(二)心(三)進(四)思惟。

五力とは、(一)信力(二)進力(三)念力(四)定力(五)慧力。

七覺支とは、(一)念(二)擇法(三)精進(四)善(五)輕安(六)定(七)捨。

八正道は既に解せり。

譯者曰、般泥洹經卷上(大藏經伏帙第十冊三十九枚)には大に本文中に引用せる語に類似する語あり。故に參考の爲め左に之を轉載せり。

今佛爲天上天下、所尊敬者皆志所爲、是故常以正心行法、唯行法者、能現世得休、現世得安、宜善取持諦受諷誦、解意思惟、然則我淸淨法可得久住、可以愍度世間衆苦、道利綏寧諸天人民、比丘當知、何等爲法、謂是四思惟、四意端、四神足、四禪行、五根、五力、七覺、八道諦、如受行可得解脫令法不衰、彼何謂四志惟、惟內身循身觀、惟外身循身觀、以內外觀、分別思念、斷薩惡意惟、痛之觀、及意興法、皆如初說、何謂爲四意端、已生惡法、能即斷却、治性精進、自攝意端、已生善法、志立不忘、能使增踰、未生惡法、制使不起、治性精進、自攝意端、未生善法、即能發生、治性精進、自攝意端、已生善法、常守淸淨、不取無捨、惟精進定、惟意志定、惟戒習定、皆同文如謂爲四神足、惟思惟欲定、以滅衆行、具念神足、其欲不邪、無爲成一禪行、念行已滅、內守一心、志在恬靜、成二禪行、雖觀無漏心安體初說、何謂四禪、棄欲惡法、但念但行、志樂無爲成一禪行、成四禪行、何謂五根、一爲信根、意向四玄、二爲精進根、治四意正、分別見眞、成三禪行、已斷苦樂無憂喜想、意已淸淨、見四眞諦、何謂五力、一爲信力、喜意不壞、二爲精進力、常能健端、三爲念根、四爲定根、思禪行、五爲智根、以進自證、何謂七覺志、念覺意、法解覺意、精進覺意、愛喜覺意、一三爲念力、得志性、四爲定力、禪意不亂、正見正思正言正行正命正治正志正定、是爲度世淨之法。向覺意、惟定覺志惟觀、行護覺意、何謂八道、

さて上來說述せしが如き抽象的問題を思辨するを以て其の職務となすに於ては、前章に說述せしが如き深遠幽玄なる思想を產生するに至るはもとより驚くに足らず。かゝる惰意安逸の生活は常にかゝる思想的結果を產生するに至るものなり、殊に印度の如き氣候酷熱にして人身を惰弱ならしめ、人々は只懶惰安逸をのみ目的として毫も進取活動を望まざる國土にありては然るものなり。中世紀に於ける基督敎の寺院的生活も亦大に思想上の作業を產出せしこと疑ひなし。中世に於ける基督敎の寺院及び其の諸宗派は歐洲近世の文明の親なりと云へるキゾーの言は敢て正鵠を誤らざるなり。彼等は哲學科學神學の中心たりき。以て人智發達史上の缺隙を塡充したりき。近世の哲學科學は大に彼等の方針及び性質を變更したること眞實なり。されど尙ほ吾人は彼等の間に親子の關係の存在するを見るなり。今日の哲學は、トマスアクイナスや其の同代の學者の宣說せしものとは大に異なれり。されど尙ほ思想的生活の一方法としての哲學の存在は、實に全く世事をすて世務を離れたる中世紀の僧侶等が日夜の觀念禪定によれるものなり。

僧伽の功用及び緊要に就て尚は少しく述ぶ可し。佛教は其の信徒の一部分をして全くかゝる思辨的生活に献身せしめし唯一の宗教に非らず。既に屢々述べし如く基督教も亦其の歴史の初代にありては隠遁主義を採用せしなり。されどかゝる精神は全く基督教の天性及び理想に反對することは疑ひなし。基督教の僧侶制度は佛教の僧侶制度とは全く異なれる基礎の上に立てる物なり上文に述べし如く佛教はもと其の範圍内には人類全体を包納せる同胞團体を建設せんと欲せしものなり。而してかゝる計畫の全く成滿し難きを悟りたるときに始めて僧侶制度を立て、僧伽の範圍を制限せしものなり。僧侶と俗人との區別は現起せしものなり。されば其の僧伽の原始の目的理想は自利的のものなりしなり。即ち各信徒只自己の存在を解脱せんとせしものなり。然るに基督教の僧侶の目的理想は其の始めより俗人の靈魂的必要を供給せんとするに在るなり。故に基督教の僧侶が自から一庵に退き、世事を擲ち世務を離れて只形而上的問題の思辨に沈むときは、彼は其の本來の目的より離れたるものと云はざる可からず。勿論世務をすて社會より離るゝは格別惡事なりと云ふにあらず。されど又萬人の摸範たる可き稱讃す可き事と云ふ可からざるなり。寺院的隱遁的制度の隆盛を極むる時代は又常に教勢大不振の時代なり。かゝる制度は寺院をして漸々富裕ならしめ、隨て其所有者即ち僧侶をして懶惰安逸贅澤に陷らしめ終には社會に害毒を流すに至るものなり。諸君誤解し玉ふ勿れ、余は今佛教を攻擊するに非らず。一般寺院的隱遁的主義を攻擊するなり。且又余は天下の同胞を救濟せんが爲めに幽靜に退き、全く世務を放棄し、世の快樂を斷絶し、以て專念一向眞理正道を求むる誠實なる君子を非難するにあらず。否なかゝる君子は余輩の大に暴慕仰欽する處の人なり。之れ基督教の理想的僧侶なり、聖徒ポーロは屢々勸めたり。人若し爲し得るならば自から神の事業に献身するに適するものとなり得ん爲めに克己を修せよと。但し余の爰に非難排擊するは即ち全く自利的動機より發生し、即ち世路の困難に堪へ得ずして山間幽靜の地に退き、修定苦行して以て之を脱離せんと欲するの念より發生し、通例寺院主義遁世主義の名によりて世に知らるゝもの是れなり。又タトヒもとは稱讃す可き動機より發生せしとするも、かゝる主義は早晩腐敗して教會及び社會の上に弊害を流すに至るものなり。故にかゝる主義の發生は教會の進歩を助けずして、却て常に衰微敗頽の原因となるなり。歐洲に於ても遁世主義の最も盛大なりし時代は即ち基督教會の最も腐敗を極めし時代なり。通例暗黑時代の名を以て知らるゝ時代なり。何故に暗黑時代と稱せらるゝか、其の暗黑の暗黑たる所以は如何。之に答ふるは蓋し難事に非らず。是れ寺院のあまりに多くして又富裕にして、僧侶は自然贅澤に流れ娛樂に耽り、遂に其本來の目的を忘るゝに至りしにあるなり。

此の點に於ては佛教は基督教より不幸なりき。佛陀の生時に於てすら既に多數の弟子衆中には鄙劣不正の所行を犯す者ありたりき。毘奈耶藏中には僧侶の品行善良ならずして佛陀は絶へず種々の戒律を制定せざるを得ざりしと明らかに現はる、(東洋聖典集第二十卷毘奈耶藏第三卷を見よ)今後世に下りて各佛教國に於ける僧侶の狀態を觀察するに、余輩は更に一層彼等の品行の腐敗墮落せるを見る。もつとも其内には博識高德なる名僧も亦少なからずと雖とも、全班より評すれば彼等は到底懶惰淫亂の誹を免ること能はざる可し。而して此の非難は多くの事實上の證據に基づけるものなれば之を排斥するに便なし。余は切に彼等の品行の世人の云ふが如くならざらんことを希ふ。されど事實上之を反駁するの根據を得ざれば如何ともせん方なし。

余は日本に住すること既に七年、其の間僧侶の品行に就て見聞せる所少なからず。而して今彼等即ち幾千万の同胞の心靈上の先導者愚安者たる彼等の品行に向て非難の評を下さざるを得ざるを悲むされど余は事實を否定するの權力なし實に彼等の品行の治らざることは確乎たる事實なり聞く嘗て内務大臣は彼等の不品行に就て訓令を下されし事ありと。又嘗て大坂毎日新聞の報ずる所によるに日本に於ける最も有力盛大なる一派の現法主は數多の美女を蓄へらるゝと。乞ふ諸君、今之を羅馬法王の品行作業に對比せられよ、宗教上より觀察する上は二者は其の地位を同ふするなり。而して實際上社會上に於ける其の品行作業の差違は如何。羅馬法王は既に白髮の耆老なり單に外面上より見れば老衰事に堪へざるの觀あり。而も其の信仰を保護辨説せる最とも深妙なる哲學的論辨を以て汪溢せる教書は殆んど毎月彼が指頭より出現するなり。彼は其の身も靈も二億萬の信徒の安寧と進歩の爲めに犧牲に供せり。然り而して今や佛教は上述の如き法主を戴きなかるかゝる先導者を有する基督教に向て一大激戰を試みんとす、如何てか勝利の玉桂冠を戴くを得ん。されば今や佛教は其の僧侶制度の上に一大根本的改革を施す可きの時にあらざるか。

余は爰に耶佛二教の優劣を論せんとするに非らず。只其の僧侶の現狀を比較せしのみ。而して余は左の斷定を下すを憚らざるなり。曰く新舊兩派の孰れを問はず基督教の傳道者は日本の僧侶よりも其の品行に於て一段勝ると。而して日本の僧侶は世界佛教國の僧侶中其の學識品行の孰れに於ても最も勝れたるものなることを記憶せざる可からず。されど余は爰に之を詳論せず。更に上文に續きて僧侶の日常の生活を説かん。

眞正なる僧侶は藥用の外は身に油を塗るを得ず。櫛を以て髮を梳り、又蜜蠟を以て之を軟化するを得ず。鏡を用ひ又鉢水に身を寫すを得ず。但し顏面に傷を受け、又は塵物の生ずるときのみは之を用ゐるを許さる。又歌舞管絃を觀聽するを得ず。但し此等の戒律は佛陀一時に之を制定せしものに非らず。隨緣隨制のものなりと云ふ。彼等は又陰部を切斷することを許されざりき。佛陀嘗て一比丘ありて其の陰部を切斷せしことを聞きしとき、吾人の切斷す可きは妄念邪思にして決して身体の局部に非らざることを教へたりき。彼等は又金銀寶物を受くることを禁ぜられたりき。其他無數の戒律あり。一々之を列擧せば大卷を要せん。彼等は實に微細の事にまで亘れり、人間生活の一切の點に亘れり。切爪、持鉢、沐浴等の事に至るまで悉く一定の制ありて僧侶たるものは決して之を犯す能はざりき。今毘奈耶藏諸經の説く所によれば此等の戒律は一切金口の直制の如くなれども、されど沈思精觀するに、かく精細緻密なる戒律は到底佛陀一代の年月間に悉く制定されしものとは思はれざるなり。

上來講述せるは比丘に關する僧伽の制度戒律なり、今少しく比丘尼の制度戒律に付て述ぶ可し。さて此の點即ち僧伽の内に女子に向て一の他位を與へしことに就ては佛教は大に諧稱す可き事を成せりと云はざる可からず古代の宗教中にて此の制度を採用せしものは實に僅少なり。黒耳古の宗教は不犯女の一階級を設け、國王其の内より膝妾を選擇して内宮に召し玉ふに非ずんば、一生不犯を守りて宗教上の職務を勤修せり。希臘羅馬の宗教にありては、最も主要なる殿堂には、不犯女の一階級ありて夫れ〳〵適當の宗務をとれり。之に反して猶太教は全くかゝる制度を有せず。吾人或る時は女の預言者に就て讀むことありと雖も之れ只特別なる場合のみ。即ち或る場合に於て女人は特別に神の召を蒙ることあるのみ。とにかく宗教の祭壇前に男子と同等の地位を女子に

許せし名譽は佛敎に歸す。而して時間の上にては基督敎に先だてり。實に只此の二宗敎に於てのみ女子は宗敎の祭壇前に立ち男子と提携して一の職務を勤むるを得るなり。

さて比丘尼の始源は毘奈耶藏第三部（東洋聖典集第二十六卷）によれば左の如し。

爾時世尊釋翅瘦尼拘律園に在り。時に摩訶波闍波提五百舍夷女人と俱に世尊の所に詣り、頭面禮足却て一面に住す。佛に白して言ふ。善哉世尊願くは女人を聽して佛法中に於て出家爲道を得せしめ玉へと。佛言ひたまふ。且止めよ、瞿曇彌是言を作す莫れ。若し女人をして佛法中に於て出家爲道せしめば、佛法をして久住せざらしむ可しと。世尊それより弟子衆と遊行して、舍衛國祇桓精舍に至る。時に摩訶波闍波提佛祇桓精舍に在りと聞き、五百舍夷女人と俱に髮を剃り、袈裟を被りて、舍衛國祇桓精舍に往き、門外に在て立つ。步涉脚を破り、塵土身を坌し、涕泣流淚せり。爾時阿難之を見て、即ち往て、瞿曇彌何故に五百女人とかゝる樣をなすかを問へり。瞿曇彌即ち答へて言ふ。我等女人、佛法中に於て出家して大戒を受くるを得ずと。阿難語て言ふ。且止めよ、我れ汝の爲めに、佛に往て求むる所を請はんと。即ち世尊の所に至り、白して言はく、善哉世尊、願くは女人の出家受大戒を聽せと。佛阿難に告て曰ふ。且止めよ、女人の出家受大戒を聽さば、佛法をして久しからざらしむ可しと。阿難佛に白して言ふ。佛摩訶波闍波提に大恩を受く、佛母命過ぎて後、世尊を乳養長育せしは摩訶波闍波提なりと。更に問て曰はく、女人佛法中に於て出家受戒せば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得可きや否やと、佛得可しと答へたり。阿難即ち然らば之を聽せと請へり。佛阿難に告て曰く、今女人の爲めに八不可過法を制せん。若し能く行せば之を聽さんと。其の八不可過法とは左の如し。

譯者曰、著者南部毘奈耶藏中より下文に引用せる文の大部分は四分律第四十八卷比丘尼揵度第十七（大藏經列帙第六冊）中の文に類似する以て、其のだけは四分律の文により譯せり。

（一）百歲起つと雖ども、新受戒の比丘尼は比丘に禮拜し、彼の前には起立し、又頓首し、總て正當の義務を盡す可し。（加此法應尊重恭敬讚歎盡形壽不得過）

（二）比丘尼は比丘なき所に在りて、夏安居す可からず。

（三）比丘尼は各半月比丘より二事即ち半月行と敎誡を受く可し。

（四）比丘尼安居竟れば、其の間に見、聞、疑ひし三事に就て長老の敎を乞ふ可し。

（五）比丘尼殘罪を犯さば其長老の比丘及び比丘尼より懲戒を受く可し。

（六）比丘尼二年間諸戒律を修行して後比丘に從りて大戒を受くるを乞ふ可し。

（七）比丘尼は比丘を罵詈誹謗す可からず。

（八）されば比丘尼は公然比丘を敎戒す可からず。されど比尼の比丘尼を敎戒することは禁せず。

爾時阿難世尊の敎を聞き已んで、即ち摩訶波闍波提の所に住き、之を告ぐ。摩訶波闍波提大に喜び、我及び五百舍夷女人は共に之を頂受す可しと答へ且つ阿難の勞を謝せり。阿難即ち世尊の所に往き之を告げければ、世尊喜はずして言ふ、女人佛法に於て出家せざらば、佛法は千年間久住す可し。されど今やかく久住すること能はざるに至れり。只其の半即ち五百年間久住す可し。女人其の家事の職務を捨てゝ出家せば彼は佛法の弱點となる。されど人々、池水の溢出を防ぐ爲めに、堅堤を築ける如く我は比丘尼に向て此等の八不可過法を設けて以て彼等の汪溢（即ち其の數の增上を意味するか）を防げり。」

佛陀は終に憍曇彌の出家受大戒を聽したり。是に於て憍曇彌は佛陀に向て歸城の後釋種の女人を

教化するには如何にして可ならんかを問へり。佛陀此問を聞きて大に喜び、彼が宗教的義務に附て長き説法を與へ。且つ大戒を施せり。されど比丘尼にして決して他の女人に戒を施すなからんことを戒めたり。而して女人は常に比丘より戒を受く可きものなることを制定せり。憍曇彌は又敬禮及び互相の前に起立する禮は男女の別なく年齢に從はんことを乞へり。されど佛陀之を許さずして曰く「我はかゝる制を設くる能はず。邪説の教師すら女人に對してかゝる行爲をなすを許さゞる可し。されば我如何で之を許し得んや」と爾時彼は此主題に就て長き説法を與へたり。其の内の言に曰はく。汝等比丘、汝等は女人の前に、頓首す可からず、彼等の前に起立す可からず彼等の前に汝等の双手を伸ばす可からず、又年少者より年長者に對する諸禮式は彼等に向て行ふ可からず、然かなせるものは誰にても罪せらる可しと。」

上文に於て見る所によりて又更に比丘尼の諸戒を稽査するときに余輩は常に感ずることあり。即ち佛教は女人に向て一の地位を與ふ、而して此事たる既に述べし如く、希臘羅馬黒耳哥等の諸宗教より彼の一段進歩せることを示すと雖も、尚は女人の地位及び男子との關係に對する彼が觀念は大に基督教に劣れるものなること是れなり。基督教國に於ける婦人の地位の甚た高きことは疑ふ可からず、否な或る場合に於ては男子よりも高し。彼得前書に曰く、夫たる者よ、爾曹も妻を遇ふこと弱き器の如くし、理に循ひて之と同に居り、これを敬ふこと生命の恩を嗣者の如くす可し。是れなんぢらの祈禱に阻礙なからん爲めなり」(三章七節)右の言を以て上文中に引用したる佛陀の言と比較せよ。如何に差違の大なる事よ。是れ少くも婦人の地位及び性質に就ては基督教は佛教より勝れたるものなるを示すに非らずや。基督教は云ふ。婦人は弱き器の如しと。是れ身体上よりするも、精神上よりするも、婦人は男子より弱きものなることを教へたるものなり。而して何れの點より觀察するも實際上婦人は弱きものなり。さらば彼等に對する男子の義務は如何にある可きか。只敬愛の念を以て彼等を遇するにあるのみ。彼等は身体上纖弱なり。されど尚は尊敬の一目的物なり。蓋し男子の溫良優美なる對手なればなり。是れ其の始めより基督教會を支配せる精神なり、歐米諸國にありて婦人に高き地位を與ふる精神なり。而して此點に於ては基督教は世界一切宗教中に獨歩するものなり。一夫一妻を主唱し、又婦人に高き地位を與ふることによりて、彼は千宗萬教中に燦然たる特殊光を放つ。夫れ基督教出現前にありても、人類は既に宗教に於て、哲學に於て、又法理に於て、大に進歩しおりたりしと雖も、されど男子が、女子に對して表はさゞる可からざる正義を見るに適するものは、未だ一人も現れざりき、基督教が此眞理を啓示發揚するまでは、世界は全く之を知らざりき。而して基督教の傳播以後は一夫一婦主義は甚だ急速に進歩し、其正義は今や之を實行せざる民種によりてすら、認識せらるゝに至れり。遂には世界全体に須奉さるゝに至らんこと疑ふ可からず。男女の教育いよ〳〵進歩せば、一夫多妻主義はいよ〳〵不正なるもの、不自然的なるものと見做さるゝに至らん。

余輩は上文に於て、佛陀は其僧伽中に女人を入るゝを喜ばざりしことを見たり。恐くは女人僧伽に入らば種々の弊害の現起せんことを預想せしものならん。余輩は比丘尼の戒律中に於て、彼等と比丘の間に屢々不道徳的關係の起りしことを見る。而してかゝる所行にして屢々現起せば、僧伽の存在及び永住を毀傷すること疑ふ可からず。

余輩は爰に比丘尼戒の詳細を講ずるの暇なし。只主要の點を約説するのみ。又彼等の管理は全く

比丘の手に在りたり。而して彼等は屢々獨立を圖りしかど、其の毎に成功せざりしが如し。又彼等の戒律に就ては毘奈耶藏中記述する事多しと雖も、只性の差違より起る外は、別段比丘戒と異なれる所なし。

余は今本題を終るに先だちて僧伽の道德的義務及び其修行に關する法則を少しく述べおかんと欲す。夫れ佛敎の研究に於て吾人の最とも面白く感ずるは、其道德的精神的敎戒の研究に達したる時なり。早代の佛敎定者が其の精神的性質の高度に達したるは爰なるが如し。余輩はあまりに懶惰にしてあまりに朦糊たる、殊に人性の發達を益するにはあまりに歷世的なる彼が哲學に疲れ、又僧伽の社會的戒律のあまりに巨多にして且複雜なるに厭氣を催せり。されど其道德的敎戒に來るときは、宛も無盡藏なる鑛坑に於て愈々進んで愈々多くの鑛類を發見するか如く、ます〳〵研究してます〳〵多くの金言を發見するなり、絶へず、新しき發見物によりて活氣を得、又將來の希望を發起するなりさて僧加の道德的敎戒は前章に講述したるものと同じ部分(經書)に記載せらる左に其二三をあぐ可し。

汝等比丘諦聽せよ。我滅罪の法を宣說せん。心に刻して忘失する勿れ。善を求むる賢者は常に禮法と威嚴を以て自から處す。比丘非時に食を求むる爲めに村里に入る勿れ、夜間に於てする勿れ。此くなす比丘には多くの誘惑附着せん。故に賢者は非時に外出せず。或る比丘は諍論の爲めに自から守る。我はかゝる小心者を讃めず。此の原因よりして現起する誘惑は多く、又彼等に附着し、又彼等の諍論しつゝある時には、確かに彼等の心を甚だ遠くに追ふ。佛に從ふものは、食物、寢床、及び休床を求め、又衣服或は身体を洗ふ爲めに水を求むるには佛の說きたる法に從ふ可し。然りと雖も此等の物に執着する勿れ、蓮葉に固着せざる露滴の如くあれ。吉凶の前兆、星占、夢及び表示を斷じて信せざる比丘は正しく行爲す。彼は一切此等の事より現起する妄念より免る。人々我に禮す可してふ思想を有せざる比丘、世に呪はるゝも尙ほ世を怨みず世を怒らざる比丘、は正しく行爲す。心平靜にして、其の爲す可き勤を完成する比丘、有るが儘に眞理を見、尙ほ異信を抱く人にも不公平ならざる比丘、確心を以て人々を害する邪念貪慾に打勝つ比丘、彼は正しく行爲す(以上經藏中の或經より引用せり)

己汚なきに非らずして黃衣を着する人は、之れが價値なし。一切自制正誠正實の念を缺乏せる人は黃衣を着するの價値なし。されど汚を淸め、能く戒律を体し、誠實自制の念に充滿せる人は、黃衣を着するの價値ある人なり。手を制し、足を制し、言を制する人は、自制の最良の人、其の娛樂は內部に存し、其心平靜にして、獨居する時に幸福なる人、世人は彼を比丘と稱す。其舌を制して、怜悧に話し且自滿せざる比丘、世上及び天上の事物の上に光明を投ずる比丘、彼の言はうるはしく又少しく受くるも、其布施は彼の價値より小なりと思惟せざる比丘、其の生活純潔にして怠惰ならざる比丘、諸天は彼を崇讃す可し。生活は慈悲にして、歡喜は佛法なる比丘、彼は安靜なる運命に入る可し、輪廻の停止せる涅槃樂果を受く可し。彼が生活をして親切ならしめよ、彼が行爲をして正義ならしめよ、さらば彼喜に充ちて憂愁を滅盡す可し。伐私迦樹が其凋める花を落す如く、オ、比丘よ、全く邪念貪慾を放棄せよ。オ、愚人よ、髮を編むは何の益ある、皮の衣は何の益ある、汝が卑劣なる煩惱は汝の內

にあり、而して汝は外面を飾る。（「ヅハムマ、パダ」經より）

既に述べし如く、佛教はかゝるうるはしき又高尚なる道德訓言には甚だ富豊なり。余輩は何所にても僧侶日常の生活がかゝる情操によりて支配されんことを切望するなり。

初代にありては佛教は大に個人の品行に注意せしものなり。飲酒は破門の一大原因なりき。姦淫、竊盜、爭鬪、等の所行も亦然りき。

本章に於て余はアマリに永く僧伽問題を講說したり。されど之れ已を得ざるなり。既に述べし如く佛教の僧伽は基督教の教會てふ語と其の意義の範圍相均しきなり。佛教の文學は最も多く僧伽に關係す、僧伽外の社會に關係すること少なし。戒律儀式及本章の問題に關係する殆んど總ての事柄は僧侶に關係す。故に今彼等の制度組織を研究せは一派の教會としての佛教を可成に學び得るなり。

佛教の宗派及び異端、其の起源より又原本の教書によりて佛教の歷史を研究するに於て、余輩は屢々基督教の歷史と極似する點あるに驚く（但し彼等の宇宙及び人間に關する根本的觀想は全く異なれり。一は厭世的印度思想の血統を受け、他は「ブリユー」一神教の苗裔なり）今宗派及び異端の點に於ても、亦余輩は彼等の間に類似の存するを見る。次章なる基督教の講說中に見るが如く、基督教は其初代より哲學的及ひ神學的なる千種萬樣の異端邪說の爲めに其教會を擾亂され、全く彼等を排斥して遂に其の教義教說を確制するまでには、幾世紀間の歲月を要せしなり。されど第十三世紀の宗教改革に於て再び動搖を始め、遂には新舊の二大教派に分離するに至れり。而して大改革後再び其勢力を恢復して强盛を極むるに至りしは實に舊教即ち羅馬カソリック教の榮

譽なり。後一分派も其の內に起れるものなし。然るに其の大競爭者たる新教にありては分派に分派を重ね、今や其の數收舉し難きに至れり。佛教は其の分派頻出の點に於ては大に近世新教の同情をかふに足る。然り而してかゝる分派の頻出は如何なる宗教團体の勢力をも減殺するものなるは茲に論ずるの要なし。分量の上より云ふも、教義の上より云ふも、又其敵に對抗する上より云ふも、何れの點より云ふも、分派の頻出は其の宗教の爲めに賀す可きことに非らざるは、否な其の宗教內に於て一大弱點を萌すことは余の辨をまたずして明らかなり。其の新教の勢力を減殺せしことは疑ひなし、又常に佛教の傳播上に一大障害を與へしことは明らかなり。

されど爰には佛教宗派史の概略だに叙述するの段なし。又かゝる問題は面白きものには相違なしと雖も本書の如き性質の書にありては之を論ずること能はず。此は專ら佛教のみを論ずる書に屬する問題なり。故に爰には之を省く可し。又次章に於て基督教を論ずるときも同じく然かす可し只爰には南條博士の手になりたる英文十二宗綱要を照介しおかん。（譯者曰、日本佛教の歷史及び其の教義の大要を知るには、左の諸書を見る可し。元享釋書、六國史、三國佛法傳通緣起、本朝高僧傳、三國高僧傳、日本佛法史、三國佛教略史、日本佛教史、八宗綱要、十二宗綱要、明治諸宗綱要、立教大論、哲學館講義錄中の村上專精氏印度學、佛教史林、教學論集、南條博士英文十二宗綱要、等の書を見る可し。又右の外藤島了穩氏の佛文十二宗綱要ありと云ふ。又米國聖公會宣教師ロイド氏は日本佛教史の編纂に從事せらるると云ふ。余は氏の亞細亞學會に於て述べられたる講演の大要を「ジャパンメール」紙上に於て見たり。）

余は今本章を終らんとするに當て、更に二三の述ぶ可きものあり。先づ後世の佛教中に發達したる禪定を說かん。禪定とは六神通如意身に達する失神睡眠の狀態を云ふ。之れ前卷婆羅門教論中に述べたる瑜伽派の禪定に異ならず。さて禪定に四段あり。之を四禪定と云ふ。

初禪定、　比丘幽靜に就きて、尋及び思に滿ち、一切の苦惱罪障より離脫するによりて生ずる歡喜の心狀なり。

二禪定、　尋思を超絶したる深妙なる恬靜より生ずる歡喜の心狀なり。即ち思念平靜となり、直覺强大となれる心狀なり。

三禪定、　一切の情慾滅盡して、身に阿羅果の宣言する喜樂を覺へ、一時の歡喜心去りて永續の歡喜心に達せる狀態なり。

四禪定、　前の喜樂苦痛滅盡し、歡喜を排し、憂愁を斥くるによりて生ずる歡喜なき憂愁なき安靜及び想觀の純淸なる狀態なり。

此の睡眠的狀態の結果は是れなり。修定者定を出づるときは、自から其心神の大に變化せしこと、殊に平靜となれるを覺ゆ。而して入定の間は云ふ可からざる妙樂を感ず。

此の點に於ては佛敎は印度の瑜伽派に從ひしものなること明らかなり。又回々敎の「ジクル、クーナン」を修めんと欲せば幾時間も叫喚を斷たず、遂に大に疲勞して全く感覺を失ひ、睡眠に沈むに至て止む。而して睡眠より覺めたる時、其の間に見たる善夢及び旅行したる福樂界の事を話す。或は又阿片を喫して此の狀態を招く。余は嘗て多年の間阿片を用ひたる人より聞きしに、阿片の刺激によりて起れる夢は其の壯麗實に云ふ可からずと。總て平常希望する所の福樂なる狀態は、明らかに其の夢中に於て見るを得。而して其の夢中にありて、自から一の國王となりて數多の隨從者に侍せらるゝと想像せば、阿片の刺激によりて起れる夢の特色は其夢者をして其の見る所を毫も夢とは思はしめずして全く事實と思はしむることなり。

かゝる習慣は如何にして、又何時頃佛敎中に入りしかは確言し難し。早代の遺書によりて見るが如くは、佛敎は總てかゝる夢幻的魔術的所行を排斥せしが如し。されど後世に至りては種々の事情よりして、遂に彼等に感染せしものならん。

佛敎に付ては僧伽の外云ふ可きもの少なし。故に僧伽に關する諸點を說き了りたるときは佛敎研究の趣味は消失す。實に釋迦牟尼の宗敎は僧伽以外の世界に付ては少しも注意せざりしが如し。彼が宗敎は社會の安寧の進步等に付ては一言も云はず。爰に又余輩は一切他宗敎の有する所の一情操、即ち衆生の思想を導きて他界に向はしめんとする外、人間の社會的狀態を改善する爲めにあらゆる方法を試みんとする精神の乏欠するを見る、故に僧伽以外にありては佛敎は君臣、父子、夫婦、等の義務に付ては全く默然たるなり。余輩は今彼人類を捨てたる所にて又彼を捨てん一の宗敎としては佛敎は吾人の社會に付ては毫も興味を有せず。さらば人類社會も亦僧侶の外にはかかる宗敎に向て少も興味を感せざる可し。

余輩は更に一點の述ぶ可きものを有す。佛敎後世の發達是なり。余輩は既に原始の佛敎は甚だ簡撲にして、一も外部的儀式を有せざりしことを見たり。爰に於て、一の疑問は現起す。曰はく、其始源に於てはかく簡撲にして、又一切の虛飾を排斥せし宗敎が、遂に最も壯麗精緻なる儀式禮典の父母となるに至りしは、如何なる次第によるか。今日若し佛陀此の世に來りて後世の佛敎の發達せし巨多の儀式典禮を見んか、彼は如何なる感を發するならんか。

此等の問題に答ふるは容易き業に非らず。是れ先づ佛敎歷史の全体に通じ、次に各儀式典禮の起源に溯り、彼等は、如何にして起りしか、又如何に相互に連結して、さる壯觀を呈するに至りしかを研究せざる可からず、而して之をなすは本論外の問題なり。故に爰には簡單に左の如く解し

おかん。佛陀の宗教は其の狹隘なる生土の域外に超出して汎く諸國諸土に傳播流布せし時、單に僧伽以内に躊躇せずして汎く世界に出でたり。人類全体の必要及び精神的需要に應ずるに至れり。而して人間は廣大なり。一個人の感じ又望むが儘に左右するにはアマリに廣大なる物なり、於是彼も亦汎く人間の奉信を得んには大に讓らざるを得ざりしなり。佛陀を以て漸々一の神となすに至れると同一の願望は又佛教を驅りて多數の儀式典禮等を發生するに至らしめしなり。

余は爰に佛教の講説を終らんとす。本卷に於ては余は佛教に向ては割合に大なる場所を與へたり。之れ多くの點に於て、佛教は稀有なる宗教と思惟すればなり。本書第二部に於て他の諸宗教と之を比較論對するに至らば、余は更に深く又哲學的に之を講究す可し。爰には只主として歴史的見點より講究するに止め、又少しく其哲學の强健なる點及び微弱なる點を辨説するに止めたり。されど第二部には歴史家の椅子を去りて批判家の座を占めん。而して他の諸宗教と比較して佛教の價値を判斷せん。而して之を爲すには先づ公平なる精神を以て、其性質始源を研究せざる可からず。之れ本書に於て如上の研究を試みし所以なり。

第八章　基督教、其の歴史的發達、

本卷緒説中に述べし順序に從ひ、之れより基督教の考究に進まんとす。されど諸君も熟知せらるる如く、基督教は本校に於て主として考究せらるゝ宗教にして、諸君は單に教義上よりのみならず、哲學上よりも、神學上よりも、社會上よりも、倫理學上よりも、種々の方面より十分に之を考究せられつゝあるなり。故に余はタトヒ時と力を有するも他の諸宗教を講説するか如く、爰に之を詳説するの必要なし。只歴史的見點より之を概説するに止めん。而して其の講説の精神と方法は既に講説したる他の諸宗教に對すると異なることなし。

余は又緒説中に述べし如く、基督教の講説に二章を當てたり。而して其所説の綱目を左の如くに概別せり。

第八章　(一)本題の講究に用ひし材料の一班、(二)基督教の創設者基督の傳記幷に其の爲人、(三)創説者の死について成立せる基督教會の組織(四)其の進歩發達及び其を受容せし國民の上に及ぼしゝ影響。

第九章　基督教の教義、

右の順序に從ひて種々の方面より基督教の何たるを概説せんと欲す。

(一)　基督の傳並に教に關する余輩の研究の古近の根本的憑據

(1)古代の憑據、此の目の下に來る憑據は、之を大別して三種とす。(イ)舊約書（正經的のもの及び非正經的のもの)。正經的の書は其數三十九部あり、通例舊約書と稱せらるゝもの是れなり。本

題に對する此等の經書の價値は主として、其の内の最多數の書は正義と博愛の普及的王國を建設せん爲めに、普及的救濟者の降臨せんことを、預言せる言句を含有する事實より來る。其等の預言の大意は左の如し。此の普及的救濟者は猶太民種中より、更にユダの支族ダヴィデの眷屬中より現る可し。彼の降來は尚ほ猶太民種が其自治力を失はざる時代なる可し而して此の救濟者が其の事業を成就するや否や、猶太民種は其地上の權力を失ひ總て世界に汎く散布し、且ッ爾時建設されし王國は漸々世界に弘布し、至る所に平和を與ふ可しと。左に舊約書中の第一書なる創世記より一ヶ所又最終の一書なる但以理書（創世記と但以理書の間には二千年以上の隔あり。）より一ヶ所、合せて二ヶ所引用す可し。創世記より引用したるものはユダに與へたるヤコブの祝福なり。既に述べし如くキリストはユダの眷屬より來る可くありき。而してヤコブハヨセフを愛することユダよりも大なりしと雖も、尚ほ主要なる祝福を彼に與ふる能はざりき。而して其をユダニ與へたりき。此の祝福はヤコブ其の死するすこしく前に其の十二人の子等に與へしもの、一なり。全体の祝福は十二子の各及び其子孫の將來を告ぐる一種の預言なりき總て猶太人は其の歷史の初代より亞細亞一般に行はるゝ風習、即ち幾代間も支族の名を維持する風習を有しき。故に猶太人の歷史を貫きて該民種は十二支族即ちヤコブの十二子の子孫に分かるゝを見る。而して彼等は互に婚嫁せしとは雖も、尚ほ其各支族の本体は其の歷史の終日まで保存されたりき。

ヤコブユダに與へたりと云ふ祝福は左の如し。

ユダよ、汝は兄弟の讃る者なり。汝の手は汝の敵の頸を抑へ、なんぢの父の子等なんぢの前に鞠ん。ユダハ獅子の子の如し。わが子よ、汝は所掠物をさきてかへりのぼる彼は牡獅子のごとく伏し、牝獅のごとく蹲まる。誰か之をおこすことをせん。杖ユダを離れず、法を立る者其足の間をはなるゝことなくして、シロの來る時にまでおよばん。彼に諸の民したがふ可し。彼其驢馬を葡萄の樹に繫ぎ、其牝驢馬の子を葡萄の蔓に繫がん。又其衣を酒にあらひ、其服を葡萄の汁にあらふ可し。其目は酒によりて紅く、その齒は乳によりて白し。（創世記第四十九章八節）

今爰に先づ法意する可きは猶太人の詩想に富めることなり。彼等は常に其思想を現はすに比喩に充ちたる美はしき言辭を以てせり。右に引用せし言も、其觀念は甚だ明白なるものなりと雖も、尚ほ甚だ美はしき比喩を以て修飾せらる。該觀念は簡單にユダの支族は總てヤコブの子孫中にて最も强盛なるものとなる可しと云ふに在り。然るに今百獸の王なる獅子になぞらへて修飾せらる。猶太後世の歷史に明らかなる如くユダの支派は常に最も强盛なる支族たりき。又右の言の第二の部分は此の支派より來る可き、シロと稱する一箇人に關す。シロとは、ヘブリユー語にて救濟者の義なり。而してヘブリユー人は、一切人民は彼の周圍に聚まる可し。彼は平和と豐盛に献身する人なる可しと信せり。但し猶太の觀念に從へば葡萄と牛乳とは地上の幸福の最大記號なり。今も尚ほ亞細亞の其の部分に在りては數多の葡萄園を有し、牝牛牛乳を多く蓄ふる人は甚だ幸福なる人と思惟せらる。とにかく右の言の大主意は是れなり。ユダの支派が一の國民として、全く消失する前に、一の救濟者は其内より現れん、而して其の人は總ての人類を感化す可し。世界一切の國民は平和と正義に關する彼の觀念を受容す可しと。今猶太人は常に甚だ排外的にして、他國民と交通し、又其の宗教的思想を其の中に傳播せしめんことを欲せざる民種なることを記臆す可

し。而して如上の廣大なる感化を及ぼし、ヤコブの預言を成滿せしものは、基督を除きて他に之れなきこと明らかなり。基督の降臨前　頃になされし預言が、かく基督の生活と符合するは實に驚く可き事に非らずや。世界の人類愈々文明の途上に進まば、遂に基督の敎へ給ひし觀念の周圍に簇集せんこと疑ふ可からず。今や基督敎は一切の他の宗敎よりも多くの國民を支配せり。文明諸國は基督の周圍に簇集しつゝあるなり。プラトーの周圍に非らず、アリストートルの周圍に非らず。是れ人類の眼に映じたる最も驚嘆す可き歷史的一大現象に非らずや。

第二は但以理書中の句なり。曰く、

我また夜の異象の中に觀てありけるに人の子の如きもの雲に乘りて來り日の老ひたる者の許に到りたればすなはち其の前に導きけるに、之に權と榮と國とを賜ひて諸民諸族諸音をして之に事へしむ、其權は永遠の權にして移りさらず又其國は亡ぶることなし。（第七章十三、十四）

若し右の言の含まるゝ但以理書第七章全体を通讀せば、天は但以理の時代より基督敎設立の時代までに於ける猶太國民の運命狀態を但以理に告示せしものなること明らかなり。其告示は四大獸の比喩にて表はさる。四大獸は即ち猶太人の克服されし四王國を意味せり。而して但以理の此の預言の時より猶太人は斷へず、他國民に克服され、遂に羅馬帝國の爲めに全く破滅さるゝに至れるは史上の一大事實なり。爰に羅馬帝國は第四の獸に譬へらる。其獸は畏ろしく、猛く、强くして、大なる鐵の齒あり、また十の角あり。而して其前なる總ての他の獸を食ひかつ咬碎きて其殘餘をば足に蹈つけたりと云ふ。是れ實に羅馬帝國のなせし處なり。彼は其權力を世に建つるに於て甚だ畏しかりき。彼に反抗する總ての國民を咬碎けり。而して但以理の預言は云ふ、かく羅馬帝國は其最上の光榮を輝かしつゝあるときに、天の神は永遠なる正義の一王國を地上に建て玉ふ可しと。今羅馬帝國の存在する間に建設され其性質は正義にして、其の範圍は普及的、一切諸民諸族諸音を包括せんとせしは只基督敎あるのみ。而して但以理の預言は此の現象の外に之を說明するものなし。基督の降生前少くも三百年頃になされし豫言のかくも眞實に又完全く彼が宗敎の性質を描出せるは實に驚嘆に堪へざるなり。余輩は只之を以て基督の天職及び事業に關する預言としてよりは他の基礎によりて之を說明すること能はざるなり。

されど余は爰に基督に關する舊約書中の預言を詳論せんとするにあらず。其の主要なるものは後文基督の傳記を述ふる時に再び引示す可し。爰には只本題に對して舊約書は如何なる憑據を與ふるかを示さんが爲め、其の例として二三を引用せしのみ。而して右に引用せる二句は余の故意に揑造せしものに非らずと雖とも、よく基督敎の普及性を示せり。而も舊約書の預言は單に基督敎の普及性を示せるのみならず。余輩は實に舊約書によりて以て基督の生活及び其天職の目的の詳細を描出し得るなり。

然り而して此の事實は基督敎をして殆んど總ての他の歷史的諸宗敎より特殊ならしむるなり。基督の降生前三千年間に書かれし書が、彼が天職の各主要なる點及び彼が宗敎幷に敎說の各主要なる原理を預め詳細に表現せることは實に人世の歷史上古今無類の一異現象に非らずや。佛陀降生前の婆羅門文學は彼が降臨に關する諸事、彼が生活の詳細、及び彼が敎義の一切主要なる諸方面を表現せりとは云ふ能はざる可し。タトヒ多くの點に於て婆羅門敎の佛敎に對する關係は猶太敎の基督敎に對する關係に類似するとは云へども、韋陀の一書も佛陀の降臨及び彼が宗門の建設に關

する預言を含有しおらざることは否定し難し。回々教の場合に於ては、近來の學僧は舊新二約書中廢哈嘿に關する或る預言的言句を含めることを示さんと企圖せり。後章其所に至らば彼等が該說を組織せんとて引證せる言句の解釋の如何に牽强附會的なるか如何に可笑しきかを說示せん。前上說述するが如くなるを以て、基督教に關する憑據の一源泉として、舊約書は殆んど新約書だけ（よし其よりは大ならざるも）緊要なるものなり。

舊約書中經典的即ち教權を有せる諸書の次に非經典的即ち教權を有せざる諸書あり。通例僞經と稱せらる。十四部あり。タトヒ此等の諸書は猶太教徒によりても又基督教會によりても、舊約書の他の諸書と同一の教權を有するものとして受容されずと雖ども尙ほ、吾人の研究に向ては甚だ必要なるものなり。第一に、彼等は救世主に對する猶太人民の希望に付て大なる光明を與へ、又第二に、總てセミチック人種中最とも必要なる又有趣なる此の民族の總て他の諸書の沈默する時代の風俗習慣に付て多くの事實を與ふ。彼等は舊約書時代の終より基督の降臨に至る二百五十年間、即ち猶太人が多くの國民的戰爭を受け、屢々獨立なる一國民としての存在を毀損せし時代に書かれしものなり。

さて以上の舊約書經典的及び非經典的二種の文書は相依りて以て、猶太人が一の獨立國民として其の經路に上りし始めより遂に羅馬國民によりて全く破滅されしまでの時代の文學を完成す。此等の諸書は人心の研究す可き殆んど總ての項目を藏す。彼等は大に信據す可き方法によりて書かれたる歷史なり。一見以てヘロデタス及び他の古代の歷史家の記錄よりも信據す可きものなるを知らる。爰に吾人は哲學科學詩歌戲曲等、一言せば二千五百年間に於ける一國民全体の完全なる精神的發達を見るなり。然り而して其內に全人類を救濟し、永遠に久住する一王國を建設する救世主の降臨を望める、此の偉大なる觀念の顯現するを見るとき、吾人は大に之れに向て意を注がざる可からず。かゝる觀念を措て顧みざる人はこれ宗教の如きものゝ天性を判斷するに適せざるなり。

（ロ）新約諸書、其の數二十七部あり。以て新約全書を組成す。其內にて最初の四部、通例福音書の名によりて知らるゝものは、基督の傳記に關する上は該全書中最とも緊要なり。彼等は三人の聞持實見者によりて書かれしものなり。第一の書は馬太の筆なり。彼は稅吏にして、基督の召に從ひて其弟子となれる人なり。（馬太傳第九章九節）彼は或る所にてはレビと稱せらる。第二福音書の記者馬可は或る所にては約翰と稱せらる。是れ恐くは彼が第一の名にして、馬可は其の家族名ならん。彼は生れより猶太人にしてエルサレムの住人なり。第三福音書の記者は路可と稱せる。醫を職とせり。故に疾病及び同種の事柄に關する記事は彼の書中に於て最とも多し。彼は又新約書中次等の一書の記者なり。其の書は使徒行傳と稱せらる。基督の昇天より羅馬に於て波羅の擒にせらるゝまでの基督教會の歷史を敍せり。第三福音書及び使徒行傳の目的は路可其の恩主たるテヨピロに向て基督一生中の出來事を告ぐるに在り。彼は自から其の記述の理由を述べて曰く、

我儕の中に篤く信せられたる事を始めより親く見て道に役へたる者の我儕に傳へし如く記載んと多の人々これを手に執る故に貴きテヨピロよ我も原より諸の事を詳細に考究したれば次第を爲して爾に書おくり。（路加傳第一章一節、三節）

右の言によりて左の五事を明らめ得、一に彼は其の記載せる事柄の實見者に非らざりしこと、二

に彼の時代にありては多くの人々は基督の傳記に關する記錄を書き始めしこと、三に彼は實着者より其の記事を聞きしこと、四に此の福音書中に記載さるゝ事實は總ての基督教徒によりて信容されおりしこと、五に此福音書は羅馬世界に於ける權勢家たりしならんと想像せらるゝテヨピロに向て基督及び基督教に關する事柄を告知せん爲めに書かれしものなること是れなり。第四福音書の記者は約翰なり。彼は基督に召されし十二使徒の一人にして又基督教傳播の將來の事業に献身せしめん爲め基督自から訓育せし一人なり彼は基督に愛さるゝ弟子と稱せらる。惟ふに彼は十二使徒中最も年若き人なりしならん。故に其氣鋭にして又隨て信仰熱實なりしならん。彼が筆によりて吾人は更に三箇の書簡及び點示錄を有す。點示錄は羅馬帝國に於ける基督教徒の上に起る可かりし出來事を預言的に想觀せしものなり。彼は十二使徒中最も親愛されしものなるが故に隨て彼の福音書及び書簡は總て愛の觀念を以て貫通せらる。彼の辨說の主點は、基督教徒の精神に於ける總ての行動の源泉は愛ならざる可からずと云ふにあり。故に余は該福音書の記者と該書簡の記者とを區別するは、思想深大にして學識該博なる學者の決して陷ることなき誤謬なりと思惟す。此等の書を約翰に歸するに於て如何なる困難あるを問はず、其の記者問題即ち高等批評的問題は如何に結着せるかを論せざるも、一事の歷然たるものあり。即ち總て此等四箇の書は其誰なるやを、爰に問はざるも同じ人の筆に歸せざる可からざること是れなり。述べて爰に至れば余輩は一大問題に遭會せざるを得ず。もつとも爰には之を詳論するの暇なけれども、さればとて觀過することも能はず。故に簡單に概論す可し。所謂一大問題とは即ち、四福音の著者問題なり。近代までは人々古傳の儘に信受して嘗て此の問題に向て疑を起さざりき。されど輓近日耳曼に現起し、又多少歐米諸國に傳播せる批評派なるものは、四福音の著者に就て吾人の信受する所を否定せり。而して總て四福音書なるものは、西紀後第二世紀、及び第三世紀の間に編述されしものなりと云へり。約翰福音書に關しては殊に烈しく論評す。夫れ基督自から其の教義教說に就て書き遺せし文書なきことは世人の熟知する所なり。摩哈嘿は可蘭を傳へ、佛陀は三藏を殘せりと云ふ。されど基督に就ては全くかゝる傳說なし。然りと雖ども彼が言行に付ては西紀後第一世紀の早代に在世せし諸學者の記錄せしもの多し。パピアスは西紀後第二世紀の上半期間即ち使徒約翰の死を去る五十年ならざる時代に在世せし人なるが、吾人の今日有するか如き、福音書の存在に付て見證をのこせり。基督の生活及び言行に關する記錄の大數が多くの學者によりて記されしことは眞實なり。されど吾人の今日有する四福音書は其著者の一人なる約翰の死後未だ全く五十年を經ざる時代に既に基督教會によりて一般に受容されおりしなり。ダヴイド、スツラウス氏（同氏の說に付ては本講中屢々論せり）も此の事實は受容されおりしなり。けにかゝる歷史的事實に反對して、四福音書の著者を疑議するは魯莽の業なりと云はざる可からず。又第二世紀の後半期間にありては、イレニユス、クレメント及びターチユリアン等の如き人々の遺書中に福音書中より引用せる言句の數多存在するを見る。殊に其の引用の最多數は各々其の存在する福音書の名目をも有せり。或人曰く、タトヒ總て此等の四福音書を全く失ふも、吾人は最初の三世紀間の基督教徒が吾人に傳へたる文書中より再び彼等を復成し得可しと。此の言實に面白し。されどスツラウス氏は歷史の他の部分より多くの例證をあげ來りて、此等の書は後世の僞作なり、と論破せんとす。されど此の說此の場合に於てはあまり强力ならず。第一に四福音書若し一僞作者の手になり

しものならば、該偽作者は必ずや十二使徒中の名を撰ひて其等の書に冠せしめしならん。何ぞ馬可とか馬太とか云ふか如き、かゝる世に知られざる人々の名をとらんや、かゝる基督教會史上の著名ならざる人々の名を撰ばんや。第二に福音書若し偽作ならば該偽作者は馬太の如き名の代りにペトロ又は他の大使徒の名を偽作せしならん。第三に余輩は福音書中毫もかゝる奸計に對する動機を看出さざるなり。何故に基督教の早代に於ける人が毫も文學的價値を有せざるかゝる書を偽作したりしならんか。其等の書は或る歴史的出來事の平易簡明なる記錄に外ならざるなり。スツラウス氏一疑問を呈出して曰く、「何故に其の數は四箇ならざる可からざるか。他に多くの福音書ありて存す。バルナバスの福音書、ペテロの福音書の如き是れなり」と。氏はいと得意顔に之を呈出されたれども、余輩は之れ別に困難なる問題とは思はず。惟ふに基督の死後直ちに、彼が言行及び壯年時代の出來事を集めて一書を編成せんとするの計畫は數多現はれしならん。而して該種の多數の書中にてかの四書は總ての信徒に向て最とも滿足なるものとして、又基督の言行及び傳記の標準書として撰擇されしならん。實に其等の記者の名其物は其等の書の信據す可きものなることを告ぐるなり。馬太はもと稅關吏たりき。故に書法に付ては或る智識を有せしならんと察せらる。パピアスは云へり。馬太はもとヘブリユー語を以て其の書を記せしが、後希臘語に譯翻されたりと。馬可は彼得の書記の如き職をとりし人なりき。さらば彼得の命を受けて其書をかきしものならん。路可は醫師なりき。彼は其の使徒行傳中の言より察せらるゝ如く歴史的嗜好を有せしものなること明らかなり。

譯者曰、下文の第一第二の二者は別に逸なきを以て之を怪みしが、印刷おはりし切迫しおるの故、とにかく原文のまゝに譯しおき、夫より著者に問合せしに、やはり原文の誤にて第一第二を合せて第三一とし、第二を第二とし、第三を第三なる目を省く可しと申し來られしが、其の書面幸に本文の印刷校正の際に到着せしを以て爰に之を正す。

されど最大の論辯は約翰福音書に關して起れり。基督教に反對する人々は總て其の信據す可からざることを主張せり。而して其の理由とする處は單に該福音書全体は甚だ心靈的なる計畫の上に書れたりと云ふにあり。蓋し該福音書の記者は愼嚴に歴史的物語の線路をつたはず。總て他の三福音書の有する多くの事柄を省去せり。彼は基督の降誕、奇跡の多數、聖餐禮及び其他の事柄を省去せり。而して此等の省去は即ち該書の信據す可きことを否定する機會を與へたり。されど爰には此問題を詳論すること能はず。若し然かせんと欲せば大卷の書を要するなり。故に只其概要を論ずるに止めん。余の見る處によれば該福音書の眞實なることは、若し該書に向て他に其の記者を求めんと欲せば大に歴史を攪亂せざる可らざる程、明らかなり。恐くは該書の計畫を精究するより確かなること非らざる可し。既に述べし如く、使徒約翰は十二使徒中最とも基督の親愛を受けし人なり。彼は常に基督の胸によれり。故に其の三年半基督に隨伴する間、人情自然の發達として愛情及び同情の二情は彼に於て尤とも發達せしなる可し。而して彼に關して吾人の有する總ての文書中、彼は常に愛に充ちたる人として描出さるゝを見る。一切諸人に對する彼の勸告は「基督我儕を愛し給へる如く、互に相愛す可し」と云ふにあり。實に此の言は該福音書全体の計畫の秘論なり。該書は冒頭先づ大初より基督の体と神の關係は如何なるかを說き、進んで基督の世に現顯せし動機に及べり。而して神をして此の世に基督を送らんとの念を起さしめし眞の動機を左の如く記せり。「それ神はその生たまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずるものに亡ぶること無くして永生を受けしめんが爲めなり」（約翰第三章十六節）而して此の神を動せしてふ愛の動機は又總て吾人の行爲の動機たらざる可からず。基督其の諸弟子衆に向て與へたる最終の誡は、「われ新誡を爾曹に予ふ、即ち爾曹相愛す可しとの是れなり、我なんぢらを愛

する如く爾曹も相愛す可し」と云ふ言なり。是れ實に約翰福音書の首尾なり。而して其中間に介入する物は基督の生活中の種々の出來事及び彼の教誡にして彼は其の神より受けし高大なる天職を如何に成就せしかを示せり。爰にレナン氏の提出せし異議は左なり。基督若し馬太、馬可、及び路可傳中に見もるが如き言を述べし人ならば、約翰傳に見もるか如き高尚なる言を發する能はざりしならん。又若し約翰傳に見もるが如き高尚なる言を發せし人ならば他の三福音書に見もるが如き言をなさゞりしならん。吾人は如何にしても其等の言を以て、總て同じ人より出でたりと信ずる能はず。約翰傳の言をなせしが如き人、如何で他の三傳中の言を出すを得んやと。されど此の異論に答ふるは蓋し難事に非らず。世俗の歴史上にもかゝる場合は少なからざるなり。之れ既に多くの神學者の答解せし所なり。左に一例をあげて之を答解せん。希臘の賢哲ソクラテスの場合は大に之に類似す。彼が傳記哲學は其の弟子ゼノフォン及びプラトーの手によりて吾人に傳はれり。而してゼノフォンは歴史家なりし故、彼の書は全くソクラテスの歴史的生活を描寫せり。只折々に哲理に關する彼が言を挿入するのみ。然るにプラトーは神秘哲學者なり、故に彼は全くソクラテスの外部的傳記的方面を省き、精神的内部的見點よりして彼が心靈的生活の方面を精寫せり。若し只該二書のみによりて見れば決して、ゼノフォンのソクラテスはプラトーのソクラテスと同人なりとは見へず、全く異なりたる人と見もるなり。今之に均しき或物は又約翰傳に就ても云はるゝなり。約翰は始めより基督の愛を主題とせり。故に勿論基督の内部の思想を研究せしならん。然るに他の三人は寧ろ歴史的穿鑿に傾けり。さらば只彼の歴史的言行を見又之を寫さんことを之れ勉めしならん。

余の見る所によれば、此の困難なる問題を論述せる諸學者の更に觀過せる一點あり。外部の駁擊に反抗して該書の信據す可きことを辨護せんとする人も、又其眞實を攻擊する敵論者も、孰れも共に觀過せる點なり。何をか然か云ふ。即ち該書に記されたる教説の宣説されたる時是れなり。使徒約翰は基督のガリリーに於て過されし生活の部分を省き、而して只エルサレルに於て過されし部分のみを採れり。此の事よりして又吾人はエルサレルに於ける以前の遊歴より最後の遊歴を區別せざる可からず。レナンの心をして大に迷はしめし總て其等の高尚なる教説は其の最終の遊化の間に垂説されしものなり。而して他の三傳記者は總て之を省けるに總て他の遊化を省きたる約翰のみ獨り之を詳記せり。かゝる次第なるを以て余輩は今其等の教説の垂説されし場合を考究せざる可からず。之れ其の死に就ける前數日の事なり。基督は其の終の近づけることは十分覺識しながら此の祭典につらなれり。經に記して曰はく、「イエス此言を語畢て天を仰ぎ曰ひけるは父よ時いたりぬ爾子なんぢの榮を顯さんが爲めに爾の榮を顯し給へ」（約翰傳十七章一節）全体かゝる場合に於ては、最も魯鈍なる人と雖ども其精神激昂し、思念高妙の域に到達するものなり、人間の心意機關は其の最大の速力を以て運轉する時なり。故にかゝる心意の昂奮熱上の瞬時にありて發喘せらるる言語は必ず日常普通の言語より甚だ異なれるものなり。近來此の點を能く明説するに足れる一事實現れたり之れ殺人罪を犯せるヘンリーなるものゝ最後の演説なり。裁判官はヘンリーに向て、今法庭に於て裁判官一同協議の上汝に死刑の宣告を下したることなるが汝は此の宣告に向て不當と認むる所あらば宜しく演述せよと云ひけるに、ヘンリーは悄然起立して一場の長演説をなせり。然り而して該演説は實に哲學演説の一好摸範なりとは爾後屢々諸人の口にする所なり。人間最大

の罪惡を犯せるか如き人が如何でかく心靈に充溢せる思想を宣說するを得しかとは、諸人の常に怪訝する所なり。レナン氏若し生存しおらんには殺人者たるヘンリーは心靈的演說者たるヘンリーに非らざりきと論辨するならん。

若し如上の言が普通の犯罪者に就てすら云るゝならば其の全生活を一の理想の爲めに献供し、常に人類を導きて心靈的發達の無窮道に進ましむるため高尙なる理想を發顯せしが如き人にありては如何にぞや。

更に第四福音書の攻擊者が嘗て答解を企てざりし一問題あり。即ちかゝる高尙雄麗なる心靈的思想を現顯せしか如き人が如何で他人の名を以て其の書に冠せしめんや。文學史は吾人に傳ふるに多くの深妙幽玄なる心靈的著作を以てせり。されど其等の著作は各々其れに附着して眞實なる著者の名を有せり。而して其の所說の心靈的資質其物は懷疑家を制して其の信據す可きことを疑はざらしめたり。人は同時に玲瓏たる天使の心と暗黑なる惡魔の心を併有する能はずとは甚だ强力なる論辨なり。されば かく心靈的なる敎說を垂說せし人が如何で約翰の名を僞作せんや。西紀後第二世紀の初代に於て總ての福音書中の最とも深妙なるものを著し得る靈能を具しながら、而も其の著せし書に他人の名を冠するが如き事をなせし人はそも誰なるか。何故に彼は自からの名を以て之に冠せざりしか。若し然かなしたらんには基督敎の存在する限は、彼の名を不汚ならしめたらんに。今此等の問題の一も斯福音書を排擊する人々によりて答解されず。惟ふに此等の問題は到底彼等の答解し能はざる所にあらざるか。

基督敎排擊者の現傾向は第四福音書の信據す可きことを排斥し、始めの三福音書を以て眞實として受容するにあり。されど余獨立の見解によれば、第四福音書の內容的證據は他の三福音書の外部的證據よりも確實なり。

されど其の如何なる學派に屬するかを問はず、近世の批評家の所論に正當と認む可き一點なり。即ち新約の諸經が合集されし後、時々添加の行はれたることありと云ふ事是れなり。げに其等の添加は甚だ僅少の小なるものなりき。されど尙は僅少の添加の行はれたるは事實なる可し。而して此事實は種々の翻譯の間に差違の存するによりて明らかなり。即ち吾人に傳はれる希臘の寫本シリア、ペシヒト及びアルメニア譯の如き翻譯の間に差違の存在するによりて、僅少の添加の行はれたることは明らかなり。其等の差違は毫も福音書の眞實を毀損せざる程、不必要なるものなり。而も彼等の存在するは事實なり。而して此は筆記者が不注意より起れるものなるか、又は時々諸敎會協贊の上、言句をして更に明亮ならしめ又句法をして更に能く整へしめんとの企圖より起れるものなるかを示す。されど疑ひもなく今吾人の有するが如き四福音書は各其の名を戴ける記者によりて使徒直接の監督の下に書かれたるものなり。

四福音書に次で使徒行傳あり。新約書中の各事各物を疑議せんと欲する近世の批評家は本書の著者に付ても亦誤謬を發見せりと云へり。されど輓近有名なる希臘學者歷史家たるカルチュース氏の辨護によりて彼等の攻擊は其勢力を失へり。但しカルチュース氏の辨護は主として內部の證據を基礎とするものなり。彼言ふ、遊化の場所の正しく記載され、現起せし出來事の精細に叙述せらるゝ、到底僞作者のなし得る所に非らずと。余輩は斯有名なる敎授の說に贊成するなり。

此書よりして余輩の得る所の主要なる知識は基督の死後基督敎徒を支配せし觀念、羅馬帝國に於